

關西九館所藏 中國書畫錄

# 目次

凡例

前言

圖版目録

原色圖版

單色圖版

本文

(作品名)	(作者)	(時代)	(所藏)	(圖版)	(本文)
一 十七帖	王羲之	東晉	京都國立博物館	9頁	65頁
二 集王聖教序(上野本)	王羲之	東晉	京都國立博物館	22頁	91頁
三 集王聖教序(黒川本)	王羲之	東晉	黒川古文化研究所	26頁	98頁
四 五星二十八宿神形圖	傳張僧繇	梁	大阪市立美術館	33頁	111頁
五 伏生授經圖	傳王維	唐	大阪市立美術館	40頁	118頁
六 寒林重汀圖	傳董源	五代	黒川古文化研究所	44頁	126頁
七 喬松平遠圖	傳李成	北宋	澄懷堂美術館	47頁	132頁
八 江山樓觀圖	燕文貴	北宋	大阪市立美術館	50頁	135頁
九 秋山蕭寺圖	傳許道寧	北宋	藤井齊成會友鄰館	59頁	147頁
十 秋塘圖	傳趙令穰	北宋	大和文華館	63頁	153頁
擔當者一覽					

HP公開のPDF版では都合により圖版は掲載しておりません。どうぞ御了承ください。

## 凡例

- 一、本書は、關西九館に所藏される書畫のうち、『中國書畫探訪』（二玄社、二〇一一年）掲載作品を中心に、落款、題跋、鑑藏印、箱書などの文字資料を圖版・釋文・注解によって紹介することを目的に編纂した。
- 一、本巻には東晉～北宋までの計一〇件を収録した。
- 一、各作品の記載項目は、箱書、裂、題簽、款記、跋、鑑藏印、付屬文書の順を原則としたが、作品の状況と参照の便を考慮して適宜變更した箇所もある。
- 一、寸法の単位はセンチメートルで、畫面の縦×横で表わした。
- 一、釋文には、句點を施した。また、作品に書された割注については（ ）を、押印箇所などの位置を示す場合には「 」を用いた。
- 一、判讀出来ない文字は、「右半缺」や□□などと適宜表記した。
- 一、釋文中の年紀、地名、人名、書名や鑑藏印の押印者など、内容の理解に資する事項には注を付けた。また、傳來の過程や研究史に關する情報・知見について備考欄で解説した。
- 一、著録欄には、當該作品あるいはその可能性のある作品が収録される文献を挙げた。
- 一、参考文献欄には、その作品を研究する上で基礎となる論文、圖録等を挙げた。ただし、圖録は戦前發行のものを主とし、簡便を旨とした。

## 前言

關西中國書畫コレクション研究會は、關西の中國書畫を收藏する和泉市久保惣記念美術館・大阪市立美術館・觀峰館・京都國立博物館・黒川古文化研究所・泉屋博古館・澄懷堂美術館・藤井齊成會有鄰館・大和文華館の九館と、關西で収集された橋本コレクションが寄託されてきた澁谷區立松濤美術館の學藝員が中心となって活動している。

これらのコレクションは、いずれも近代になって形成されたもので、折しも二〇一一年は、収集の契機となった辛亥革命から百年にあたっていた。そこで、舊來各館でそれぞれ觀覽に供されていた名品を、一年程で總覽する機會を作ろうと企てたのが、「關西中國書畫コレクション展」である。同年一月から翌年二月にかけて、十八の展覽會をリレー方式で行った。また十月には、國際シンポジウム「關西中國書畫コレクションの過去と未來 収集から一世紀、その意義を考える」を開催し、コレクションに関する研究成果を發表した。

その活動の基礎として、我々は二〇一〇年からほぼ一箇月に一度、各館の所藏品の調査研究を行ってきた。それは作品そのものの調査に止まらず、鑑藏印・題跋・題字・題簽・箱書から包装・書付などのあらゆる附屬品に及んだ。言うまでもなく、作品の遞藏やコレクションの形成を知るうえで重要な資料だからである。それらを畫像に收め分類整理する作業を相互協力により進め、今や相當量のデータが蓄積されつつある。ところが、中國書畫に限らず、こうした資料は展覽會場で陳列されることはまずなく、圖録などの印刷物でも割愛されることが多い。ほとんどの場合、所藏館外部の者は閱覽することはおろか存在すら知りえないのが現状であろう。研究誌などで報告されたとしても、單館の一部作品に限ってのことである。我々の研究會では、幸いにも各館の研究者がこれらを共有できた。そこでこれをさらに一般に公開すべく、本年度から資料の會讀と刊行に向けた準備を開始することにした。

本書はその成果報告の第一冊である。まず連攜展覽會の公式ガイドとして刊行した『中國書畫探訪 關西の收藏家とその名品』（二玄社、二〇一一年三月）に掲載した作品から着手することとした。收藏作品の總數からすれば極一部に過ぎないが、繼續していくことによつて、全館を包括する貴重な資料となると確信している。

ご高覽いただき、各位の研究に資料として些かでもお役に立てば幸いである。また、誤脱などの不備があれば、ご教示いただきたい。最後に、本會の研究と報告書の作成のために助成を賜った、公益財團法人ポーラ美術振興財團様および公益財團法人三菱財團様に心より御禮申し上げます。

二〇一三年三月三十一日

關西中國書畫コレクション研究會

一 十七帖 王羲之

京都國立博物館

東晉

北宋拓本

紙本墨拓

各頁二五・一 × 一六・四

外題箋

唐揚十七帖

龍翔篆玉題箋<sup>(1)</sup>

「(朱文長方印)」

題箋

〔帖首第一開左側〕

摸十七帖神品

天水世寶

「葦閒書屋」(朱文方印)<sup>(2)</sup>

唐摸十七帖

烟客先生題、充齋書<sup>(3)</sup>

「充齋」(朱文橢圓印)<sup>(4)</sup>

跋

〔本紙第一三開左(第二六葉)、左脇貼付短冊形〕

「葦閒書屋」(朱文方印)、「姜宸英西銘氏」(朱文方印)<sup>(5)</sup>

方印)

太宗得逸少真行二百九十紙、其古本多梁隋官書、隋則滿騫<sup>(6)</sup>、

徐僧權題署、帝又令魏・褚各署名卷後、世以僧權不全本為<sup>(7)</sup>

十七帖第一

題跋

〔帖首第二開右〕

「八牖瑯玕」(朱文長方印)、「經畬」(朱文長方印)、「徐乾

學印」(白文重廓方印)、「健菴」(朱文方印)<sup>(8)</sup>

乾學頓首謹啓、史館西溟先生年世兄執事、乾學行期、定於<sup>(9)</sup>

廿二驪從同往、甚善、十七帖謹題奉繳、不具<sup>(10)</sup>

乾學惶恐再拜

「怡顏」(朱文橢圓印)、謹空、「傳是樓」(朱文長方印)<sup>(11)</sup>

〔帖首第二開左〕

昨日、得與山言會、必有成說、望詳細示我、好作商量也、聞劉大老言、十七帖攜來、此奇世之寶、弟欲一借觀、決不損污、且尊寓頗不固密、恐有小偷之患、未審能相信假閱否、極知慎愛、未敢相強、如可、須封好付董奴道翁老世兄、世弟用錫頓首<sup>(21)</sup>

〔帖首第三開右〕

右軍十七帖歷代摸勒、入寶晉·淳化·東書堂諸帖、幾於濫觴、此帖歷宋至今、神采煥發、當是神靈呵護、真足寶也

庚申四月、獲觀于白澤禪舍<sup>(22)</sup>

鑑湖八七叟祁多佳<sup>(23)</sup>

〔帖首第三開左、第四開右〕

「無所住菴」(朱文長方印)、「丁」(朱文圓印)

唐張彥遠右軍書記云、太宗篤喜右軍書、禁中草書有三千紙、率以丈二尺成卷、貞觀中置鴻文館、詔京官五品以上嗜書者二十四人隸館中、出禁中法書、以授之、十七帖是右軍烜赫著名之帖、特敕付直館、臣解无畏勒充館本、臣褚遂良校無失、勒名帖後、黃伯思東觀餘論有先唐石刻、尾有敕字及褚遂良·解如意校定語、如意无畏字、則此本之爲唐摸唐刻

可據不疑者、而紙乃秦中搗麻、墨是上黨松煙、久愈黧黑、且豪髮盡備、了無差謬、則又唐時所打之可按者、冊中題跋及署名之人、自祁止祥而下、凡三十有四、姜桐侯自跋一、西溟兩跋、又附徐健菴與西溟簡尺一紙、聯豪染墨、竝親摛詞、文藻冊中、戢香卷內、可云、益加烜赫者、然諸跋中、曹秋岳言、貞觀中裴業進士以草書進、首有十七日字、遂呼十七帖、今石刻傳世有兩本云云、似是以裴進卽成此卷者、與右軍書記不合、徐之瑞字蘭生、晚號牯翁、前明孝廉、才極奧麗、杭人也、雖有名劍乘珠不換之語、而轉處不清、似今臬司署中石卽此本者、翻覺珠劍之詞爲世情漫爾語矣、徐立齋帖中鼻祖一語、發前人所未、世以昇元刻澄心堂帖在淳化前、呼爲祖帖、不考貞觀之更先爾、又云、章子厚得此帖、爲米元章購去、逐字剪截、以易畫、此事刻邢子愿重摸宋搨本後、是又以硬黃本爲打本矣、姜桐侯自跋言、先有邢子愿摸本、既得此本、校之、纖豪無異、其爲邢摸藍本無疑、不知邢本胡母氏帖後、卽五帝以來備有畫帖、此本胡母氏後、乃吾有七兒一女帖、又譙周有孫帖、此本敕字上畫中段全是渴筆、邢本只邊際微渴、此本僧權二字、全闕其左、邢本人木尙存、其他邢本多闕字、而此本悉完、又渴筆·收筆·放筆不同處尙十餘、則桐侯之言、又安足據乎、蓋唐代摹重書

學、搨書有人、縛筆潢紙有匠、檢校皆精鑑鉅公、足爲後世法、開元之末、館始廢、摸搨之本應不寂寥、邢摸藍本是魏泰所藏硬黃本、刻于宋代無疑者、而桐侯遽以纖豪無異、藍本無疑、以斷此本、鹵莽粗疎、何能爲此帖主人、西銘又以(40)僧權二字不全、乃十七帖第一本、語本元黃學士晉卿只言、僧權二字不全、是梁之徐僧權也、初無第一之斷、姜氏既有此本、便欲主名第一、人情大抵然耳、徐健菴云唐摸晉帖下眞迹一等、不及刻打、乃論硬黃本語、非打本跋詞、況安知不從同時本上再摸者耶、寶泉述書賦記署押縫尾之人、僧權似長松挂劍、滿騫如磐石臥虎、此本與邢本、解·褚·僧權筆法一同、了無松劍之微、則鑑古者亦不當恕而過之、群公爲承學所歸、因聊疏可商、用俟博雅論定、非輒掎擊前人也、此帖姜氏得之鄉先輩、先輩得之雲間顧氏、今嵩喬亦從鄉先輩所得、而亦顧其姓、何巧合乃爾、豈寔有數、以存其閒耶、徐壇長一跋、低回鄭重、欲姜氏後人永保此帖、足覩師生之義、然嵩喬品學雙茂、西溟有靈定欣付託得人、定無憾焉爾矣

杭郡丁敬身跋(42)

「敬·身」(朱文連珠方印)

帖上有南陽家藏及中吳陸氏松蘭堂印、當在雲間顧氏之前、

不能悉其誰何、殊媿淺陋、嵩喬有聞當再告我、又、帖上繆惡之印及侵玷字上者、須悉揩去、付好手重裝之、庶爲此帖一洗點流矣

〔帖首第四開左〕

「樛李」(朱文長方印)

貞觀中盛購右軍墨跡、裴業進(43)士以草書來上、首有十七日字、遂呼十七帖、今石刻傳世者二本、(44)唐刻尾有敕字及解勒褚校者、卽此本也、南唐後主得賀知章所臨散刻澄清堂帖中、(45)王著再摸入淳化帖者、賀本也、不及敕字本遠甚、右軍眞蹟存者幾絕、得此、足以豪矣(47)

庚戌中秋、樛李曹溶(48)

「曹溶之印」(朱文方印)

〔帖首第五開〕

「歸邨」(朱文橢圓印)

右軍十七等帖、諸刻多有之、此爲唐摸祕本、紙墨迥異、神采奕奕、下眞蹟一等物也、不意殘年獲此奇觀、聊記歲月以志慶幸、西銘年翁道長、攜示于拙修堂、拜觀漫識

時乙巳新秋二日、弟王時敏(49)

「王時敏印」(白文方印)、「煙客」(朱文方印)

「半衲」(朱文長方印)

京師、於孫北海齋頭見大觀帖<sup>(50)</sup>、乃高宗所以賜輔臣者、始知宋搨與近本迥異、禾中項氏所藏王氏進帖爲唐雙鉤、皆大令<sup>(52)</sup>以下、右軍手跡爲少、西銘年兄攜此帙見示、摩娑久之、所謂過江十紙、頓還舊觀矣<sup>(53)</sup>

乙巳初秋、婁東吳偉業識<sup>(54)</sup>

「吳偉業印」(白文重廓方印)、「梅邨」(朱文方印)

「王孫」(朱文長方印)

乙卯上巳日、錢繼章敬觀<sup>(57)</sup>

「爾·裴」(朱文連珠方印)

庚午九月廿八日、海昌查嗣琛德尹<sup>(58)</sup>、仝姪昇聲山<sup>(59)</sup>獲觀於磬石庵

「查」(朱文圓印)

「臥游」(朱文橢圓印)

十七帖碑、宋室南遷、輦致行在、今植之觀察署庭者是也、

歲久、摸搨漫漶、此帖點畫無失、紙韌堅完、誠佳本也、江南遘亂、圖史金石、毀於兵燹、十不一存、西銘獲是本、雖酬之千金之劍·炤乘之珠、豈可易哉<sup>(60)</sup>

庚戌重九、錢塘徐之瑞識於精嚴蘭若<sup>(61)</sup>

「之·瑞」(朱文連珠方印)

〔帖首第六開右〕

新秋風急雨沈陰、消得鷺群舞雪潯、千載墨池誰繼響、婆娑病目看來禽

七夕前二日、宋實穎題<sup>(62)</sup>

「宋實穎印」(白文方印)

康熙九年庚戌七月廿六日、獲觀此帖於郡城天寧寺之碧蓮房、曹爾堪<sup>(63)</sup>

「爾堪印」(朱文方印)、「顧菴」(白文重廓方印)

「白岳」(朱文長方印)

戊午小春白岳汪楫觀於燕都僧舍留案上十日、不獲摸寫一過、爲之憫<sup>(64)</sup>

「汪楫」(白文重廓長方印)



庚子十月廿一日、南州王猷定獲觀于西湖之數峰樓

「王猷定印」(白文方印)、「于一」(朱文方印)

丙午寒食後五日、長洲徐晟獲觀此帖於桃花塢

「臣晟」(朱白文方印)、「禎起」(朱文方印)

癸丑六月、嘉興徐嘉炎·秀水朱彝尊、同觀

丙辰長至前四日、鹽官陸嘉淑觀於安國僧舍

〔帖首第六開左〕

鋒鏘森如、摸稜未倒、洵爲宋搨、庚戌秋清、訪西老道兄於

鴛湖蕭寺、獲觀墨寶、又得良友、是爲二快

湖上同學弟、吳山濤

辛未正月、長洲何焯、獲觀于都下

癸丑五月十六日、勾吳嚴繩孫觀於燕臺客舍、西溟言此已久、

果宋搨善本無疑

「繩孫之印」(朱白文方印)、「蓀友」(白文方印)

戊午十月十九日、陳奕禧觀于京師寓舍

此真隔麻舊搨、是北宋時物、五百餘年、紙墨如新、當有神

靈呵護之、癸丑七夕後一日、華亭沈楫·沈荃全觀漫識

「楫」(朱文方印)、「沈荃之印」(白文方印)

癸卯春、桐侯以宋本十七帖見示、閱十三年、西溟于金陵復

出此本、如逢舊友、以數見爲樂也、馮萼舒識

「馮萼舒印」(朱文方印)、「慎貽」(白文方印)

〔帖尾第一開右〕

閣帖二王書多斷缺、不可讀、此帖所收文義完好、辭旨蕭散、

想見昔賢高致、文皇時、右軍書盡在御府、此尤是最佳書、

經虞·褚諸人選擇、又入石最先、亦帖中鼻祖也、章子厚言、

米元章逐字剪截、以易書畫、則知北宋時已自難得、宜西銘

什襲寶之耳、立齋徐元文謹跋

「徐元文印」(白文方印)、「立齋」(朱文方印)

〔帖尾第一開左〕

自信張芝雁陣齋、竭來野鷺與家雞、  
續得過江書十紙、神明先伏庾征西、  
裴業貞觀入貢初、煙霏霧結狀何如、  
外人千載猶珍重、不數嚴家餓隸書、  
日給櫻桃子一囊、山川遊目樂徜徉、  
尙平心事誰能識、浙東還留種樹方、  
角聲灑掃已相猜、分郡行人又不材、  
自是將軍多止足、金堂玉室待君開、  
懸雷山前覓紫芝、樂遵滄海去無時、  
仙人游戲皆龍鳳、多少兒孫飲墨池、  
奉題西溟先生世藏十七帖、并政、河中吳雯<sup>(104)</sup>  
「吳雯之印」(白文方印)

〔帖尾第二開〕

「青□案」朱文長方印  
宣和遺寶尙流傳、煥若神明覩往年、  
猶記弘文曾勘校、烟霏霧結<sup>(105)</sup>相聯、  
渡江風物邈前賢、雞鶩紛紛卻未崙、

一自治城閑北望、憑將墨妙灑江天、

講堂重闢蜀山川、遠想登臨一慨然、

煩致櫻桃日給子、相依種菓樂歸田、

槐影籠牕研水添、硬黃臨寫自鈎填、

他年欲訪山陰雪、贖乞西堂九萬箋

丁卯<sup>(106)</sup>初夏、敬觀西溟先生所藏宋搨十七帖、漫識四絕、求正、

琴川歸允肅<sup>(107)</sup>

「歸允肅印」(白文方印)、「孝儀」(朱文方印)

〔帖尾第三開〕

唐張懷瓘論草勢<sup>(108)</sup>、一筆而成、唯王子敬明其深詣、故行首之  
字、往往繼前行之末、逸少草書、雖圓豐妍美、乃乏神氣、  
無戈戟、又云、逸少草書有女郎才、無丈夫氣、<sup>(109)</sup>子敬草逸氣  
蓋世、家尊纔可爲其弟子耳、懷瓘以一筆成書、爲草書之精、  
此不知書者也、凡草書者、點染曳帶之閒、若斷若續、婉轉  
生趣、而稜鋒宛然、真意不失、此爲入神、唐文皇集右軍書、  
擇其尤者、爲十七帖、其晉書制贊羲之傳曰、煙霏霧結、<sup>(110)</sup>狀  
若斷而還連、鳳翥龍盤、勢如斜而反正、知此者、可以得此  
帖之神妙矣  
宸英識<sup>(111)</sup>

「宸英」(白文長方印)

「向山」(朱文瓢印)

此帖著盛名於海內、向侍師側、未遑請觀、今年道泳<sup>(112)</sup>世兄攜以遊京師、始得假玩、道泳行廚枯索、又謀一艱鉅事、未遂、有要人欲以重值得此者、道泳不許、此帖不已保三世爲姜氏有乎、不以貧劇易其先世之重器、寶有故家文獻之遺、高風孝思、吾師於是爲不死矣、仰歎之餘、因敬書吾師手蹟之末、以告姜氏世世爲子孫者、康熙丙戌中元前二日、宿遷門下士徐用錫拜識<sup>(114)</sup>

「徐用錫印·吾岡」(上白文·下朱文連珠方印)

〔帖尾第四開〕

「濟南」(朱文瓢印)

宋人最重閣帖、山谷嘗恨無二萬錢致一本、此唐拓十七帖、

雖千金、豈可易哉

庚午<sup>(116)</sup>元夕、濟南王士禛書<sup>(17)</sup>

「王士禛印」(白文方印)、「阮亭」(朱文方印)

「經畬」(朱文方印)

唐摸晉帖下真蹟一等、慈谿姜氏兩世寶之、西溟往歲入京師、

攜以自隨、余見之已十七年、乞借臨摸、輒靳不肯、庚午春、西溟奉旨偕余南回纂輯書史、將行留此帖數日、不忍奪其好也、爲題而歸之

徐乾學<sup>(118)</sup>

「徐乾學印」(白文重廓方印)、「健菴」(朱文方印)

「客隱」(朱文長方印)

辛未<sup>(119)</sup>九月、客吳門、寓汪異三<sup>(120)</sup>之遂懶軒、獲觀此帖、時方爲

西溟作湛園未定稿序竟也<sup>(121)</sup>

「錢澄之印」(白文方印)、「飲光」(朱文方印)

田閒八十叟錢澄之書<sup>(122)</sup>

「九峪」(朱文橢圓印)

壬申<sup>(123)</sup>新秋、同西溟先生客武塘、以家藏十七帖、

博觀此墨寶、西溟曰、吾唐摸尚于宋搨、因反覆校閱數晨夕

而後歸焉

太原閻若璩題、男詠書<sup>(124)</sup><sup>(125)</sup>

「閻若璩印」(白文方印)、「閻詠之印」(白文方印)、「復申」

(朱文方印)、「偶然欲書」(朱文方印)

〔帖尾第五開右〕

昔、邢子愿云、于某家見此帖、真宋時祕本也、手跋數行、  
摸刻行世、余嘗珍之、壬午歲<sup>(26)</sup>、鄉先輩館于雲閒顧氏、偶得  
此歸、精彩煥發、與邢刻纖豪無異、其爲藍本無疑、重值得  
之、傳之子孫、世世保之  
癸卯春日、重裝、桐侯晉珪書<sup>(127)</sup>  
〔白文方印〕

「桐侯父」〔白文方印〕、「姜晉珪印」〔白文方印〕

〔帖尾第五開左〕

「西柴」〔朱文橢圓印〕  
忽□于一王二丈題字、爲之潸然<sup>(129)</sup>、蓋距今三十三年矣、聞當  
日極力推西溟·竹垞兩君、必爲一代聞人<sup>(131)</sup>、今信然矣、先輩  
眞賞乃爾、若璩又題<sup>(133)</sup>

「百詩」〔白文重廓方印〕

葦閒先生<sup>(134)</sup>出十七帖見示、前後俱有諸尊宿跋語、定爲唐摸善  
本、眞天下第一至寶也

乙亥二月九日、汪士鋐<sup>(135)</sup>謹識

此帖有名海內、余與葦閒先生同客都門、不獲見、先生歿後

八年、始得觀于吳門之鄉思樓、豈見之遲早、亦有定數耶  
楊賓識<sup>(136)</sup>

「大瓢」〔白文方印〕

〔帖尾第六開〕

「定甫」〔朱文長方印〕

墨跡慨久泯<sup>(37)</sup>、求之碑搨間、數手繪一眞、豈有鬢眉全、渺矣  
右軍書、大意一二存、辨論若聚訟、眞贗原無關、善本皆可  
摸、誰果見雕鐫、形似已不貴、用筆求其先、百物聚所好、  
大力斯能肩、千金買斷碣、奇癖信有然、此本所歷多、劫火  
猶未燃、卷首十七日、卷尾敕僧權、紛紛聘考据、身世何有  
焉、流傳鮑君手、寶貴嗣昔賢、國初諸老題、拉襖相嬾妍<sup>(138)</sup>、  
我居右軍宅、戲參智永禪、掘地出破瓮、惜少邢家仙、孰爲  
人我相、一切皆雲烟、但不求甚解、請味陶公言<sup>(140)</sup>  
乾隆戊子六月七日、鉛山蔣士銓爲綠飲鮑君茂才跋<sup>(141)</sup>  
「士銓」〔朱文長方印〕、「史官」〔白文長方印〕、「我見如是」  
〔朱文長方印〕

乾隆庚寅二月十九日、堯峰張賓鶴獲觀于鮑君綠飲貞復堂、  
是日、蘿龕奚鋼攜大觀帖<sup>(147)</sup>至、共此欣賞<sup>(145)</sup>

曩余在新城、時署縣丞會稽王君師德<sup>(148)</sup>工二王書、攜十七帖自隨、乃敕字本、墨色紙色與此無異、爲北平孫退谷<sup>(149)</sup>先生家故物、曾借觀累月、不忍奪其所好而還之、後師德歿、其帖已屬之他人、前年在京師復寓目焉、今覩葦間先生此本、令人益增感慨、鮑君緣歛藏之知不足齋中、可爲得其所矣

乾隆乙未<sup>(150)</sup>閏十月六日、竹泉居士金嘉琰<sup>(151)</sup>識

「可·亭」(上朱文下白文連珠方印)、「梅花精舍」(白文方印)

〔帖尾第七開〕

「一肚皮不合時宜」(朱文長方印)

文皇集王書、丈二率一卷、卷首十七日、帖名稱亦便、摸校付館臣、精鑑鼎置、僧權失偏旁、敕字本最善、後來翻刻多、形存神已渙、遂使龍虎筆、竟爲奴書溷、何來此古拓、楮墨異采炫、碧海黑蛟蟠、丹林威鳳見、神光乍離合、烟霧或續斷、雕鐫與氈蠟、毫髮信無閒、蘭亭堪比重、棗几貽清玩、流傳真有緒、題尾盡鴻彥、徐王<sup>(152)</sup>最傾倒、吳閩<sup>(153)</sup>共賞歎、拓手自何代、持論各一見、鉛山<sup>(154)</sup>妙語留、龍泓<sup>(155)</sup>名論壇、追懷隆盛時、好古生健羨、江南昔多事、文物半星散、此帖幸無

恙、孤本爲世冠、君今善護持、鈎勒出真面、應師賀季真<sup>(156)</sup>、遠過邢子愿<sup>(157)</sup>、<sup>(158)</sup>宣統紀元春、叔蘊學人以所藏唐本十七帖惠觀、漫題長句、用誌眼福、沈龔寶熙<sup>(160)</sup>并書

「沈庵吟艸」(朱文方印)

〔付屬別紙 內藤湖南跋<sup>(161)</sup>〕

十七帖之名已見於張彥遠法書要錄、謂逸少草書中烜赫有名帖也、但未言其有石本、至黃伯思東觀餘論、乃謂先唐石刻本世間有二、且論其南唐石本·板本、及王著石本、竝不逮先唐石本具存右軍筆法、所謂敕字館本實居其一、可知十七帖爲右軍劇迹、而敕字本又爲十七帖最善之本、唐宋以來已有定評矣、然世俗所重館本(若鬱岡齋本<sup>(162)</sup>·來禽館本<sup>(163)</sup>)、皆刻於明代、謂爲依唐摸、其實未可的知<sup>(164)</sup>、獨此本、楮墨黝古、明刻所缺字皆完好、刻法精絕、惟懷仁聖教序·敦煌出土溫泉銘、足可比肩、與宋元以下碑帖、有上下牀之別、其氣象渾穆、內含生動、藹如在春風之坐、遽視似鈍、越看越妙、久而不忍釋手、則平生所見法書未有如此之異也、丁敬身定爲唐刻唐拓、允矣、此本比明刻少十行、乃爲妄人剪去者、誠爲可惜、然片鱗殘甲、識蛟龍之靈、僅僅十行之缺、豈足

以疵瑕無上鴻寶乎、此本傳自姜西溟、歷世爲名人所珍襲、諸家題跋、粲如星羅、若在他帖、可以增其價、在此帖、則殊覺若燭火之於日月耳、上野有竹君曩得此本於羅叔言參事、叔言跋語頗有戀戀之意、有竹因亟景印、<sup>(166)</sup>既以貽叔言、并頌同好、叔言之喜於是乎可知也

生平目睹右軍法書、唐搨、則喪亂·孔侍郎二帖、真草千文、舊拓、則聖教序·脩禊鼓·澄清堂帖、<sup>(167)</sup>及此帖、其尤表表者、右軍面目盡乎此矣、余於書法一意瓣香<sup>(69)</sup>右軍、雖有阮芸臺諸人抑南揚北之論、<sup>(71)</sup>獨余篤信不移、甘爲右軍僕役、<sup>(72)</sup>二三年來此等碑帖先後景印行世、余皆親衡量、以董其役、報本之願、聊得遂焉、亦一段翰墨因緣也

大正二年二月、湖南內藤虎

「藤虎私印」(白文方印)

〔羅振玉跋〕

本朝中葉、金石之學大興、士夫爭求碑刻、不復措意於法帖、近二十年間、始悟往者矯枉之過正、學者多以重金購古法帖善本、而傳世已日稀、且所謂善本皆至宋代官私諸帖當時拓本而止、唐世所摸、則曠世不可遇也、予、曩在滬既得北宋官帖殘卷·甲秀初本、不逾歲得姜西溟世藏十七帖唐摸本、

在京師復於涿州李氏得澄清堂帖、皆一時難邁之瓊寶、十五年間、先後皆歸予巾笥中、嘗自詡爲平生與翠墨有宿緣、乃不逾兩霜、先後皆以易米、此本既歸有竹先生、顧不以其祕、精印以流傳之、澄清·甲秀兩刻亦由大西見山君<sup>(174)</sup>印行於藝林、予雖如楚人失弓、<sup>(175)</sup>然可以無憾、而有竹·見山兩君之不自私、尤足以風當世也

壬子仲冬、上虞羅振玉記

「羅振玉」(白文方印)

此帖先後題識、多至數十家、而丁龍泓考證尤精密、據東觀餘論定爲唐摸、據其楮墨定爲唐拓、<sup>(177)</sup>精鑑不可易、故於此本之精妙、不待煩言、而西溟先生所論右軍法度、亦卓絕千古、惟此數十家外、似尙有脫佚、吾鄉魏玉璜、<sup>(178)</sup>之琇、柳洲遺稿中有題鮑江文得姜西溟所藏十七帖詩七言古體一章、而冊中無之、又魏詩尾有馨香三韻古相匣句、知此帖歸鮑氏時、尙有原裝之匣、不知何時亦失去也、至其流傳之迹、據諸家題識、知在明代藏雲閒顧氏、由顧氏傳甬上某氏、由某氏歸姜氏、保有三世而歸顧嵩喬、尋歸鮑氏知不足齋、又幾經轉易而歸於予、今、由予歸有竹先生、此帖所至、皆得賢主人、惟在予齋十年、一旦舍去、爲有媿耳

振玉又記

「東海愚公」(白文方印)

鑑藏印

「帖首第一開左側臺紙左下」

「玉簡齋」(白文方印) (羅振玉)

「帖首第二開左、徐用錫跋第一行下」

「鑑沙珍藏」(朱文方印) (顧桐)<sup>(180)</sup>

「本紙第一葉」

「寶藏」(朱文長方印) (用印者未詳)

「顧桐」(朱文方印) (顧桐)

「西溟」(朱文方印) (姜宸英)

「晉圭」(朱文方印) (姜晉珪)

「印文不明」(方印)

「鑑沙珍藏」(朱文方印) (顧桐)

「同右 右端補紙」

「真意堂圖書印」(朱文方印) (姜宸英)

「真意堂」(朱文橢圓印) (姜宸英)

「海寧查聲山審定真跡」(白文方印) (查昇)

「姜宸英西銘氏一字西溟」(朱文方印) (姜宸英)

「曾經金□□氏鑑賞」(白文方印) (用印者未詳)

「樵李曹溶審定書畫印」(朱文方印) (曹溶)

「同右 臺紙右端」

「旋室」(朱文方印) (羅振玉)

「本紙第二葉」

「顧桐」(朱文方印) (顧桐)

「宸英」(白文方印) (姜宸英)

「本紙第三·四·五·六·七·八·九·一〇·一一·一二葉」

「顧桐」(朱文方印) (顧桐)

「晉圭印」(白文方印) (姜晉珪)

「本紙第一三葉」

「顧桐」(朱文方印) (顧桐)

「晉圭印」(白文方印) (姜晉珪)

「(印文不明A)」印

〔本紙第一四・一五・一六葉〕

「顧桐」(朱文方印) (顧桐)

「晉圭印」(白文方印) (姜晉珪)

〔本紙第一七葉〕

「顧桐」(朱文方印) (顧桐)

「晉圭印」(白文方印) (姜晉珪)

「(印文不明B)」印

〔本紙第一八葉〕

「顧桐」(朱文方印) (顧桐)

「晉圭印」(白文方印) (姜晉珪)

〔本紙第一九葉〕

「顧桐」(朱文方印) (顧桐)

「晉圭印」(白文方印) (姜晉珪)

「(印文不明A)」印

〔本紙第二〇葉〕

「晉圭印」(白文方印) (姜晉珪)

〔本紙第二一葉〕

「顧桐」(朱文方印) (顧桐)

「晉圭印」(白文方印) (姜晉珪)

「(印文不明C)」印

「鑑沙珍藏」(朱文方印) (顧桐)

〔本紙第二二葉〕

「教經堂」(朱文橢圓印) (篆玉?)

「□□」(印の殘缺)

「姜宸英印」(回文白文方印) (姜宸英)

「西溟」(朱文方印) (姜宸英)

「晉圭印」(白文方印) (姜晉珪)

〔本紙第二三・二四葉〕

「顧桐」(朱文方印) (顧桐)

「晉圭印」(白文方印) (姜晉珪)



〔本紙第二五葉〕

「顧桐」〔朱文方印〕（顧桐）

「晉圭印」〔白文方印〕（姜晉珪）

「篆玉翰過」〔白文方印〕（篆玉）

「畊夫審定」〔朱文方印〕（楊賓）

「叔言大利」〔白文重廓方印〕（羅振玉）

「姜晉珪印」〔白文方印〕（姜晉珪）

「釋堂珍賞」〔朱文方印〕（沈荃）

〔本紙第二六葉〕〔「敕」大字葉〕本紙

「農山」〔朱文方印〕（宮爾鐸<sup>181</sup>）

「宮爾鐸審定」〔白文方印〕（宮爾鐸）

〔印文不明〕〔方印〕

「鑑沙珍藏」〔朱文方印〕（顧桐）

「西溟」〔朱文長方印〕（姜宸英）

「閻子左汾珍賞」〔白文方印〕（閻詠）

「南陽家藏」〔朱文方印〕（用印者未詳）

「中吳陸氏松蘭堂印」〔朱文長方印〕（用印者未詳）

〔本紙第二六葉左脇貼付短冊形〕

「漢陽黃小魯過眼」〔朱文方印〕<sup>182</sup>

〔同右臺紙〕

「羅振玉印」〔回文白文方印〕

### 題簽

〔付屬別紙〕

唐拓十七帖

有竹先生屬、上虞羅振玉題

「羅振玉」〔白文方印〕

### 注

（1） 龍翔篆玉 釋篆玉。

（2） 葦閒 姜宸英（一六二八〜九九）の號。

（3） 烟客 王時敏（一五九二〜一六八〇）の號。

（4） 充齋 沈荃（一六二四〜八四）の號。

（5） 姜宸英西銘氏 姜宸英（一六二八〜九九）字は西溟・

西銘、湛園・葦閒と號した。慈谿（浙江省）の人。朱彝尊・嚴繩孫とともに、江南の三布衣と稱された。康熙十九年（一六八〇）、布衣を以て明史館に入り、纂修

官となった。また徐乾學に従い、洞庭山で『大清一統志』を編集した。康熙三十六年（一六九七）の進士。累を被り獄中に死んだ。書法において清朝屈指の名手とされる。著に『葦間詩稿』、『眞意堂文稿』、『湛園集』等がある。傳は『清史稿』卷四八四、『清史列傳』卷七一、『碑傳集』卷四七、等参照。

(6) 太宗 唐の太宗、李世民（五九八〜六四九）。

(7) 逸少 王羲之（三二一〜七九）を字でよぶ。

(8) 滿騫 梁の富陽（浙江省）の人。古法帖に署名があり、唐の竇臯『述書賦』卷下に、「押署縫尾、則僧權似長松挂劍、滿騫如盤石臥虎」という。

(9) 徐僧權 梁の東海（江蘇省）の人。『陳書』卷三四、徐伯陽傳に、「父僧權、梁東宮通事舍人、領祕書、以善書知名」とある。書の鑑別にすぐれ、唐の張懷瓘「二王等書錄」に、「梁武帝尤好圖書、搜訪天下、大有所獲、以舊裝堅強、字有損壞、天監中、敕朱昇・徐僧權・唐懷允・姚懷珍・沈熾文、枘而裝之、更加題檢」という。

(10) 魏・褚 魏徵（五八〇〜六四三）と褚遂良（五九六〜六五八）。

(11) 乾學 徐乾學（一六三一〜九四）。字は原一、健菴。

儋園と號した。崑山（江蘇省）の人。顧炎武の外甥。康熙九年（一六七〇）の探花。『明史』、『大清一統志』の編集を總裁し、官は刑部尙書に至った。傳是樓はその藏書樓の名。著に『儋園文集』がある。

(12) 西溟先生 姜宸英。注（5）参照。

(13) 行期 出發の日。

(14) 騶從 貴人のともまわり、供奉。

(15) 繳（きょう） 返す。

(16) 山言 清、宋至（一六五六〜一七二六）の字。號は方菴。商丘（河南省）の人。宋犖の次子。康熙四十二年（一七〇三）の進士。官は編修・湖南布政使。著に、『緯蕭草堂詩』がある。

(17) 成說 一家言。

(18) 劉大老 人物未詳。

(19) 固密 かたく緻密。

(20) 道翁 姜道泳。姜宸英の子。

(21) 用錫 徐用錫（一六五六〜？）。初名は杏、字は壇長、魯南・晉齋・晝堂と號した。宿遷（江蘇省）の人。康熙四十八年（一七〇九）の進士。字學に精しく、著に、『圭美堂集』、『字學筭記』がある。

(22) 庚申 康熙十九年(一六八〇)。

(23) 祁多佳 字は止祥、雪瓢と號した。山陰(浙江省紹興)の人。明天啓七年(一六二七)の舉人。

(24) 右軍書記云 唐の張彥遠が編修した『二王書録』は、『右軍書記』と『大令書語』の二部より成り、當時現存した王羲之・獻之父子の書跡の全文を集録する。これを收載する『法書要録』卷一〇に、「十七帖、長一丈二尺、即貞觀中内本也、一百七行、九百四十三字、是烜赫著名帖也、太宗皇帝購求二王書、大王書有三千紙、率以一丈二尺爲卷、取其書迹及言語以類相從綴成卷、以貞觀兩字爲二小印印之、褚河南監裝背、率多紫檀軸首、白檀身、紫羅標織成帶、開元皇帝又以開元二字爲二小印印之、跋尾又列當時大臣等名、十七帖者以卷首有十七日字故號之、二王書亦後人有取帖内一語稍異者標爲帖名、大約多取卷首三兩字及帖首三兩字也」(學津討原本)とある。

(25) 貞觀中置鴻文館 鴻文館は乾隆帝の諱、弘曆を避けて弘を鴻に作る。『唐書』百官二、弘文館の条に、「武德四年、置修文館于門下省、九年、改曰弘文館、貞觀元年、詔京官職事五品以上子嗜書者二十四人、隸館習

書、出禁中書法以授之」とある。また元の黃潛「跋館本十七帖」『黃文獻公集』卷四(『佩文齋書畫譜』卷七一所引)に、「唐貞觀元年、詔京官職事五品以上子嗜書者二十四人、隸弘文館習書、出禁中法書以授之、尋又置揚書三人、此館本之始也、開元六年、命整理御府、古今工書鍾王等蹟得一千五百一十卷、視貞觀時無所增減、龍朔三年、裝進館内法書至九百四十九卷、然則當時館本必不止十七帖、此十七帖特以世所共傳、而其後有敕勒充館本、故名之曰館本十七帖耳、卷尾有僧權二字不完、是梁之徐僧權云」とある。

(26) 黃伯思東觀餘論 宋の黃伯思『東觀餘論』卷下「跋十七帖後」に、「右王逸少十七帖、迺先唐石刻本、今世間有二、其一於卷尾有敕字及褚遂良解如意校定者、人家或得之」とある。

(27) 姜桐侯 姜晉珪。字は桐侯、卓庵と號した。慈谿(浙江省)の人。姜宸英の父。『清史稿』卷四八四、姜宸英傳に、「父晉珪、諸生、以孝聞」とある。

(28) 曹秋岳 曹溶(一六一三—一八五)。字は秋岳。秀水(浙江省)の人。明の崇禎十年(一六三七)の進士。順治のはじめ清に歸し、戸部侍郎・廣東布政使等を歴任し

た。著に、『靜陽堂詩集』がある。

(29) 徐立齋 徐元文(一六三四—九一)。字は公肅、立齋と號した。乾學の弟。順治十六年(一六五九)の狀元。

(30) 澄心堂帖 南唐の後主、李煜が刻したという幻の法帖。『東觀餘論』に、南唐初代、李昇の澄心堂で、三代の李煜が、唐の賀知章の臨した「十七帖」を刻したとある。

(31) 章子厚 宋の章惇(とん)。字は子厚。浦城の人。嘉祐の進士。

(32) 米元章 米芾(一〇五一—一〇七)。字は元章。

(33) 邢子愿重摸宋搨本 邢子愿は明の邢侗(一五五一—一六一二)を字でよぶ。臨邑(山東省)の人。萬曆二年(一五七四)の進士。書法に長じ、張瑞圖・米萬鍾・董其昌と名を齎しくして、晚明四大家とよばれた。その書は二王をよく學び、十七帖の意を髣髴させた。著に、『來禽館集』があり、その卷二、「十七帖跋」に、「此唐摸十七帖、虛和閒適、若搨右軍指腕而對右軍眉宇也、摸石出自余懸椎、絲髮惟愜、……原本爲蘭溪相公重購進御、留在人閒者、……」という。來禽館本とよばれる邢侗の十七帖重摸宋搨本については、孫承澤

『庚子銷夏記』卷五、「王右軍十七帖」に、「至唐人雙鉤墨跡後有敕字者、萬曆中在京師王思廷家、濟南邢子愿借之上石、亦甚蒼勁有致、不遜宋刻、國變後此石不存、後人恐未得見也」とあり、また王澐『竹雲題跋』

卷二、「王右軍十七帖」には、「唐摸硬黃十七帖、前明神廟時、藏臨邑邢太僕子愿家、子愿手自鉤摸刻石來禽館、爲天下十七帖第一、比之世俗流傳本、少一十五行、蓋脫失也」という。ただ、王澐の記述には過誤があるようで、邢侗が雙鉤し、明の萬曆二十年(一五九二)に來禽館において刻した「唐人雙鉤十七帖」の原本は、元來十七行を缺く「缺十七行十七帖」本であるが、邢侗は他本から一行を補足し、缺十六行本として刻成したとされる。王玉池『《十七帖》在王羲之書跡中的地位

和重要版本述評』、『中國碑帖與書法國際研討會論文集』香港中文大學文物館、二〇〇一年)参照。

(34) 硬黃本 硬黃紙を用いた本。硬黃紙は紙を熟して黄蠟を塗り、透明にして法書墨蹟の摸寫に用いる。

(35) 打本 拓本、搨本。

(36) 胡母氏帖 王羲之の書と傳える法帖。「胡母氏從妹平安」云々の語で始まる草書尺牘五行。上野本『十七帖』

では、改装の際に二葉が失われ、『館本十七帖』全二十九帖のうち、第十帖の「朱處仁帖」の末尾一行と第十帖の「七十帖」の十行が脱落しており、この帖は十七番目に配されている。

- (37) 五帝以來備有畫帖 『十七帖』中の一帖。「知有漢時講堂在」の語で始まり、中間に「五帝以來備有畫」の語がある。一般に、「講堂帖」とよばれる。上野本では、「譙周帖」の次、二十番目に配されている。

- (38) 吾有七兒一女帖 「吾有七兒一女」の語で始まる帖で、「兒女帖」とよばれる。上野本では、十八番目に配される。

- (39) 譙周有孫帖 「云譙周有孫」の語で始まる帖で、「譙周帖」とよばれる。上野本では十九番目に配される。

- (40) 西銘 姜宸英の字。注(5)参照。

- (41) 嵩喬 顧桐(一七二六?)。字は嵩喬、鑑沙と號した。慈谿(浙江省)の人。歲貢生。古書畫の鑑別を善くした。著に『書畫碑帖題跋』、『伴梅草堂集』がある。

- (42) 丁敬身 丁敬(一六九五—一七六五)字は敬身、龍泓山人と號した。著に、『硯林詩集』・『武林金石錄』がある。

- (43) 裴業進士 裴業は裴業、進士は進上の誤りか。卞永譽『式古堂書畫彙考』卷一九、高士奇『江邨銷夏錄』卷一に著録される「元兪紫芝臨十七帖」中の唐の鍾紹京の記述に、「貞觀中裴業進上太宗」とある。

- (44) 今石刻傳世者二本 黃伯思「跋十七帖後」『東觀餘論』卷下に、「右王逸少十七帖、迺先唐石刻本、今世間有二、其一於卷尾有敕字及褚遂良解如意校定者、人家或得之、其一卽此本也、洛陽李邕鄆家所蓄舊本、頗與此相近、其餘世傳別本、蓋南唐後主煜得唐賀知章臨寫本勒石真澄心堂者、而本朝侍書王著、又將勒石、勢殊疎拙、又有一版本亦似南唐刻者、第紕次顛舛、文爲十七帖、而誤目爲十八帖、摹刻亦瘦弱失真、獨敕字本及此卷本乃先唐所刻、右軍筆法具存、世殊艱得誠可喜也」とある。

- (45) 澄清堂帖 黃伯思「跋十七帖後」で説く「澄心堂帖」をいう。曹溶のこの跋を引用する王士禛『居易錄』卷一では、澄心堂帖に改められている。

- (46) 淳化帖 『淳化閣帖』。宋の太宗が淳化三年(九九二)に、内府所藏の歴代の墨蹟を摸勒上石させた敕撰の法帖。

- (47) 庚戌 康熙九年(一六七〇)。

(48) 曹溶 注(28) 参照。

(49) 王時敏 一五九二〜一六八〇。字は遜之、煙客・歸

村老農と號した。太倉(江蘇省)の人。明の萬曆二十九年(一六〇一)の進士。詩文書畫を善くし、清初文人畫家の領袖と目された。『王奉常書畫題跋』に、この跋文を略記収載する。

(50) 孫北海 孫承澤(一五九二〜一六七六)を號でよぶ。

益都(山東省)の人。明の崇禎四年(一六三一)の進士。清に入り、吏部左侍郎にのぼり、太子太保を加えられた。收藏に富み、鑑賞家として知られる。著に『庚子銷夏記』、『聞者軒帖考』がある。

(51) 大觀帖 徽宗が『淳化閣帖』の改定再編を志し、龍

大淵らに命じて、大觀三年(一一〇九)に刻した集帖。孫承澤『庚子銷夏記』卷四、宋賜本大觀太清樓帖に、「宋搨大觀帖、……、予初從市賈得二本、於江右李梅公得二本」とある。

(52) 禾中項氏 明末の大收藏家、項元汴(一五二五〜九

〇)を祖とする禾興(浙江省嘉興)の項氏一族。

(53) 王氏進帖 萬歲通天進帖。唐の則天武后の萬歲通天

二年(六九七)、王方慶が進上した王羲之及び王家歴代

の書の摸本をいう。

(54) 大令 王獻之をいう。中書令の官を去るとき、これ

に代わった王珣を小令というのに對す。

(55) 乙巳 康熙四年(一六六五)。

(56) 吳偉業 一六〇九〜七一。字は駿公、梅村と號した。

明の崇禎四年(一六三一)の進士。董其昌・王時敏を友とし、「畫中九友歌」を作った。著に『梅村集』がある。

(57) 乙卯 康熙十四年(一六七五)。

(58) 上巳日 陰曆三月三日。

(59) 錢繼章 一六〇三〜?。字は爾斐、菊農と號した。

嘉善(浙江省)の人。崇禎三年(一六三〇)の舉人。曹爾堪、魏學渠と共に、明末清初の柳洲詞派を代表する。著に、『菊農詞』、『逸民遺風詩』、『雪堂自刪集』がある。黃容『明遺民錄』卷二参照。

(60) 庚午 康熙二十九年(一六九〇)。

(61) 查嗣璫 一六五二〜一七三三。字は德尹、查浦と號

した。海寧(浙江省)の人。查慎行の弟。康熙三十九年(一七〇〇)の進士。

(62) 昇聲山 查昇(一六五〇〜一七〇七)、字は仲章、聲

山と號した。海寧（浙江省）の人。康熙二十七年（一六八八）の進士。書法に優れ、小楷を最も得意とした。著に『淡遠堂集』がある。

(63) 庚戌 康熙九年（一六七〇）。

(64) 徐之瑞 字は蘭生。錢塘（浙江省杭州）の人。明崇禎九年（一六三六）の舉人。著に『橫秋堂稿』がある。

(65) 宋實穎 一六二一〜一七〇五。字は旣庭、湘尹、長洲（江蘇省蘇州）の人。順治十七年（一六六〇）の舉人。官は興化縣教諭。著に『讀書堂集』、『老易軒集』、『玉磬山房集』等がある。

(66) 康熙九年庚戌 西曆一六七〇年。

(67) 天寧寺 嘉興府秀水縣（浙江省）の天寧禪寺か。

(68) 曹爾堪 一六一七〜七九。字は子愿、顧菴と號した。

嘉興（浙江省）の籍、華亭（上海市松江）の人。順治九年（一六五二）の進士。詩書畫に優れ、明末清初の柳洲詞派の領袖とされる。

(69) 戊午 康熙十七年（一六七八）。

(70) 汪楫 一六二六〜八九。字は次舟、悔齋と號した。

休寧（安徽省）の人、康熙十八年（一六七九）、博學鴻詞科に擧げられ、翰林院檢討を授かった。

(71) 庚子 順治十七年（一六六〇）。

(72) 王猷定 一五九八〜一六六二。字は于一、軫（しん）石と號した。南昌（江西省）の人。散文で知られるが、書法にも優れた。晩年は杭州西湖の僧舎に寓居した。著に『四照堂集』がある。

(73) 丙午 康熙五年（一六六六）。

(74) 長洲 長洲（江蘇省蘇州）。

(75) 徐晟 人物未詳。

(76) 癸丑 康熙十二年（一六七三）。

(77) 徐嘉炎 一六三一〜一七〇三。字は勝力、華隱と號した。秀水（浙江省嘉興）の人。康熙十八年（一六七九）、博學鴻詞科に擧げられ、翰林院檢討を授かった。官は内閣學士に至り、禮部侍郎を兼ねた。著に『抱經齋集』がある。

(78) 朱彝尊 一六二九〜一七〇九。字は錫鬯、竹垞と號した。嘉興（浙江省）の人。康熙十八年（一六七九）、博學鴻詞科に擧げられ、翰林院檢討を授かった。『明史』の編集に參畫。經史に詳しく、詩は王士慎と南北兩大宗と稱される。著に『經義考』、『曝書亭集』がある。

(79) 丙辰 康熙十五年（一六七六）。

- (80) 陸嘉淑 一六二〇〜八九。字は冰修、射山・辛齋と號した。海寧(浙江省)の人。明の諸生。康熙十八年(一六七九)、博學鴻詞科に擧げられるも、就かず。查慎行の岳父で、朱彝尊・宋犖らと親交あり。書法は陳奕禧と名を齎しくした。著に『辛齋遺稿』がある。
- (81) 安國僧舍 海寧鹽官の安國寺。唐の開元元年(七一三)創建の鎮國海昌院を前身とする。宋の蘇軾に、「宋安國寺大悲閣記」があり、明末清初の黃宗羲がここでしばしば講學した。
- (82) 庚戌 康熙九年(一六七〇)。
- (83) 西老道兄 姜宸英。
- (84) 鴛湖 鴛鴦湖。嘉興(浙江省)の湖、南湖。吳偉業がここに遊び、「鴛湖曲」を作った。
- (85) 吳山濤 一六二四〜一七一〇。錢塘(浙江省杭州)の人。崇禎十二年(一六三九)の舉人。著に『塞翁集』がある。
- (86) 辛未 康熙三十年(一六九一)。
- (87) 何焯 一六六一〜一七二二。字は潤千。長洲(江蘇省蘇州)の人。康熙四十二年(一七〇三)の進士。晉唐の法帖の臨摸を喜び、笄重光・姜宸英・汪士鋐ととも康熙年間の帖學四大家と稱される。著に『義門讀書記』、『義門題跋』がある。
- (88) 癸丑 康熙十二年(一六七三)。
- (89) 嚴繩孫 一六二三〜一七〇二。字は蓀友、秋水と號した。無錫(江蘇省)の人。康熙十八年(一六七九)、博學鴻儒に擧げられ、『明史』の編集に參與した。著に『秋水集』がある。
- (90) 戊午 康熙十七年(一六七八)。
- (91) 陳奕禧 一六四八〜一七〇九。字は六謙、香泉と號した。海寧(浙江省)の人。貢生。王士慎の門人で、書法に長じ、何焯・姜宸英・汪士鋐とともに清朝四大書家に數えられる。著に『金石遺文錄』がある。
- (92) 隔麻 隔麻拓は拓法の一つで、タンポに大きな麻布を用い、濃墨を十分に含ませて文字を寫し取る。
- (93) 癸丑 康熙十二年(一六七三)。
- (94) 沈楫 一六一五〜八八?。字は弘濟。江蘇華亭(上海市松江)の人。
- (95) 沈荃 一六二四〜八四。繹堂、充齋と號した。華亭(上海市松江)の人。順治九年(一六五二)の探花。官は禮部侍郎に至った。書法に長じて、康熙帝の寵愛



を受け、董其昌の書風の宣揚に貢献した。著に『充齋集』がある。

(96) 癸卯 康熙二年(一六六三)。

(97) 馮蓴舒 長興(浙江省)の籍、慈谿(浙江省)の人。

清順治十五年(一六五八)の進士。康熙六年(一六六七)以前に江寧同知、同年、貴州黎平推官、同十四年(一六七五)、江南太平知府に任官。李漁編『資治新書二集』(康熙六年周亮工序)にその吏牘を収載。

(98) 文皇 唐の太宗、李世民。

(99) 虞・褚 虞世南(五五八〜六三八)と褚遂良(五九六〜六五八)。

(100) 章子厚言 注(31)参照。「缺十七行十七帖」中の章惇跋に、「前示魏道藏本十七帖甚佳、真古物也、頃亦有之、爲一族人竊去、後米芾購得、分裂與人以易畫、今皆割截零落矣、與此正同」とあり、米芾、字は元章が、購い得た十七帖を分裂して畫と交換したという。米芾「書史」には、十七帖他、所藏の書畫と、楊傑の處の官奴帖とを交換したという記事が見える。

(101) 米元章 米芾、字は元章。

(102) 西銘 姜宸英の字。注(5)参照。

(103) 徐元文 一六三四〜九一。字は公肅、立齋と號した。

祖籍は常熟(江蘇省)、昆山(江蘇省)の人。徐乾學の弟。順治十六年(一六五九)の進士第一、官は文華殿大學士に至った。著に『含經堂集』がある。

(104) 吳雯 一六四四〜一七〇四。字は天章、蓬洋と號した。原籍は奉天遼陽、後、蒲州(山西省)に移居した。

著に『蓬洋集』がある。『蓬洋詩鈔』(四庫全書本)卷七に、この詩五首のうち、詩句を一部改めた四首が採られ、その前言に、「右軍書法尙矣、而十七帖尤屬其最、世傳少有善本、西溟姜子獨有僧權不全舊搨、良爲至寶、遂題五絕句於帖尾」とある。

(105) 烟霏露結 『晉書』(四庫全書本)卷八十・王逸少傳制贊に、「觀其點曳之工、裁成之妙、煙霏露結、狀若斷而還連、鳳翥龍盤、勢如斜而反正」とある。

(106) 丁卯 康熙二十六年(一六八七)。

(107) 歸允肅 一六四二〜八九。字は孝儀、惺崖と號した。常熟(江蘇省)の人。康熙十八年(一六七九)の狀元。官は少詹事に至る。著に『歸宮詹集』がある。

(108) 唐張懷瓘論草勢 張懷瓘『書斷』上・草書に、「一筆而成、偶有不連、而血脈不斷、及其連者、氣候通而隔

行、唯王子敬明其深詣、故行首之字、往往繼前行之末」とあり、彼の「書議」に、「逸少則格律非高、功夫又少、雖圓豐妍美、乃乏神氣、無戈戟鈔銳可畏」とある。

(109) 又云、逸少草書有女郎才、無丈夫氣 張懷瓘「書議」に、「逸少草有女郎材、無丈夫氣」とある。

(110) 煙霏霧結 「唐文皇書右軍書後」(『式古堂書畫彙考』卷一所收)に、「觀其點曳之工、裁成之妙、烟霏霧結、狀若斷而還連」とある。

(111) 宸英識 この題跋は、姜宸英『湛園集』卷八に、「題宋搨十七帖」として載る。但し、文字に異同がある。

(112) 道泳 姜道泳。姜宸英の子。

(113) 康熙丙戌 康熙四十五年(一七〇六)。

(114) 徐用錫 一六五七〜一七三六。字は壇長、畫堂と號した。宿遷(江蘇省)の人。康熙四十八年(一七〇九)の進士。

(115) 山谷 黃庭堅を號でよぶ。

(116) 庚午 康熙二十九年(一六九〇)。

(117) 王士禛 一六三四〜一七一。字は貽上、阮亭・漁洋山人と號した。新城(山東省)の人。順治十五年(一六五八)の進士。官は刑部尙書に至る。詩にすぐれ、

朱彝尊とならんで朱王と稱された。卒後、雍正帝愛新覺羅胤禛の諱を避けて、士正、士禛の名でよばれる。その『居易錄』卷一で、この帖にふれ、「慈谿友人姜西溟示唐搨十七帖、紙韌堅、好點畫、無闕失、眞古物也」といい、帖中の曹溶の跋文を引用する。

(118) 徐乾學 注(11)参照。

(119) 辛未 康熙三十年(一六九一)。

(120) 汪異三 汪撰。字は異三、澹澤と號した。蘇州(江蘇省)に流寓。楊賓『楊大瓢雜文殘稿』に「汪異三傳」がある。錢澄之は、「汪異三詩引」(『田閒文集』卷一六)で、眞をもつて性情を解釋する独自の詩論を展開している。

(121) 湛園未定稿 康熙刻本の姜宸英『湛園未定稿』一卷(蘇州大學所藏)がある。

(122) 錢澄之 一六一二〜九三。字は幼光。桐城(安徽省)の人。南明に庶吉士を授かり、清に入って僧となる。

傳は『清史稿』卷五〇〇。著に『田閒集』がある。前年の春、汪異三・姜奉世と蘇州西山に遊び、「春游雜詩」九首を作る(『田閒年譜』、『吳越錢氏縱陽宗譜』)。

(123) 壬申 康熙三十一年(一六九二)。

- (124) 閻若璩 一六三六〜一七〇四。字は百詩。太原(山西省)の人。淮安(江蘇省)の鹽商の家に生まれる。徐乾學の知遇を得て、『清一統志』の編纂事業に加わった。『古文尙書疏證』を著して『古文尙書』二十五編を後世の偽作と斷じた、清朝考證學の先驅者。傳は『清史稿』卷四八一。
- (125) 男詠 閻詠。閻若璩の長子。字は復申。左汾と號した。康熙四十八年(一七〇九)の進士。
- (126) 壬午歲 崇禎七年(一六四二)。
- (127) 癸卯 康熙二年(一六六三)。
- (128) 桐侯晉珪 姜晉珪。字は桐侯、卓庵と號した。姜宸英の父。
- (129) 于一王二丈 王猷定(一五九八〜一六六二)、字は于一、軫石と號した。南昌(江西省)の人。卓爾堪『明遺民詩』卷一の小傳に、「文學、性伉直、遭亂移家、多歷艱險、與杜茶村(濬)稱性命交、精楷法、以古文自雄、著『四照堂集』とある。
- (130) 潸然 さんぜん。さめざめと涙を流す。
- (131) 西溟・竹垞 姜宸英と朱彝尊を號でよぶ。
- (132) 聞人 名望のある人。
- (133) 若璩 閻若璩。注(124)参照。
- (134) 葦間先生 姜宸英を號でよぶ。
- (135) 汪士鋐 一六五八〜一七二三。字は文升、退谷と號した。長洲(江蘇省)の人。康熙三十六年(一六九七)の狀元。最も書法に長じ、姜宸英と名を齎しくし、姜汪と稱された。著に『秋泉居士集』がある。
- (136) 楊賓 一六五〇〜一七二〇。字は可師、大瓢・耕夫と號した。紹興(浙江省)の人。金石を嗜み、碑版の鑑別に長じた。著に『大瓢偶筆』がある。
- (137) 泯(びん) ほろびる。
- (138) 襍 雜の本字。
- (139) 媼妍(しけん) みにくいことと美しいこと。
- (140) 陶公言 陶公は越王句踐の臣、范蠡。陶に居って陶朱公と號し、貨殖の才に長じ、三たび千金を致した。富者をいう。
- (141) 乾隆戊子 乾隆三十三年(一七六八)。
- (142) 蔣士銓 一七二五〜八四。字は定甫、茗生と號した。鉛山(江西省)の人。乾隆二十二年(一七五七)の進士。詩詞にすぐれ、袁枚とならんで兩才子といわれる。著に『忠雅堂集』がある。

(143) 鮑君茂才 鮑廷博(一七二八〜一八一四)。字は以文、

綠飲と號した。歙県(安徽省)の人。大藏書家。『知不足齋叢書』を校刊した。

(144) 乾隆庚寅 乾隆三十五年(一七七〇)。

(145) 張賓鶴 字は仲謀、雲汀、堯峰と號した。錢塘(浙江省杭州)の人。乾隆年間の書法家。著に『雲汀詩鈔』

がある。

(146) 蘿龕奚鋼 奚岡(一七四六〜一八〇三) 初名は鋼、

字は鐵生、蘿龕と號した。原籍は歙縣(安徽省)、杭州(浙江省)に寓居した。書畫篆刻を善くし、西泠八家の一人に數えられる。

(147) 大觀帖 注(51)参照。

(148) 王君師德 人物未詳。

(149) 孫退谷 孫承澤。注(50)参照。

(150) 乾隆乙未 乾隆四十年(一七七五)。

(151) 金嘉琰 乾隆版『桐廬縣志』、『朝邑縣志』の纂者。

(152) 徐王 徐乾學と王時敏。

(153) 吳閻 吳偉業と閻若璩。

(154) 鉛山 蔣士銓。

(155) 龍泓 丁敬。

(156) 賀季眞 賀知章(六五九〜七四四)。字は季眞。草・

隸の書を善くした。

(157) 邢子愿 邢侗。

(158) 宣統紀元 西曆一九〇九年。

(159) 叔蘊 羅振玉(一八六六〜一九四〇)。字は叔蘊、一

に叔言、號は雪堂、貞松など。上虞(浙江省)の人。

幼少より學問を好み、日清戦争後は、學農社、東文學者を設立し教育の近代化に當たった。日本にも二度視

察に訪れている。四十歳で仕官すると、學部參議、京

師大學堂農科監督に任じられた。辛亥革命がおこると、内藤湖南、狩野君山らの勧めを受けて、明治四十四年

(一九一一)から大正八年(一九一九)までの八年間、

京都に客寓し、研究や著述に當たった。多くの書籍・

書畫・骨董類を攜えてきたが、生活のために手放さざるを得ず、關西のコレクションに入ったものも少なく

ない。歸國後は滿州國の建國に參與し、參議府參議、

監察院院長などを務めた。書籍、書畫、青銅器、考古

遺物などに幅広い關心をもち、膨大な量の著録、圖録類を残した。『羅雪堂先生全集』が刊行されている。

(160) 沈奩寶熙 愛新覺羅・寶熙(一八七一〜一九三〇)

字は瑞臣、沈龔と號した。宛平（河北省）の人。滿洲正藍旗に隸屬。清朝宗室、穆爾哈齋の十世の孫。光緒十八年（一八九二）の進士。

(161) 内藤湖南 一八六六―一九三四。名は虎次郎、字は

炳卿、號は湖南のほか黒頭尊者など。南部藩士の子として秋田縣鹿角郡毛馬内村に生まれた。秋田師範學校高等科を卒業後、「明教新誌」、「臺灣日報」、「萬朝報」、「大阪朝日新聞」などで健筆を揮い、中國各地を遊歴して見聞を廣めた。その博識をかわれて、明治四十年

(一九〇七)には京都帝國大學文科大學講師となり東洋史學を擔當、四十二年には教授となった。政治經濟にとどまらず中國學のあらゆる分野に見識を持ち、特に文化史を重視した。詩文、書にも優れ、辛亥革命前後に大阪の出版社・博文堂が中國書畫の販賣を手がけるようになる、關西地域を中心とするコレクターとの間を取り持ったため、現在も箱書きや題跋が多數残されている。

(162) 鬱岡齋本 明の王肯堂が萬曆三十九年（一六一一）

に刻した『鬱岡齋墨妙』卷五に收載される十七帖。

(163) 來禽館本 邢侗が萬曆二十年（一五九二）に刻した

『來禽館帖』卷二に收載される十七帖。

(164) 的知 正確に知る。

(165) 燭火 かがり火。

(166) 有竹因亟景印 朝日新聞の創業者の一人、上野理一（號は有竹、一八四八―一九一九）は、羅振玉よりこの十七帖を購得し、大正二年（一九一三）二月二十七日、油谷博文堂からその景印（コロタイプ）本を出版させている。

(167) 澄清堂帖 王羲之父子の書を中心刻した法帖。南宋以前の刻とされ、邢侗舊藏本、孫承澤舊藏本等が傳來する。

(168) 表表 特出する。

(169) 瓣香 禪僧が人を祝福するときに焚いた花瓣形の香。轉じて人を欽仰する意。

(170) 阮芸臺 阮元（一七六四―一八四九）を號でよぶ。

(171) 抑南揚北之論 阮元が「南北書派論」、「北碑南帖論」で唱えた書論。書に南北の別があり、法帖の翻刻を重ね漢隸の古意を失った南朝の行草は書法の正統とはいえず、漢隸の傳統を保持する北朝の碑碣をこそ書の正統として學ぶべきであるとする。

(172) 僕役 しもべ。

(173) 後景印行世、余皆親衡量 衡量は、はかる、評定する。上野本十七帖をはじめ、当時、多数の法帖がコロ

タイプ版で出版されたが、内藤湖南はその際、これらを解説する跋文を作っている。『内藤湖南全集』巻一四（筑摩書房、一九七六）所収『湖南文存』参照。

(174) 大西見山 一八七〇〜一九三〇。名は徳造。讃岐（香

川縣）氷上村の人。「甲秀堂帖」「澄清堂帖」を、内藤湖南を介して羅振玉より購得し、明治四十五年（一九一二）、油谷博文堂からそのコロタイプ本を出版させている。内藤湖南「景印宋拓甲秀堂帖跋」、同「南唐拓澄清堂帖跋」（共に『湖南文存』巻六所載）参照。

(175) 楚人失弓 『孔子家語』・好生の「楚王失弓、楚人得之」の故事を踏まえ、中國傳來の名寶を國外に流出させる意。

(176) 壬子 大正元年（一九一二）。

(177) 據其楮墨定爲唐拓 羅振玉は、諸跋中、丁敬の考證を尤も褒め、唐摸唐拓とするその考えに、ここでは異論を挟んでいないが、別に『貞松老人外集』に収載される「北宋拓唐摸十七帖跋」では、「丁龍泓先生跋謂、

紙是秦中搗麻、墨是上黨松煙、唐拓無疑、細審之、當是唐撫北宋拓也」といい、やや評價を變えて唐摸北宋拓とする。

(178) 魏玉璜 魏之琇を字でよぶ。錢塘（浙江省杭州）の人、柳洲と號した。著に柳洲遺稿がある。

(179) 玉簡齋 羅振玉の號。羅振玉編集『玉簡齋叢書』がある。

(180) 顧桐 注（41）参照。

(181) 宮爾鐸 一八四一〜？ 字は農山、抱璞と號した。

懷遠（安徽省）の人。收藏家として知られた。著に、『思无邪齋文存』、『思无邪齋詩存』がある。

(182) 黃小魯 黃嗣東（一八四六〜一九一〇）、字は小魯、魯齋と號した。漢口（湖北省）の人。祖籍は余姚（浙江省）。同治癸酉（一八七三）拔貢、官は陝西陝安道に至った。晩清の詩人として知られ、陳衍『近代詩鈔』にその詩を載せる。著に『道學淵源錄』がある。『中國近現代人物名號大辭典』一一一九頁参照。

### 参考文献

磯野秋渚「上野本十七帖附屬文書」（一九一一年九月十日作

成)

「上野氏藏十七帖題跋譯文」(『書苑』第三卷第四號(特輯十七帖號)、三省堂、一九三九年)

中村不折「十七帖について」(同右)

須羽源一「十七帖の考究」(同右)

『王羲之十七帖二種』(書跡名品叢刊第一集第二十一回配本、二玄社、一九五九年)

『十七帖 上野本』(原色法帖選六、二玄社、一九八五年)

王玉池「《十七帖》在王羲之書跡中的地位 and 重要版本述評」

(『中國碑帖與書法國際研討會論文集』香港中文大學文物館、二〇〇一年)

〔西上實〕

## 二 集王聖教序(上野本) 王羲之

京都國立博物館

原碑 唐・咸亨三年(六七二)

宋拓本

紙本墨拓

各頁二五・八×一四・五

題簽

張鑑題簽<sup>(1)</sup>

聖教序宋拓原本、生沐六兄屬

秋水題

「張鑑」(白文方印)

本紙

(本文省略)

跋

汪士驥跋<sup>(3)</sup>

是碑、余所見甚夥、求其未斷本、則稀如星鳳、道光辛卯歲、

于役中州、曾在同鄉金業僊跋參<sup>(6)</sup>軍齋中見之、乃宋商邱舊物、

與此本紙色墨光豪髮無異、今生沐先生所藏可稱聯璧、惜未得與君共賞之、屬爲題此、因志墨緣、暮園遯叟 汪士驥  
「遯夫」(朱文長方印)

### 內藤湖南跋

東觀餘論云、唐文皇製聖教序、時都城諸釋詠弘福寺懷仁集(弘)  
右軍行書勒石、累年方就、逸少劇蹟咸萃其中、然唐世學者猶尠、其時士林以搨摹爲珍、未重石本、迄于北宋歐趙諸公著錄金石、出土既多、氈蠟日盛、聖教始見重於世、而學弗能至、輒有院體之目、宋室南渡、京兆淪入於完顏、關中諸碑皆不易拓、於是僞褻帖橫行、而聖教又燬焉、至明中葉、士大夫稍復知重、此碑則石已斷矣、聖教未斷本之可貴而北宋拓本之尤可寶爲此故也、歲庚戌奉差赴清國北京、獲睹羅叔言學部所藏北宋拓聖教序、墨氣醜藹、古香盎然、龍躍虎臥、洞心駭目、黃長睿謂、觀碑中字、與右軍遺帖所有者纖微克肖、諦審叔言藏本、與我內府本喪亂帖、岡田氏九月十七日帖、神理全同、知長睿之言猶信、二帖竝唐初摹本、爲寓內之奇寶、宋拓中、有像有字、陵遲遲字、前聞前字、來書書字、深極空有極字、言未馳未馳二字、詎能能字、中夏中字、才謝謝字、翹心心田心字、慧日日字、受想想字、鄙

拙拙旁出字、湛寂湛旁甚字、以二帖校對、若已見其兒孫、又觀其父祖矣、因乞叔言付印以廣其傳、叔言慨然見借、乃攜而渡海、歸後屬博文堂主鑄入於玻璃版、數月而成、骨肉勻秀、精采煥然、鋒穎轉折、纖毫畢具、此則近日技術之神工、非異時摹勒可比、自今而後學此碑者、得夫人而收蓄宋本、不亦踴歟、此本屢更改裱間、爲工人剪損、若內出失去出字、其尤甚者、然以翁覃谿所攷相證、其爲宋本歷歷可徵、晉右、右字口內未泐、形潛、潛字日末小橫出小直外、佛道崇虛、道字上二點有斷痕、崇字山下有右小橫、四教字尙完好、杖策孤征、孤字子旁有缺痕、奧字未泐、兩群字下直俱爲破筆、紛糺二字鬚髯可辨、卉木木字未泐、聖慈慈字未泐、久植勝緣、何以顯揚、何以二字泐痕未連上緣字系旁、深以爲愧、深字左上有複啄筆、凡此諸證、有目共睹、曷更鼓吻、以事聚訟

明治辛亥四月仲七日、內藤虎

「藤虎之印」(白文方印)、「字曰炳卿」(朱文方印)

此本、後歸有竹上野君、於是東瀛始有宋拓聖教矣、虎又識「湖南」(朱文方印)

### 羅振玉跋



集右軍書聖教序、宋拓本平日所見不下十餘本、然多南渡後拓本、此本曩得之西吳周氏<sup>(11)</sup>、精采殊勝、初亦不敢遽信爲宋未渡南時物、比來京師、見楊大瓢跋關中南氏所藏宋末周草窗本<sup>(14)</sup>、草窗言、得之京口一士人家、汴京未失時所拓者、竝几與此細校、一一吻合<sup>(15)</sup>、始知此本確爲北宋氈墨<sup>(16)</sup>、歲庚戌、吾友內藤博士來京師、出以相示、一見驚歎、視予之篋藏十餘歲、必竢校以周草窗本、而始確信爲北宋拓、其鑑賞之敏、相去殆不可道里計矣<sup>(18)</sup>、博士既段之歸國、付良工精印、竝介予此本於其友上野君、其愛之篤與博士同、因以歸之、爰識語于冊尾、以存鴻爪<sup>(19)</sup>、辛亥七月下澣、上虞羅振玉

「臣王之印」(白文方印)、「叔言」(朱文方印)

### 日下部鳴鶴跋

「古狂」(白文長方印)

宋拓聖教序、近者因湖南博士始入我邦、後遂歸有竹上野君藏、君介博文堂主人索余跋、披而觀之、墨光油然、古香滿紙、信佳本矣、但數百年間屢經改裝、中多移補之字、白璧微瑕、不無憾、然爲舊拓真本無疑、至其來歷考據、博士具能道之、余復何言哉、時當小春風日可、人脩竹幽花之下、明窗淨几之間、好香一爐、清茶數盞、昕夕展開、隨意臨寫、

豈復有人閒塵俗耶、得斯清娛、亦湖南有竹二君之賜也、欣然爲跋一言

明治辛亥小春月、七十四翁日下東作

「東作」(白文方印)

### 鑑藏印

- 〔第一開右頁本紙〕
- 【1】「神品」(朱文長方印) (用印者未詳)
- 【2】「我思古人」(朱白方印) (用印者未詳)
- 【3】「來雲閣珍藏印」(朱文長方印) (用印者未詳)
- 【4】「光煦審定」(朱文方印) (蔣光煦<sup>(21)</sup>)
- 【5】「錢其恆印」(白文方印) (錢其恆<sup>(22)</sup>)
- 【6】「樂園」(白文重廓長方印) (顏光敏<sup>(23)</sup>)
- 【7】「芸齋寶玩」(朱文方印) (周昌富<sup>(24)</sup>)
- 【8】「子方」(朱文方印) (錢其恆)
- 【9】「松齋」(白文長方印) (用印者未詳)
- 【10】「魯璠印」(朱白文方印) (魯璠<sup>(25)</sup>)
- 【11】「曾經周紫垣處」(朱文長方印) (周慶奎<sup>(26)</sup>)

〔同臺紙〕

【12】「叔言大利」(白文重廓方印) (羅振玉<sup>(27)</sup>)

【13】「周紫垣家珍藏」(白文印) (周慶奎)

〔同左頁臺紙〕

【14】「宜子孫」(朱文方印) (用印者未詳)

【15】「周昌富長壽」(朱文圓印) (周昌富)

〔第七開右頁本紙〕 「篋」字の上に捺す

【16】「馮鉉之印」(朱文方印) (馮鉉<sup>(28)</sup>)

〔第十六開左頁本紙〕

【17】「紫垣」(朱文方印) (周慶奎)

【18】「慶奎之印」(白文方印) (周慶奎)

【19】「錢其恆印」(白文方印) (錢其恆)

【20】「他山社」(白文方印) (錢其恆カ)

〔第二十開右頁本紙〕

【21】「紫垣」(白文長方印) (周慶奎)

【22】「大觀」(朱文瓢印) (用印者未詳)

【23】「熙載」(白文方印) (吳熙載<sup>(29)</sup>)

【24】「湯氏良耜珍賞書畫圖紀」(朱文長方印) (湯良耜<sup>(30)</sup>)

【25】「董其昌印」(白文方印) (董其昌<sup>(31)</sup>)

【26】「林翹之印」(白文方印) (林翹<sup>(32)</sup>)

〔同左頁本紙〕

【27】「沈凡民」(白文方印) (沈鳳<sup>(33)</sup>)

【28】「鳳」(白文方印) (沈鳳)

【29】「王衡之印」(白文方印) (王衡<sup>(34)</sup>)

【30】「熙載過眼」(朱文方印) (吳熙載)

【31】「芸齋寶玩」(朱文方印) (周昌富)

【32】「墨林山人」(白文方印) (項元汴<sup>(35)</sup>)

【33】「朱思壽印」(朱文方印) (朱思壽<sup>(36)</sup>)

【34】「其恆之印」(朱文方印) (錢其恆)

【35】「山陰道人」(朱白文方印) (錢其恆)

【36】「□□□□□□孔□氏昇雁」(白文方印)(用印者未詳)

【37】「中展」(朱文方印) (用印者未詳)

【38】「光煦審定」(朱文方印) (蔣光煦)

〔同臺紙〕

【39】「周氏祕藏神品」(朱文長方印) (周昌富)

【40】「放菴」(朱文圓印) (蔣光煦)

【41】「蔣光煦」(朱白文方印) (蔣光煦)

## 注

(1) 張鑑 清、烏程(浙江省湖州)の人。字は春冶、秋水と號した。官は嘉慶中、武義教諭。傳は『續碑傳集』卷七三。

(2) 生沐 蔣光煦(一八一三〜六〇)を字でよぶ。清、海寧(浙江省)の人。號は放庵居士。別下齋叢書を輯刊した。傳は『國朝耆獻類徵』卷五一。

(3) 汪士驤 汪士驤(?〜一八六一)。字は鐵樵。錢塘(浙江省)の人。隸書を巧みにした。

(4) 星鳳 景星(めでたい星)と鳳凰。珍奇なもの喩。

(5) 道光辛卯 道光十一年(一八三一)。

(6) 金業僊參軍 人物未詳。

(7) 宋商邱 商邱の人、宋犖(一六三四〜一七一三)。字は牧仲。

(8) 東觀餘論云 黃伯思『東觀餘論』卷下、題集逸少書聖教序後に、「書苑云、唐文皇製聖教序、時都城諸釋

諉弘福寺懷仁集右軍行書勒石、累年方就、逸少劇蹟咸萃其中、今觀碑中字與右軍遺帖所有者纖微克肖、書苑之說信然、然近世翰林侍書輩多學此碑、學弗能至了無高韻、因自目其書爲院體、由唐吳通微昆弟已有斯目、故今士大夫玩此者少、然學弗至者自俗耳、碑中字未嘗俗也、非深于書者不足以語此 政和四年四月二十四日、黃某長睿父題」とある。

(9) 歐趙諸公著錄金石 歐陽脩『集古錄跋尾』、趙明誠『金石錄』をいう。

(10) 翁覃谿所攷 翁方綱『蘇米齋蘭亭考』卷八、集字聖教序内用蘭亭字考。

(11) 西吳周氏 周昌富(一八三九〜九五)、字は鶴峰、芸齋と號した。南潯(浙江省湖州)の人。國子監生。長兄の周昌熾に協力して紡績業で財をなし、南潯八牛のひとりに數えられる。商賣の傍ら、文人名士と交遊。書畫、古籍善本の収集を好み、收藏家としても知られた。

(12) 楊大瓢 楊賓(一六五〇〜?)を號でよぶ。字は可師。山陰(浙江省)の人。金石を嗜み、碑版の鑑別に長じた。著に『大瓢偶筆』八卷、『鐵函齋書跋』

六卷等がある。

(13) 關中南氏 人物未詳。

(14) 周草窗 周密(一二三二〜九八)を號でよぶ。字

は公謹、濟南(山東省)の人。書畫の考證に長じ、

『雲烟過眼錄』二卷の著がある。

(15) 朧合 吻合、脗合。上下の唇がぴったりとあう。

事的一致する喩。

(16) 氈墨 拓本をいう。

(17) 跋校 校勘を俟つ。歐陽脩「書春秋繁露後」に、

「乃知董生之書流散而不全矣、方俟校勘」とある。

(18) 不可道里計 格段の差がある。道里は普通の尺度。

梁啓超「變法通義自序」に、「其於古人之意、相去豈可

以道里計哉」とある。

(19) 存鴻爪 往時の痕跡を残す比喩。蘇軾「和子由澠池

懷舊」に、「人生到處知何似、應似飛鴻踏雪泥、雪上

偶然留爪印、鴻飛那復計東西」とあるによる。

(20) 辛亥 宣統三年(一九一一)。

(21) 蔣光煦(一八一三〜六〇)：印【4】・【38】・【40】・

【41】 注(2)参照。

(22) 錢其恆：印【5】・【8】・【19】・【20】(?)・【34】・

【35】

字は子方、山陰(浙江省)の人。崇禎十五年(一

六四二)の舉人、錢棻(字は仲芳、嘉善(浙江省)

の人)の子。『越畫見聞』卷中に、「愛仿大癡山水、

筆墨超脫凡軌、家藏名迹最多、精于鑑賞」とあり、

『皇明遺民傳』卷六に、「國亡、隱居不出」という。

(23) 顏光敏(一六四〇〜八六)：印【6】

字は遜甫、號は樂圃。曲阜(山東省)の人。顏回

の六十七世の孫。康熙六年(一六六七)の進士。書

法を善くし、金石文を得ては屋壁に掛けて楽しんだ

という。著に『樂圃集』がある。朱彝尊「墓誌銘」

(『曝書亭集』卷七五、『國朝耆獻類微初編』卷一四

二)『清史列傳』卷七〇、『清史稿』卷四八四。清で

は他に、張英(一六三七〜一七〇八、桐城(安徽省)

の人)も樂圃を號とする。

(24) 周昌富(一八三九〜九五)：印【7】・【15】・【31】・

【39】 注(11)参照。

(25) 魯璠：印【10】

明末清初頃の人か。魯璠「草書扇面」が中國雅昌

藝術網拍賣收藏(二〇〇四年春)に出品。字形の似

た「魯璠之印」白文方印が捺されている。

(26) 周慶奎：印【11】・【13】・【17】・【18】・【21】

字は肖蘇、紫垣と號した。烏程（浙江省湖州）の人。咸豐同治間（一八五一～七四）の活躍。周昌壽の姪。畫事になれ親しんだ。『中國美術家人名辭典』四九九頁、『中國歷代書畫篆刻家字號索引』五九四頁参照。

(27) 羅振玉（一八六六～一九四〇）：印【12】

「一十七帖」注（159）参照。

(28) 馮鉉：印【16】 人物未詳。

(29) 吳熙載（一七九九～一八七〇）：印【23】・【30】

初名は、廷颺、字は熙載。字をもって行なわれ、讓之と號した。儀徵（江蘇省）の人。印【23】は上海博物館編『中國書畫家印鑑款識』四四六頁所載印（2）と一致。

(30) 湯良耜：印【24】 人物未詳。

(31) 董其昌（一五五五～一六三六）：印【25】

回文でない「董其昌印」は、名を二行に裁斷するためか類例に乏しい。同形印ではないが、元人集錦卷 莊麟翠雨軒圖卷題跋（上海博物館）に同種の「董

其昌印」が捺されている。上海博物館編『中國書畫

家印鑑款識』一三〇四頁参照。

(32) 林翹：印【26】 人物未詳。

(33) 沈鳳（一六八五～一七五五）：印【27】・【28】

字は凡民。補蘿、謙齋と號した。江蘇江陰の人。書法を王澐に受けた。平生、篆刻を第一とし、畫はこれに次ぎ、字はまたこれに次ぐと、自らいう。謙齋印譜がある。

袁枚「補蘿先生墓誌銘」『小倉山房文集』卷五、『墨林今話』卷一等参照。

・『墨林今話』卷一

江陰沈凡民鳳、號補蘿、受書法於王吏部虛舟、工鐵筆、善山水、以國學生、效力南河、歷署同知、七攝縣篆、於吏事非所喜、自言生平篆刻第一、畫次之、字又次之、其畫多乾筆、瀟灑縱逸、志在元人、嘗臨倪元鎮小幅、鑑者莫辨、篆刻有謙齋印譜行世

・『廣印人傳』卷一一、『國朝書畫家筆錄』卷一

(34) 王衡（一五六四～一六〇七）：印【29】

字は辰玉、緱山と號した。太倉（江蘇省）の人。

三 集王聖教序（黒川本） 王羲之

黒川古文化研究所

原碑 唐・咸亨三年（六七二）

北宋拓本

紙本墨拓

各頁二七・五×一五・〇

帙題簽

北宋拓聖教序

飛香<sup>(1)</sup>館藏

羅振玉<sup>(2)</sup>篆

「羅振玉」（白文方印）

れらとは字形が異なる。

(35) 項元汴（一五二五〜一五九〇）：印【32】

字は子京、墨林と號した。嘉興（浙江省）の人。

顧愷之「女史箴圖」（大英博物館）に捺されているものと同形印であるが、微妙に字形が異なる。偽印か。

(36) 朱思壽：印【33】 人物未詳。

〔西上實〕

題簽

〔帖首第一開〕

宋拓聖教序

廿二翻 宋徵輿<sup>(3)</sup>、姜宸英跋<sup>(4)</sup>、玉壺秋碧本<sup>(5)</sup>、南海吳氏藏第一本

聖教序

此黎瑤石先生隸書、庚辰七月望

〔覃溪〕（朱文方印）

荷屋所藏、予爲臨此籤、信墨緣也

〔蘇齋墨緣〕（朱文方印）

### 題識

〔帖首第二開〕

此真宋搨不斷碑也、癸巳長至日、同錢子璧、觀於玉壺秋碧

軒中

徵輿

### 本紙

（本文省略）

### 本紙表裝注記

〔第二開右〕

南宋本愚字中損、智字下損

〔同左〕

南宋本無生無字中損

〔第五開左〕

南宋本乘字中損愈甚

〔第六開右〕

南宋本輕字左損

〔同左〕

南宋本將字右損愈甚

〔第七開左〕

南宋本生字中下損

〔第八開左〕

南宋本拙字右下損

〔第九開右〕

南宋本帝字中損

〔第十開右〕

南宋本源字右中損愈甚

南宋本慈字上損

南宋本有字中損

〔同左〕

南宋本慧字上損

〔第十一開左〕

南宋本昆字左下損

南宋本翠字左下損

〔第十二開右〕

南宋本奧字（下）、感字（右）損愈甚

南宋本慧字上損

〔同左〕

南宋本凝字稍損

〔第十四開右〕

南宋本石破處到緣字右

〔第十五開左〕

南宋本一字損去收筆

〔第十六開左〕

南宋無無明上無字略損、不見筆意

〔第十七開右〕

南宋本蜜多多字上兩撇損

〔同左〕

南宋本第二諦字中橫損

〔第十八開右〕

南宋本菩提字長畫損

南宋本太字上中損

〔第十九開右〕

南宋本二字下畫損

### 跋

〔帖尾第一開左〕

壬申九月廿二日、抵玉峰獲觀於道積三世兄之高齋

慈谿姜宸英

此真北宋拓本也、細玩之、尙在黎瑤石本前數十年之物

道光癸未清和五日、觀於臬署寓公

七十六叟蔡之定

「之定」〔白文方印〕、「穀山」〔朱文方印〕

道光丁酉、從德畬兄、段觀詳按、雀爲北宋拓本

「何紹業觀」〔白文方印〕

〔第二開〕

黎瑤石隸書題籤者、宋末元初所拓、與此本極肖（庚辰七月、不知何人所書、其下有九素二字印）、今爲荷屋老友臨寫於冊前、又恰是粵東前輩鑑藏風味、昔年爲潘毅堂題所收三長物齋舊本時、尙未能似此韻勝耳、此本用墨亦尙



未極精勻、而其中却有勝於諸舊本之字、非僅取其在斷本之前而已、聖教序石中閒斷泐、明天順年間事也、王筠林乃謂、趙松雪已臨斷本、此所見偽趙臨耳

嘉慶丙寅春二月九日、方綱

「翁方綱」(白文重廓方印)、「覃谿」(白文重廓方印)

〔第二開紙外右邊〕

三長物齋、黎瑤石題籤本、陳勾山先輩跋爲北宋拓、自是以後十九題均無異詞、何蘇齋忽又謂宋末元初所拓、豈閱時既久遂忘之耶

戊子十二月三日、伯榮

「吳榮光印」(朱文方印)

〔第二開紙外左邊〕

三長物齋本、今歸南海伍氏、道光戊子十一月、借至筠清館、竭五日之力與此本對勘、拓手豪髮皆同、此本用墨較澹、而稍有攙補耳、彼本覃溪閣學士題記二、在乾隆癸巳

正月、丁酉十二月竝記

「榮光之印」(白文方印)

〔第二開紙外下邊〕

瑤石書籤、爲張石公所藏、己丑四月、借至校勘、是南宋本、因舉平日所見南宋本、破損數十處、詳註於此本之上、以見此本的爲北宋佳拓、蘇齋所云宋元拓與此本極肖者、

實悞記也

十二日、伯榮記

「殿垣」(白文方印)

〔第三開〕

三月七日、此帖復來蘇齋、與春湖所藏陸儼山本竝几細對、紙質、墨氣、拓時竝同、信可謂墨緣耶

「蘇齋墨緣」(朱文方印)

崇字山下三小點、蘭亭褚本僅見右一點、群字上平頂、下雙杈、遷字西左小直下留空、皆褚臨真本如此、惟聖教此三字足相證也、百字虞歐諸家皆上橫、右邊長出、惟樂毅論梁摹舊本上橫之右與下肩方折處相竝、南宋後翻樂毅、則下半鬆弱矣、聖教百字亦足印證耳、合此數處、知是右軍真迹無疑、此帖誠藝林至寶也

方綱

「翁方綱印」(白文方印)、「覃溪」(朱文方印)

〔第三開紙外右邊〕

此帖所補字、皆以他本、前後重出字、補之、其所補亦未拓本也、如第一開教(首行)、是以(七行)、哲、數(八行)、然而(九行)、第三開者(二行)、然(三行)、類(十行)、第四開然(二行)、第五開是以(六行)、第六開道(四行)、要(九行)、第七開慈(一行)、嶺(七行)、飛(八行)、第九開教(五行)、第十開測(二行)、第十七開究(二行)、計樊池之初、猶當在元以前也、黎瑤石本少時曾見之、惜未能對觀耳、荷屋年丈旬宣閩海、遂以此帖及宋槧施顧蘇詩貽歸潘德畬、物聚所好、<sup>(42)</sup>况神物之流轉哉

子毅紹業識<sup>(44)</sup> 丁酉四月<sup>(45)</sup>

〔第三開紙外左邊〕

嘉慶丙寅春、侍蘇齋時曾得與觀、道光己酉秋、就養在粵、知此冊已爲潘德畬方伯所得、借觀旬日、四十年後、七千里外、復得展玩、墨緣眼福、誠爲厚幸  
九月十九日、游白雲山歸燈下題記、葉志誥<sup>(48)</sup>、時年七十有

一

「志誥」(朱文連印)

〔第四開右〕

此與鐵冶亭尚書所藏、同一瓊寶、往在春明、曾借太原溫雲心<sup>(50)</sup>比部本、華亭李瀛門<sup>(51)</sup>太守本及余舊藏本、竝案較勘、皆南宋羅紋紙拓、荷屋中丞因註其異於紙眉、李太守跋余本、謂勝此冊、豈以氈蠟較精良邪、究非確論也、若翁正三之謬妄、則不必與辨矣

鐵尚書本、今歸河南禮部侍郎周公(祖培)<sup>(52)</sup>、尚書藏彼冊有年、蓋得之門下士者、祕不示人、有索之者、咲曰、此門生某以之作贄者、異日吾子中<sup>(53)</sup>式亦以爲贄、道光辛巳、<sup>(54)</sup>公子(瑞元)<sup>(55)</sup>舉京兆房考官、卽周侍郎也、因贄得之、都下傳爲美談、郭蘭石太常題其後、仍祝與子爲贄、不必祝其世守云

嶺南羅天池記、<sup>(57)</sup> 昔年四十二

「六湖」(朱文長方印)

〔第四開左〕第五開右〕

「玉簡齋」(白文方印)

右軍書法盛于初唐、顧屢經劫火、真蹟化爲雲烟、今日欲睹山陰真面、但有於石刻求之、宋世閣帖經侍書王著手模、全失筆意、所謂鄉愿亂德、久爲識者所識、則右軍真相僅可於唐刻中求之、於是歷代學者爭求懷仁集序、而復本至多、天水舊拓希於星鳳、吾鄉楊大瓢鐵函齋書跋、已有未斷真本、世不多見、見亦價等連城讓、矧又在二百餘年之後乎、東邦同好、每託予物色宋拓善本、苦無以徧應、去歲赤鼎崩淪、士夫生計蕩然、乃爭出寶物乞售、一月中予得見宋拓聖教序凡三本、曰吳荷屋藏本、曰詒晉齋本、曰桐城方氏本、三本皆有名海內、夙夕求見而不可得者、竝几互勘、以吳本爲最異、爲明晉府遺寶、無尋常描墨之失、神彩煥發、爲北宋精拓確無可疑、飛香館主人、於三本中獨取此本、可謂具眼矣、至冊後鑑藏家諸跋、宋·蔡·何·吳竝爲定論、覃溪所云、吾家天池詎爲謬妄、亦非過當、惟附記又盛稱周本、殆未知周本爲復刻之尤劣者、予曩在都下聞都人士嘖嘖稱周本推爲海內第一、後於張筱帆中丞許見之、始恍然于傳聞之妄、天池乃引彼本與此拮衡、其愚闇殆與翁等、於此益知鑑賞之難也

壬子四月、上虞羅振玉審定題記

「振玉之印」(白文方印)

#### 〔別帖〕

清南海吳荷屋中丞、富收藏精鑑賞、其舊藏宋拓集王聖教序、近歸浪華飛香館、有明晉府印記、姜西溟以下數名人題跋、吳君屢以他本對校、凡南宋本缺損之字、此本完好者、皆自注于帖上、定爲北宋佳拓、辯翁正三以爲宋末元初拓之謬、鑿鑿有據、非以其所自藏、故爲抑揚也、余所目睹上野有竹君藏本、(76) 氈臘較精、而多剪損移補之字、與此本互有短長、要其爲北宋舊拓則一也、館主人頃將景印以貽同好、(77) 屬予跋尾、嗚呼三年之閒、兩跋北宋本聖教、(78) 如許眼福、豈世所數觀、欣然援筆書之

大正二年二月、湖南內藤虎

「藤虎私印」(白文方印)

#### 鑑藏印

- 〔帖首第二開〕
- 「羅六湖鑑定藏之修梅仙館」(朱文長方印) (羅天池)
- 〔本紙第一開右〕
- 「吳伯榮氏祕笈之印」(朱文長方印) (吳榮光)
- 「吳氏荷屋平生真賞」(白文方印) (吳榮光)

- 「士 私印」(白文重廓方印) (用印者未詳)
- 「趙氏子昂」(朱文方印) (趙孟頫)
- 「臣天池印」(白文方印) (羅天池)
- 「子子孫孫永寶用」(朱文方印) (明の晉王府の印カ)
- 「弘農郡圖書印」(朱文長方印) (用印者未詳)
- 「伍元蕙審定金石文字」(朱文方印) (伍元蕙)
- 「南海吳榮光珍藏書畫」(朱文方印) (吳榮光)
- 「伯榮祕寶」(白文重廓方印) (吳榮光)
- 〔第一開右表裝接邊〕
- 「晉府書畫之印」(朱文方印) (明の晉王府の印)
- 〔第一開右表裝〕
- 「齋」(朱文方印) (用印者未詳)
- 〔第十五開右〕
- 「吳石雲吉金貞石印」(白文方印) (吳榮光)
- 〔第十八開右〕
- 「伯榮審定」(朱文方印) (吳榮光)
- 〔第十九開右〕
- 「伍儷荃鑑賞章」(白文長方印) (伍元蕙)
- 「王氏珍藏書畫印」(白文方印) (用印者未詳)
- 「葉志誥印」(白文方印) (葉志誥)

注

- 〔1〕 飛香館 本帖の收藏者である二代・黒川幸七(一八七〇〜一九三八)が、明治末頃に御影(神戸市)に立てた別荘の名。彼自身も飛香館主人と稱された。
- 〔2〕 羅振玉 「一十七帖」注(159)を参照。
- 〔3〕 宋徵輿 一六一八〜六七。字は轅文、號は直方、佩月主人など。華亭(上海市)の人。順治四年(一六四七)の進士。
- 〔4〕 姜宸英 一六二八〜九九。字は西冥、號は湛園、慈溪(浙江省)の人。康熙三十六年の進士。『清史稿』卷四八九。
- 「遂翁審定」(白文方印) (用印者未詳)
- 「何紹基觀」(白文方印) (何紹基<sup>79</sup>)
- 「荷屋所得古刻善本」(朱文長方印) (吳榮光)
- 「陽圖書印記」(朱文方印) (用印者未詳)
- 〔第十九開右表裝接邊〕
- 「敬德堂圖書印」(朱文方印) (明の晉王府の印)
- 〔帖尾第一開左〕
- 「伍儷荃鑑賞章」(白文方印) (伍元蕙)

(5) 玉壺秋碧 後述の宋徵輿の題識にも「玉壺秋碧軒」とあるが未詳。

(6) 南海吳氏 本帖の舊藏者、吳榮光(一七七三―一八四三)のこと。字は伯榮、號は荷屋、可庵など。南海(廣東省)の人。嘉慶四年(一七九九)の進士。書畫、金石の收藏に富み、著に『筠清館金石記』、『辛丑銷夏記』がある。『清史列傳』卷三八。

(7) 黎瑤石 黎民表、字は惟敬、號は瑤石のこと。從化(廣東省)の人。嘉靖十三年(一五三四)の舉人。『明史』卷二八一。本題簽は、黎民表の題簽をもつ別本から、翁方綱(注(9)参照)が臨書した。

(8) 庚辰 後掲の翁方綱跋によると、この記年も臨書によるものであり、翁は「何人の書する所なるかを知らず」としている。

(9) 「覃溪」 翁方綱(一七三三―一八一八)の印。字は正三、號は覃溪、晚號は蘇齋。直隸大興(北京市)の人。乾隆十七年(一七五二)の進士で、内閣學士に至る。金石法帖の研究で著名。『清史列傳』卷六八、『清史稿』卷四八五。

(10) 荷屋 注(6)参照。

(11) 宋搨不斷碑 集王聖教序は、明の萬曆四十三年(一六一五)に斷裂した(王昶『金石萃編』)。異説があり、張廷濟『清儀閣金石題識』に諸説の要約がみえる(この項、西林昭一「集字聖教序」、『中國書法ガイド 一六集王聖教序』二玄社、一九八七年による)。

(12) 癸巳 順治十年(一六五三)。

(13) 錢子璧 錢穀、字は子璧、號は内史、晚號は東海逸民。清時代、華亭(上海市)の諸生。能書で知られた。

(14) 玉壺秋碧軒 未詳。

(15) 徵輿 注(3)参照。

(16) 以下、表裝に書された注記は全て吳榮光による。

(17) 壬申 康熙三十一年(一六九二)。

(18) 玉峰 玉峰(江蘇省嘉定)のことか。待考。

(19) 道積三世兄 未詳。

(20) 姜宸英 注(4)参照。

(21) 道光癸未 道光三年(一八二三)。

(22) 蔡之定 字は麟昭、號は生甫、穀山、積谷山人、鐵花居士。乾隆の進士。

(23) 道光丁酉 道光十七年(一八三七)。

(24) 德畬 潘仕成、字は德畬。番禺(廣東省)の人。書

室を海山仙館という。

(25) 何紹業 一七九九〜一八七三。字は子毅。道州(湖南省)の人。何紹基(注(79)参照)の弟。

(26) 潘毅堂 潘有爲、字は卓臣、號は毅堂。番禺の人。乾隆三十七年(一七七二)の進士。翁方綱の弟子。花卉畫を善くした。

(27) 三長物齋 黃本驥の室名。字は仲良、號は虎癡。寧鄉(湖南省)の人。道光元年(一八二二)の舉人。『清史列傳』卷七三。

(28) 天順年間 一四五七〜六四。

(29) 王箒林 王澍(一六六八〜一七三九)、字は若林、箒林、號は虛舟、竹雲、二泉寓客、良常山人など。金壇(江蘇省)の人。康熙五十一年(一七一三)の進士。『清史稿』卷五〇二、『清史列傳』卷七一。

(30) 趙松雪 元の趙孟頫(一二五四〜一三三二)のこと。字は子昂、號は松雪道人。

(31) 嘉慶丙寅 嘉慶十一年(一八〇六)。

(32) 陳勾山 陳兆崙(一七〇〇〜七一)、字は星齋、號は勾山。錢塘(浙江省)の人。雍正八年(一七三〇)の進士。

(33) 戊子 道光八年(一八二八)。

(34) 南海伍氏 伍元蕙、字良謀、又の字を儷荃、號は南雪道人。南海(廣東省)の人。

(35) 筠清館 吳榮光(注(6)参照)の室名。

(36) 乾隆癸巳 乾隆三十八年(一七七三)。

(37) 丁酉 乾隆四十二年(一七七七)。

(38) 張石公 未詳。

(39) 己丑 道光九年(一八二九)。

(40) 春湖 李宗瀚(一七六九〜一八三一)のことか。字は公博、號は春湖。臨川(江西省)の人。乾隆五十八年の進士。『清史稿』卷三五四。

(41) 陸儼山 陸深(一四七七〜一五四四)、字は子淵、號は儼山、華亭の人。弘治十八年(一五〇五)の進士。

(42) 施顧蘇詩 宋の施元之と顧禧の注による蘇軾詩集。

(43) 物聚所好 歐陽脩(一〇〇七〜一〇七二)の『集古錄』の序文を踏まえている。

(44) 子毅紹業 注(25)参照。

(45) 丁酉 道光十七年(一八三七)。

(46) 嘉慶丙寅 嘉慶十一年(一八〇六)。

(47) 道光己酉 道光二十九年(一八四九)。

(48) 葉志誥 葉志誥(一七七九〜一八六三)、字は東卿。

漢陽(湖北省)の人。

(49) 鐵冶亭 鐵保(一七五二〜一八二四)、字は冶亭、

號は梅庵。滿州正黃旗の人。乾隆三十七年(一七七

二)の進士。

(50) 溫雲心 溫啓封、字は石峰、號は雲心、綠雲仙館。

太原(山西省)の人。

(51) 華亭李瀛門 未詳。

(52) 周公(祖培) 周祖培、字は叔滋、又の字は芝臺。

諡は文勤。嘉慶の進士。『清史稿』卷三九六、『清史列

傳』卷四六。

(53) 吾子中式 未詳。

(54) 道光辛巳 道光元年(一八二一)。

(55) 公子(瑞元) 未詳。

(56) 郭蘭石 郭尙先(一七八五〜一八三二)。字は元開、

號は蘭石、伯抑。莆田(福建省)の人。嘉慶十四年の

進士。『清史列傳』卷七三。

(57) 羅天池 字は六湖、一の字は洙湖。新會(廣東省)

の人。道光六年(一八二六)の進士。

(58) 山陰 現在の浙江省紹興市。ここでは、同地に會

稽内史として赴任し、蘭亭の會を開いた王羲之を指す。

(59) 王著 北宋の書家。翰林侍書となり太宗の敕命で

内府所藏の名蹟を模勒し「淳化閣帖」を編纂した。

(60) 鄉愿亂德 『孟子』盡心下、「惡鄉原、恐其亂德」

に基づく。

(61) 天水舊拓 天水は北宋を意味する。ここでは宋代

の舊拓を言うか。蔡條『鐵圍山叢談』に「昔江南李

重光、染帛多爲天水碧、天水國姓也、當是時、藝祖

方受命、言天水碧者、世謂逼迫之兆、未幾、王師果

下建鄴」とある。『宋史』卷四七八、南唐李氏世家

も、この逸話を載せる。

(62) 楊大瓢鐵函齋書跋 楊賓(一六五〇〜一七二〇)、

字は可師、號は耕夫、大瓢山人。羅振玉と同郷の上

虞(浙江省)の人。『清史列傳』卷七〇、『清史稿』

卷五〇四。『鐵函齋書跋』はその著作の一つで、卷

三に「家藏七佛頭未斷聖教序」を著録する。

(63) 價等連城讓 秦の昭王が、趙の惠文王所藏の卞和

の璧を、十五城と交換しようとした連城璧の故事に

よる。『史記』廉頗傳。

(64) 去歲赤鼎崩淪 赤鼎は、『史記』趙世家に見える故事。

「十八年、秦武王與孟說舉龍文赤鼎、絕臚而死」。ここでは、辛亥革命で清朝が滅んだことを指す。

(65) 詒晉齋 乾隆帝の十一子、永理（一七五二～一八二三）のこと。字は鏡泉、號は少厂、即齋、齋號は詒晉齋。乾隆五十四年（一七八九）に成親王に封ぜられた。

能書で知られる。『清史稿』卷二二一。

(66) 桐城方氏 方貞觀（一六七九～一七四七）、號は南堂のこと。

(67) 明晉府 明洪武帝の第三子で晉恭王に封じられた朱桐（？～一三九八）を祖とする晉王府の印。『明史』卷一一六。

(68) 飛香館主人 注（1）参照。

(69) 宋・蔡・何・吳 羅氏の前に本帖に跋した宋徵輿、蔡之定、何紹業・吳榮光の四氏を指す。

(70) 覃溪 翁方綱（注（9）参照）。三度にわたる跋（前掲）のうち、第一跋において「黎瑤石隸書題籤者、宋末元初所拓與此本極肖」という見解を示した。

(71) 吾家天池 羅天池（注（57）参照）。

(72) 周本 周本とは、周祖培（注（52）参照）所藏本。

羅天池は、本帖の跋（前掲）において翁の見解を批判し、周本を評價した。

(73) 張筱帆 張曾敷（一八五二～一九二〇）、字は潤生、抑仲、又の字、小帆、筱帆、號は靜淵。南皮（河北省）の人。同治十年（一八七一）の進士。

(74) 姜西溟 姜宸英（注（4）参照）。

(75) 翁正三 翁方綱（注（9）参照）。

(76) 上野有竹君藏本 本書「二 集王聖教序（上野本）」のこと。

(77) 館主人頃將景印以貽同好 黒川幸七は大正二年（一九一三）に、博文堂から本帖のコロタイプを出版し、同好の士に寄贈した。

(78) 兩跋北宋本聖教 跋の筆者である内藤湖南（一八六六～一九三四）が、上野本に、明治四十四年（一九一一）に跋し、さらに本帖にも跋する機會を得たことを指す。

(79) 何紹基 一七九九～一八七三。清朝後期、碑學派の書家として著名。

## 備考



「集王聖教序」は、玄奘（三藏法師）がインドから請來し漢譯した經典に對して唐の太宗が與えた序文などを、長安弘福寺の僧・懷仁が、王羲之の種々の書蹟から集字して碑としたものである。手本には、王羲之を愛好した太宗が集めさせた宮中收藏の王羲之書が使われたと考えられ、王書の模範として尊重されてきた。西安碑林に現存するが損傷が激しく、北宋時代の拓本とされる本品は、かつての良好な状態を伝える。

古い鑑藏印としては、元の趙孟頫、明の晉王府の印があるが、著名な印であるためその眞偽には検討の餘地がある。次に題跋を年代順に整理してみると以下のようになる。

宋徽輿題 順治十年（一六五三）

姜宸英跋 康熙三十一年（一六九二）九月二十二日

翁方綱跋 嘉慶十一年（一八〇六）二月九日

翁方綱跋 嘉慶十一年（一八〇六）三月七日（その後に

續く一跋も同時期か）

蔡之定跋 道光三年（一八二三）

吳榮光跋 道光八年（一八二八）十一月以降

吳榮光跋 道光八年（一八二八）十二月三日

吳榮光跋 道光九年（一八二九）四月十二日

何紹業觀記 道光十七年（一八三七）

何紹業跋 道光十七年（一八三七）四月

葉志詵跋 道光二十九年（一八四九）九月十九日

羅天池跋 四十二歲時

羅振玉跋 明治四十五年（大正元年 一九一二）四月

内藤湖南跋 大正二年（一九一三）二月

このうち宋徽輿は本帖を「宋搨不斷碑」としたが（ ）、翁方綱は、黎瑤石（黎民表）の題籤をもつ別本との類似から「宋末元初所拓」と判断した（ ）。その後、蔡之定が「北宋拓本」と鑑定（ ）。さらに所藏者である吳榮光は、北宋拓とされていた三長物齋本を伍元蕙より借り受けて對勘し（ ）、本帖がそれと變わらないと考えた。また黎瑤石題籤本も従來の跋では北宋拓とされていることから、翁方綱の見解に疑問を呈した（ ）。さらに、黎瑤石題籤本を借り受けて校勘した結果、南宋本と判断し、本帖がそれよりも古い「北宋佳拓」であるとして、南宋本との差異を逐一注記するに至った（ ）。この後本帖は潘仕成に譲られて何紹業の觀記（ ）と跋（ ）、葉志詵跋（ ）が記された。さらに羅天池の收藏を経た（ ）。二代黒川幸七（一八七一〜一九三八）が、博文堂から本帖を入手したのは、明治四

十五年である。領收書（日付は五月二十四日、金額は二五

〇〇圓）が現存している（川見典久「黒川家三代の蒐集に  
關する領收書」『古文化研究』八號、二〇〇八年）。當時、

京都に住み始めたばかりの羅振玉が跋を寄せ、近年見た本  
帖、詒晉齋本、桐城方氏本のうち、本帖を幸七が購入した  
ことに贊意を示している（ ）。大正二年の春には、博文堂  
からコロタイプ複製が出版されることになり、内藤湖南が  
跋を寄せ、先に跋した上野本とともに「北宋舊拓」であり、  
三年のうちに兩度にわたって跋をする機會を得た眼福を喜  
んでいる（ ）。この年は、王羲之が蘭亭集禊を行った永和  
九年（三五三）と同じ癸丑の年に当たり、東京や京都で蘭  
亭會が催された。京都は四月十二、十三日に京都府立圖書  
館にて、蘭亭序・王羲之關連の作品・拓本等二百餘點を集  
めた大展覽會が催され、本帖も出品された。幸七は、これ  
に合わせて、發行されたばかりの複製を同好の士に寄贈し  
ており、内藤湖南、犬養木堂、日下部鳴鶴らの禮狀が傳わ  
っている（川見典久「二代黒川幸七に關する書簡」『古文化  
研究』七號、二〇〇八年）。當時、幸七は四十三歳。御影に  
別荘・飛香館を築き、移り住んだ時期でもあり、様々な人  
脈を得て中國美術蒐集が本格化していく契機ともなったと

考えられる。

#### 参考文献

- コロタイプ複製：大正二年（一九一三）二月二十四日印刷、  
大正二年二月二十七日發行、著作兼發行印刷者 油谷達、  
印刷所 小林寫眞製版所、發行所 油谷博文堂  
中田勇次郎「集王聖教序 兵庫 黒川古文化研究所」解説  
（『書道全集』第八卷、平凡社、一九五七年）  
張彥生「懷仁集王書《聖教序》拓本概述」（『文物』一九六  
三年第三期）  
『中國書法ガイド 一六 集王聖教序』（二玄社、一九八七  
年）  
神田喜一郎「大正癸丑の蘭亭會」（『昭和癸丑蘭亭展圖録』、  
日本書藝院、一九七三年）  
須羽源一「大正癸丑の京都蘭亭會について」（『書論』三號、  
一九七三年）

〔竹浪遠〕

#### 四 五星二十八宿神形圖 傳張僧繇筆

大阪市立美術館

原本南朝梁

絹本着色

二七・五×四八九・七

#### 內箱蓋表

梁張僧繇<sup>(1)</sup>五星二十八宿真形圖

長尾甲<sup>(2)</sup>署檢

「甲」(白文方印)、「子生」(朱文方印)

#### 內箱蓋裏

六朝名畫、顧愷<sup>(3)</sup>之<sup>(4)</sup>陸探微於晉·宋、張僧繇於梁、傑然特立、卓如星鳳、畫斷云、<sup>(5)</sup>喻之書、則顧·陸比之鍾<sup>(6)</sup>·張<sup>(7)</sup>、僧繇比之逸少<sup>(8)</sup>、可謂篤論矣、僧繇、吳人、天監中<sup>(9)</sup>、歷官右將軍·吳興太守、其畫骨氣奇偉、規模宏逸、人物衣冠、信稱絕作、此卷五星二十八宿真形圖、宣和御府所藏、<sup>(10)</sup>書畫舫謂、<sup>(11)</sup>狀貌奇詭、筆墨精微、尤其是設色濃古、位置爾雅、品在閣立本·吳道子<sup>(12)</sup>上、<sup>(13)</sup>圖繪寶鑑則以為梁令瓚畫、<sup>(14)</sup>董思白以為吳道

子、陳眉公<sup>(16)</sup>以為閣立本、粉粉聚訟、不衷一是、然宣和畫譜

既定為僧繇、趙松雪<sup>(17)</sup>亦極推許之矣、庸後人強立異說也、笙

洲<sup>(18)</sup>大雅獲之、以謂隨珠趙璧不足比貴、良有以哉

大正丙寅三月、觀於爽籟館<sup>(19)</sup>、因記歲月、用志眼福、長尾甲

「甲印」(白文方印)、「雨山」(朱文方印)

#### 外題簽

南朝梁張僧繇五星廿八宿神形圖真蹟卷

#### 題識

前隔水

梁令瓚蜀人、開元時、率府兵曹參軍、畫人物似吳道子、精

天文數術、工篆書、見唐書天文志<sup>(20)</sup>、南陽名畫表

此卷、設色古艷、人物如生、非唐人不能辦、安儀周定為令

瓚作、信不誣也

#### 題記

卷首

南朝梁張僧繇五星及廿八宿神形圖、奉義郎 龍州別駕集賢

院待「制仍太史梁令瓚上」

## 本文

〔五星神形圖第一圖〕

歲星神、豪俠勢利、立廟可於君門、祭用白幣、器用銀、食上白鮮、諱彩色、忌哭歲泣星爲君王<sup>(22)</sup>

〔第二圖〕

熒惑星神、食火、祭用血肉、酒器用赤銅、幣用赤、殺牲吸血、祭具戰器鼓舞、然後祭之、忌哭泣、善事熒惑嬌暴、公子熒惑、廟可致軍門

〔第三圖〕

鎮星神、以黑煙霧爲宮、祭用烏麻油、蔬食飲水、幣用故黑、器用鐵、戒在奢姪、鎮星是御史、宜水土事、立祠農疇水渚傍

〔第四圖〕

太白星神、祭用女樂、器用金、幣用黃、食用血肉、不殺牲、亦忌哭泣、太白廟女、宮中黃、屋飾皆黃、仍被五彩、太白金后妃也

〔第五圖〕

辰星神、功曹也、知天下、理文墨歷術、典吏傳送、執天下網紀、辰星日御也、常不離日、祭用碧、器用碧玉、幣用碧色、祭用蔬水類【魚屬】、廟可致於相府也【中書省是】

〔二十八宿神形圖第一圖〕

角星神、聰睿勇智、受快樂、通律歷、名芸芳、一名先率、姓熾振

〔第二圖〕

亢星神、性淳質清平、通於戰陣、名賢戰

〔第三圖〕

氐星神、廟有九萬里、通於數紀之會、名粉評【姓爲翟衛】

〔第四圖〕

房星神、性毒雄、多姪多子、妖訛呪咀、淫祠兩形、與丈夫婦人、更爲雄雌、廟一十萬餘里、廟敬邪廣、名含孫、姓爲管紀踐

〔第五圖〕

心星神、性多毒、多姪多子、妖訛呪咀、淫祠兩形、與丈夫婦人、更爲雄雌、廟十萬里、廟敬邪廣、名招貴【姓房館】

〔第六圖〕

尾星神、能刻衆神、而不受衆神刻、名闔當【姓爲張兕】

〔第七圖〕

風星神、吼如母大蟲、不受人制、獨用、能害物、通於兵、名士常【姓爲談、注云、士或爲吐】

〔第八圖〕

斗星神、能起伏陰陽、其廟無定準里數【名狀□拒堵綫】

〔第九圖〕

牛星神、善醫多病、受占侯陰陽、謠邪妄說禍福、既以謠辭扇動人、名略緒熾、姓鐮徐

〔第十圖〕

女星神、姪亂食讒、善醫多病、受占侯陰陽、謠邪妄說禍福、能以謠辭扇動人、廟廣五萬六千里、名爲色舒

〔第十一圖〕

虛星神、明歷術、名闔陽、姓明辟彊

〔第十二圖〕

危星神、好哭泣、剛腹嫉惡、好亂好殺、廟廣五萬六千里、名推長、姓呂賈生

### 鑑藏印

〔本紙首部〕

〔右半缺〕（朱文雙龍印）（宋·徽宗）

〔景行維賢〕（白文方印）（完顏景賢<sup>23</sup>）

〔宣〕「和」（朱文連印）（宋·徽宗）

〔騎縫〕

〔河北棠邨〕（朱文方印）（梁清標<sup>24</sup>）

〔本紙尾部〕

〔宣和殿寶〕（朱文方印）（宋·徽宗）

〔祕書省印〕（朱文方印）（宋·徽宗）

〔政〕「和」<sup>25</sup>（朱文連印）（宋·徽宗）

〔希世之珍〕（朱文方印）（用印者未詳）

〔安儀周家珍藏〕（朱文長方印）（安岐<sup>26</sup>）

〔完顏景賢精鑑〕（朱文方印）（完顏景賢）

〔鄭邸鑑賞之章〕（朱文長方印）（鄭王府<sup>27</sup>）

〔壺公經眼〕（朱文方印）（用印者未詳<sup>28</sup>）

〔張□□印〕（朱文方印）（用印者未詳）

〔□□（左半缺）〕（朱文方印）（用印者未詳）

〔後綾〕

〔思原堂〕（白文方印）（安岐）

〔麓邨〕（朱文方印）（安岐）

〔後綾跋紙騎縫〕

〔「右半缺」治溪〕漁隱<sup>(29)</sup> (朱文長方印) (梁清標)

〔跋首脚〕

〔壺公經眼〕(朱文方印) (用印者未詳)

### 跋

二十八宿真形圖、吳道子筆、曾爲吳中韓宗伯家藏、宗伯教習庶常時、嘗得諦觀、今又見嘉禾戴康侯藏此卷、宣和時、重道教、又收括名畫、必載譜中、物真神品也

丙子中秋、董其昌識<sup>(32)</sup>

〔宗伯學士〕(白文方印)、「董氏玄宰」(白文方印)

余見二十八宿圖、一在莫廷韓家、一在王敬美家、強半摹本、獨此卷、自角至危止、後印雙龍璽・宣和殿寶、蓋宋道君庫中墨王也、前畫五星、又余所未睹、其爲閻立本筆無疑、筆墨設色、正華嚴變相同、此李龍眠畫脈所自出、珍重珍重  
陳繼儒題

〔眉公〕(朱文方印)、「陳繼儒印」(白文方印)

### 鑑藏印

〔跋尾部〕

〔梁清標印〕(白文方印) (梁清標)

〔蕉林王立氏圖書〕(朱文方印) (梁清標)

〔跋紙尾騎縫〕

〔心賞〕(朱文葫蘆印) (安岐)

〔安氏儀周書畫之章〕(朱文長方印) (安岐)

### 注

- (1) 張僧繇 生卒年不詳、吳郡(江蘇省蘇州)の人。南朝梁・武帝の天監年間(五〇二〜一九)に武陵王國侍郎となり、武帝の祕閣に直して畫事を掌り、右軍將軍・吳興太守などを歴任した。『宣和畫譜』卷一 張僧繇の條に「五星二十八宿神形圖」が挙げられている。
- (2) 長尾甲 一八六四〜一九四二、號は雨山。阿部房次郎の收藏品の箱書の多くは、長尾によつて揮毫された。
- (3) 顧愷之 三四五頃〜四〇五頃、字は長康、晉陽無錫(江蘇省)の人。東晉の文人畫家。
- (4) 陸探微 ? 四八五頃、吳郡(江蘇省蘇州)の人。

南朝宋・明帝(在位四六五〜七二)の時の宮廷畫家。

(5) 畫斷 唐・張瓌『畫斷』は亡佚。唐・張彥遠『歷代名畫記』卷五に同文が見える。

(6) 鍾 鍾繇(一五一〜二三〇)、字は元常、諡は成侯。

長社(河南省許昌)の人。漢では尙書僕射、魏では太傅に至った。

(7) 張 張芝、生卒年未詳、後漢・獻帝の初平(一九〇〜

九三)中に没した。字は伯英、酒泉(甘肅省)の人。靈帝(在位一六八〜八九)の時、有道に召されたが就かず、張有道と稱された。

(8) 逸少 王羲之(三〇三〜六一、異説あり)の字、會稽山陰(浙江省紹興)の人。官は右軍將軍・會稽内史に至った。

(9) 天監 南朝梁・武帝の年號。五〇二〜一九年。

(10) 宣和 宋・徽宗趙佶(一〇八二〜一一三五)の年號。一一一九〜二五年。

(11) 書畫舫 『清河書畫舫』。著録参照。

(12) 閣立本 ?〜六七三、諡は文定。雍州萬年(陝西省臨潼縣)の人。貴族の出身で、工部尙書から宰相となり、太宗の宮中で畫人として活躍した。『宣和畫譜』卷一閣立本の條に「五星像」が見え、宋・董道『廣川畫

跋』等も閣立本の「二十八宿神形圖」を録している。

(13) 吳道子 ?〜七一九〜四九?。初名は道子、陽翟

(河南省禹縣)の人。玄宗朝に仕え、西安・洛陽の宮廷や寺觀の壁畫を多數畫いて「畫聖」と稱された。『宣和畫譜』卷二吳道玄の條は「五星像」「五星圖」「二十八宿像」を擧げている。

(14) 梁令瓚 ?〜七二一?。蜀(四川省)の人。玄宗の時、集賢院待詔、率府兵曹參軍に任ぜられた。天文家として知られ、人物畫と篆書に優れた。『圖繪寶鑑』補遺梁令瓚の條に「宋祕閣有五星二十八宿神形圖一卷」とある。

(15) 董思白 董其昌(一五五五〜一六三六)、字は玄宰、思白はその號。華亭(上海市松江)の人。

(16) 陳眉公 陳繼儒(一五五八〜一六三九)、字は仲醇、眉公はその號。華亭(上海市松江)の人。

(17) 趙松雪 趙孟頫(一二五四〜一三二三)、字は子昂、松雪はその號。湖州(浙江省吳興)の人。

(18) 笹洲 阿部房次郎(一八六八〜一九三七)の號。彦根(滋賀縣)の人。本姓は辻。近江商人の阿部氏の婿となり、阿部姓となる。東洋紡績株式會社社長などを

務めた。昭和十八年（一九四三）、子の孝次郎氏により、その收藏品一六〇件が大阪市立美術館に寄贈された。

(19) 爽籟館 同右。

(20) 唐書天文志 『舊唐書』卷三五・志第一五・天文上。

(21) 絹本の缺損により、題字の後半部が判讀し難いが、『祕殿珠林』卷一八に本圖と別本の寫しが録されており、これにより「」の部分の補うことができる。また本圖では「郎」字と「瀧」字の間に空白があるが、『祕殿珠林』本では「守」字があり、「守瀧州別駕」となっている。

(22) 忌哭歳泣星爲君王 「歳」字と「泣」字に倒置がある。「忌哭泣、歳星爲君王」の誤寫である。

(23) 完顔景賢 一八七五〜一九三一。字は享父、號は樸孫・小如庵、滿州鑲黃旗の人。清末の大收藏家で、その名品の多くが日本とりわけ阿部房次郎に歸した。

(24) 梁清標 一六二〇〜一六九一。字は玉立・棠村、號は蕉林・青巖・治溪漁隱など。直隸眞定（河北省正定）の人。兵部・禮部・刑部・戸部の尙書を歴任し、保和殿大學士を拜した。

(25) 「政」「和」 政和は一一一一〜一一一八。

(26) 安岐 一六八三〜？。

(27) 鄭王府 一六七一以後。

(28) 「壺公經眼」（朱文方印） 壺公の號を持つ人物に錢杜（一七六三〜一八四四）がいる。

(29) 「右半缺「治溪」」漁隱」 梁清標。上海博物館編『中國書畫家印鑑款識』（文物出版社、一九八七年）、九二四頁の同一と思われる印影により補った。

(30) 吳中韓宗伯 韓世能（一五二八〜九八）、字は存良、長洲（江蘇省蘇州）の人。隆慶二年（一五六八）の進士で、官は禮部侍郎・教習庶吉士（教習庶常）に昇った。宗伯は禮部侍郎の異名。

(31) 嘉禾戴康侯 戴晉（？〜一六〇八〜二八〜？）、康侯はその字、號は松廠。嘉禾（湖南省）の人で、嘉興（浙江省）に居した。

(32) 丙子 崇禎九年（一六三六）。

(33) 莫廷韓 莫是龍（一五三七〜八七）、廷韓はその字、別字は雲卿、號は秋水。華亭（上海市松江）の人。

(34) 王敬美 王世懋（一五三六〜八八）、敬美はその字、號は麟州。太倉（江蘇省）の人。



(35) 宋道君 北宋・徽宗をいう。

(36) 華嚴變相 李公麟「華嚴變相圖」の遺品として、大英博物館蔵本がある。

(37) 李龍眠 李公麟(一〇四九―一一〇六)、字は伯時、龍眠はその號。桐城(安徽省)の人。

### 備考

『宣和畫譜』などは畫題を記すのみで、それが本圖卷に當たるかは定かでない。宋の内府の收藏璽以後では、董其昌の跋によって明末には韓世能・戴晉に藏されていたことが判る。著録では吳升『大觀錄』が最も古く、『墨緣彙觀』の著者安岐のほか、梁清標、完顏景賢といった收藏家の印が鈐されている。その後、阿部房次郎の所藏に歸し、箱書は長尾甲が一九二六年に揮毫している。

### 著録

『宣和畫譜』卷一、夏文彥『圖繪寶鑑』補遺、張丑『南陽名畫表』、同『清河書畫舫』寅集、顧復『平生壯觀』卷六、詹景鳳『東圖玄覽』卷一、卞永譽『式古堂書畫彙考』卷八、

吳其貞『書畫記』卷二、吳升『大觀錄』卷一一、安岐『墨緣彙觀』續錄、佚名編『京師書畫展覽會出品總目錄』、大阪市立美術館藏 中國繪畫(朝日新聞社、一九七五年)

### 参考文献

原田尾山 圖版解説『爽籟館欣賞』第二輯(博文堂、一九三九年)

矢代幸雄「五星二十八宿神形圖卷」(『美術研究』一三九、一九四四年)

中川憲一 圖版解説『大阪市立美術館・上海博物館藏中國書畫名品圖録』(二玄社、一九九四年)

孟嗣徽「《五星廿八宿神形圖》圖像考辨」(『藝術史研究』二輯、二〇〇〇年)

(弓野隆之)

## 五 伏生授經圖 傳王維筆

重要文化財 大阪市立美術館

原本唐

絹本着色

二五・四×四四・七

### 題簽

〔前綾〕

王維寫濟南伏生

「三」（朱文乾卦圓印）（宋・高宗趙構<sup>4</sup>）

### 鑑藏印

〔前綾〕

「蕉林鑑定」（白文方印）（梁清標<sup>5</sup>）

「北海孫氏珍藏書畫印」（朱文方印）（孫承澤<sup>6</sup>）

「景賢鑑藏」（朱文橢圓印）（完顏景賢<sup>7</sup>）

「江南黃琳」（朱文方印）（黃琳<sup>8</sup>）

「休伯之印」（朱文方印）（黃琳）

「關內侯印」（白文方印）（用印者未詳）

「敕褒忠節之家」（朱文方印）（用印者未詳）

〔前綾本紙騎縫〕

「雙檜堂監定真蹟」（朱文方印）（李廷相<sup>9</sup>）

「黃美之氏」（朱文方印）（黃琳）

「龍門津業書院圖籍」（白文長方印）（用印者未詳）

〔本紙首部〕

### 內箱蓋表

唐王摩詰伏生授經圖

### 內箱蓋裏

兩山長尾甲署檢

「長尾甲印」（白文方印）、「兩山居士」（朱文方印）

### 外題簽

伏生授經圖

### 題字

□□□□<sup>3</sup>

「北平孫氏」(朱文長方印) (孫承澤)  
 「宣和中祕」<sup>(10)</sup>(朱文長方印) (宋·徽宗)  
 「河北棠邨」(朱文方印) (梁清標)  
 「黃琳美之」(朱文方印) (明·黃琳)  
 「休伯」(朱文方印) (明·黃琳)  
 「〔右半缺〕司印」(朱文方印) (用印者未詳)  
 「〔本紙尾部〕」  
 「完顏景賢清鑑」(朱文方印) (完顏景賢)  
 「商邱宋瑩審定真跡」(朱文長方印) (宋瑩)<sup>(11)</sup>  
 「謝氏珍藏書畫印」<sup>(12)</sup>(白文長方印) (用印者未詳)  
 「承澤」(白文長方印) (孫承澤)  
 「易庵圖書」(朱文方印) (項聖謨)<sup>(13)</sup>  
 「琳印」(白文長方印) (明·黃琳)  
 「美之」(朱文方印) (明·黃琳)  
 「紹」<sup>(14)</sup>「興」(朱文連印) (宋·高宗)  
 「〔本紙後綾騎縫〕」  
 「濮陽李廷相雙檜堂書畫私印」(朱文長方印) (李廷相)  
 「〔後綾〕」  
 「北平孫氏」(朱文長方印) (孫承澤)

### 觀署

「黃琳美之」(朱文方印) (黃琳)  
 「休伯」(朱文方印) (黃琳)  
 「表功旌烈之家」(朱文方印) (用印者未詳)  
 「孫承澤印」(白文方印) (孫承澤)  
 「長宜子孫」(白文方印) (孫承澤)  
 「〔後綾觀署騎縫〕」  
 「其永寶用」(朱文方印) (用印者未詳)

桐江吳哲<sup>(15)</sup>、錢塘吳說<sup>(16)</sup>、獲觀于開府郡王齋閣、紹興癸丑長至  
 後一日<sup>(18)</sup>

### 鑑藏印

「觀署尾部」  
 「張則之」(朱文方印) (張孝思)<sup>(19)</sup>  
 「〔跋首部〕」  
 「梁清標印」(白文方印) (梁清標)  
 「蕉林祕玩」(朱文方印) (梁清標)  
 「緯蕭艸堂畫記」(朱文長方印) (宋至)<sup>(20)</sup>

跋

「南洄」(朱文長方印)

右王維所畫伏生、上有宋思陵題字、康熙庚戌十月、觀于退谷孫先生之齋、生濟南人也、予游濟南、於長白山之陰、拜生墓、見其祠宇庫隘、至不容筵几、有司牲醪、歲時之饗、或闕焉不脩、因歎世人無知重生者、蓋經學之不明久矣、思秦之時、諸生訟言封禪、致有坑儒之禍、生為秦博士得免、其明哲有過人者、及漢興、隱士負一時之望、莫若商山四皓、初未聞講習經義、傳之弟子、則其年雖八十餘、衣冠甚偉、與土木何異、生獨能於微言既絕之時、教學齋魯、老而益勤、卒傳之鼂張、斯文未喪、天若有意于生、而錫之年者、百世之後、宜師其人而識其貌焉、維之所畫、特想像為之而已、然藝事既神、其精思所感、如或見之、觀是圖者、不問知其為生、此思陵所以寶惜而親題之也、世之法書善畫、多祕之內府、人既未得觀、閒復流傳於世、藏之者非其人、則觀者亦取非其人、此書畫之厄也、是圖之歸孫氏、非至幸與、先生今年七十有八、猶治尚書不輟、所注禹貢洪範、其發明經義甚詳、對先生之容、益悟維之貌生能入神也、同觀者、譚

七舍人吉璫舟石、李十九秀才良年武曾、布衣秀水朱彝尊跋  
 「朱彝尊印」(白文方印)、「竹垞」(朱文方印)

是圖於庚戌冬、觀于北平孫侍郎蟄室、因跋其尾、既而歸于棠邨梁相國、今為漫堂先生所藏、地雖三易、而三公皆當代正人、不墮格天·半閒·鈴山之手、濟南生亦厚幸矣、艸廬論今古文書賦詩云、若論伏勝功、遺像當鑄金、右丞真蹟難得、傳已千年、直與鑄金等也、老眼生花、雲煙再覩、回憶舊題、三十二年矣、為之憮然、康熙辛巳二月八日、南書房舊史朱彝尊載跋、時年七十有三

「彝」(朱文方印)、「尊」(白文方印)

此王摩詰伏生像、載宣和畫譜、後入思陵甲庫、題字竝乾卦、紹興小璽具存、明李廷相·黃琳、皆賞鑑名家、曾經藏弃、顧鄰初客座贅語云、都元敬從黃美之家、見摩詰伏生圖、為之吐舌、即此卷也、我朝孫退谷先生得之、先生歿、轉歸梁相國棠邨、康熙庚辰十月、余從相國孫右江僉事雍購得、疏其流傳之緒、以示子孫、摩詰為南宗第一人、伏生授書、有關經學、非天王·洛神諸圖可比、收藏珍重、當何如也、

綿津山人宋筆謹識

「丹霞」(朱文長方印)

聖言誰道火於秦、如日經天萬古新、辛苦老生勤記誦、故應  
圖畫爲傳眞

珍重高人王右丞、每於佛畫見精能、含豪更寫傳經叟、知是  
離詮悟上乘<sup>(66)</sup>

癸酉夏至前一日、劉墉<sup>(67)</sup>

「青原」(朱文方印)、「劉墉之印」(白文方印)

「心輟冰壺」(白文長方印)

古人往矣、其書畫之流傳、誰則親見握管者、千載後、考校  
眞贋、不過就用筆立格推求<sup>(68)</sup>、究以美惡爲定評耳、此幀舊題、  
以爲王右丞筆、且有宋思陵標識、朱竹垞・宋荔裳兩先生跋  
語、若李廷相・黃美之・孫退谷・梁蕉園<sup>(69)</sup>諸家、竝有圖記、  
爲眞爲贋、僕何敢強作解人、卽以贋論、亦必實見此圖、乃  
可落筆、唐摹晉帖、不猶逾于我行我法耶、伏生于秦火之餘、  
抱殘守闕、以口舌代簡編、使危微精一之傳至今如揭、允宜  
推爲說經祖、吾儕呻其佔畢<sup>(70)</sup>、幸竊緒餘、當各摹一圖、懸之

齋壁、用志景仰、况得舊帙、卽不定出右丞、亦屬名筆所託、

其惜應何如耶、推求下落之字、蕉林誤蕉園<sup>(70)</sup>

嘉慶壬申夏五月五日、蘄邱謝寶樹敬識<sup>(71)</sup>

「謝寶樹印」(白文方印)、「珊嶠」(朱文方印)

### 鑑藏印

〔卷尾〕

「翁斌孫印」(白文方印) (翁斌孫<sup>(73)</sup>)

### 注

(1) 王摩詰 王維(七〇一〜七六一または六九九〜七五

九)、摩詰はその字。太原(山西省)の人。官は尙書右  
丞。古くは『宣和畫譜』卷一〇に、その作「寫濟南伏  
生像一」が列せられる。

(2) 長尾甲 「四 五星二十八宿神形圖」注(2) 参照。

(3) □□□□ 文字の左端が僅かに見える。小林太市郎  
は「觀尋索號」かと推測する。

(4) 宋・高宗趙構 一一〇七〜八七。

(5) 梁清標 「四 五星二十八宿神形圖」注(24) 参照。

(6) 孫承澤 一五九二～一六七六。字は耳北・耳伯、號は退谷・北海など。益都(山東省)の人。吏部左侍郎、都察院左都御史に官した。著作の一つに『尙書集解』がある。

(7) 完顏景賢 「四 五星二十八宿神形圖」注(2)(3)参照。

本卷に關して『三虞堂論書畫詩』卷下に「現藏山左陳壽卿後人家、余曾以千金議値、未果者」とあり、景賢に先立ち陳介祺(一八一三～八四)字は壽卿の後人が藏していたことが知られる。下田章平「第二期における完顏景賢の書畫碑帖收藏について」(『金壺集 石田肇教授退休記念金石書學論叢』二〇一三年)参照。

(8) 黃琳 弘治・正徳間、一五～一六世紀初。字は美之、號は休伯、休寧(安徽省)の人。董其昌はその收藏賞鑑を一時の最と稱した。

(9) 李廷相 一四八五～一五四四。字は夢弼、濮州(山東省)の人。官は戸部尙書。古籍・書畫を搜集し、その藏書樓を「雙檜堂」と名付けた。

(10) 「宣和中祕」 宣和は一一一九～二五。

(11) 宋鞏 一六三四～一七一三。字は牧仲、漫堂・西坡・

荔裳・綿津山人などと號した。商丘(河南省)の人。江蘇巡撫、吏部尙書に官した。

(12) 「謝氏珍藏書畫印」 未詳。あるいは卷尾に跋を識す謝寶樹のものか。

(13) 項聖謨 一五九七～一六五八。字は孔彰、易庵はその號。秀水(浙江省嘉興)の人。明末の大收藏家項元汴の孫。

(14) 「紹」「興」 宋・高宗。紹興は一一三一～六一。

(15) 桐江吳哲 吳哲については未詳、吳其貞『書畫記』卷六「宋人維摩說法圖題跋一本」にも「紙墨如新、宋人有李林之・相・張希・鄒柄・東籬・吳哲・吳說」とあることなどから吳說とともに書畫を鑑賞する機會が多かったものと思われる。桐江は浙江の上流、浙江省西北部を流れる。

(16) 錢塘吳說 吳說(生卒年未詳)、字は傳朋、號は練塘、錢塘(浙江省杭州)の人。紹興十四年(一一四四)ころ尙書郎となり、上饒(江西省)太守に任ぜられた。

(17) 紹興癸丑 紹興三年(一一三三)。

(18) これと同文が吳升『大觀錄』卷二に見える。

- (19) 張孝思 萬曆順治間、一七世紀。字は則之、號は  
 懶逸。丹徒（江蘇省鎮江）の人。
- (20) 宋至 一六五五〜一七二五。字は山言、號は方庵・  
 緯蕭散人。商丘（河南省）の人。宋肇の子。
- (21) 宋思陵 高宗。
- (22) 康熙 四部叢刊本（景原刊本）『曝書亭集』、この二  
 字なし。
- (23) 庚戌 康熙九年（一六七〇）。
- (24) 退谷孫先生 孫承澤。注（6）参照。
- (25) 先生之 四部叢刊本「侍郎」に作る。
- (26) 於 四部叢刊本「于」に作る。
- (27) 於 四部叢刊本「于」に作る。
- (28) 張 四部叢刊本「錯」に作る。
- (29) 於 四部叢刊本「于」に作る。
- (30) 歸 四部叢刊本「得歸」に作る。
- (31) 舍人 四部叢刊本「舍人兄」に作る。
- (32) 譚七舍人吉璫舟石 譚吉璫（一六二三〜七九または  
 八〇）、舟石は字、號は筑巖・沽園。嘉興（浙江省）の  
 人。官は山東登州府知府。朱彝尊の表兄で、少時とも  
 に讀書した。
- (33) 李十九秀才良年武會 李良年（一六三五〜一六九四）、  
 武會は字、號は秋錦・芋田嬰。秀水（浙江省嘉興）の人。  
 少くして雋才あり、朱彝尊と「朱李」と併稱された。
- (34) 朱彝尊 一六二九〜一七〇九、字は錫鬯、號は竹垞。  
 秀水（浙江省嘉興）の人。康熙十八年（一六七九）の  
 博學鴻詞に擧げられ、翰林院檢討を授かり南書房に入  
 直、『明史』の纂修に攜わった。
- (35) 於 四部叢刊本、この字なし。
- (36) 棠邨梁相國 梁清標 「四星二十八宿神形圖」注  
 （24）参照。
- (37) 漫堂先生 四部叢刊本「漫堂宋公」に作る。宋肇。  
 注（11）参照。
- (38) 地 四部叢刊本「主」に作る。
- (39) 而三公皆當代正人 四部叢刊本、この八字なし。
- (40) 格天 四部叢刊本「秦會之」に作る。秦檜（一〇九  
 〇〜一一五五）、會之は字。格天閣を築いた。
- (41) 半閒 四部叢刊本「賈師憲」に作る。賈似道（一二  
 三〜一二七五）、師憲は字。半閒堂を建てた。

- (42) 鈴山 四部叢刊本「嚴惟中」に作る。嚴嵩(一四八〇)一五六七)、惟中は字。鈴山に隱居し鈴山堂と號した。だが朱彝孫の言に反して、嚴嵩籍沒時の儲藏品目錄である『天水冰山錄』には「濟南伏生像一卷」と見える。
- (43) 厚 四部叢刊本、この字なし。
- (44) 以下、四部叢刊本は「按中興館閣續錄、維所畫濟南伏生圖、曾歸祕閣儲藏、故宋元以來題跋獨少、宋公定爲眞蹟、知孫梁二公賞鑑略同也」に作る。
- (45) 艸廬 吳澄(一二四九)一三三三)、字は幼清、艸廬はその號。撫州崇仁(江西省)の人。官は國子監・翰林學士、理學家で『書纂言』など多數の著作がある。『吳文正集』卷九一「題伏生授經圖」に「先漢今文古、後晉古文今、若論伏生功、遺像當鑄金」とある。
- (46) 康熙辛巳 康熙四十年(一七〇一)。
- (47) 此王摩詰伏生像 『西坡類稿』卷二八に「跋王摩詰畫濟南伏生像」がある。康熙五十年刻本「詰」字下「所寫濟南」四字あり。
- (48) 後 康熙刻本「南渡後」に作る。
- (49) 乾卦 康熙刻本「乾卦印」に作る。
- (50) 康熙刻本「存」字下「觀後吳傳朋題名、蓋不久歸開府郡王矣」十六字あり、傳朋は吳說の字。
- (51) 李廷相 注(9) 參照。
- (52) 黃琳 注(8) 參照。
- (53) 顧鄰初客座贅語 顧起元(一五六五)一六二八)、鄰初はその字。南直隸江寧(江蘇省南京)の人。國子監祭酒、吏部左侍郎兼翰林院侍讀學士を歴任した。その著『客座贅語』卷八、賞鑑に「黃美之家有王維著色山水一卷、又王維伏生授書圖一卷、又出數軸、皆唐畫也、吳中都元敬看畢、吐舌曰、生平未見」とある。
- (54) 都元敬 都穆(一四五九)一五二五)、玄敬はその字。南直隸吳縣(江蘇省蘇州)の人。禮部郎中に官した。「元」は康熙帝の諱「玄燁」を避けたもの。康熙刻本「元」の缺畫に作る。
- (55) 康熙刻本「也」字下「不知何時取入大内、鼎革時散落人閒」十五字あり。
- (56) 孫退谷 康熙刻本「孫侍郎退谷」に作る。
- (57) 得之 康熙刻本「所得」に作り、その下「劉(鑾)」



五石瓠、孫氏藏畫目首列之」十三字あり。

- (58) 邨 康熙刻本「村」に作り、その下に「先生、今」三字あり。

- (59) 購得、疏 康熙刻本「處見之、疏」に作る。

- (60) 子孫 康熙刻本「將來」に作る。

- (61) 摩詰 康熙刻本「摩詰畫」に作る。

- (62) 人 康熙刻本「人」字下「高出從來畫史之上」八字あり。

- (63) 有 康熙刻本「又」に作る。

- (64) 天王・洛神諸圖 吳道玄「送子天王圖」と顧愷之「洛神賦圖」。前者は大阪市立美術館に、後者は北京故宮博物院などに摹本が傳わる。

- (65) 康熙刻本「也」字下「至畫入神品、有目者、皆見之、無庸贅」十四字あり。

- (66) この二詩ともに『劉文清公遺集』『應制詩集』に見えない。

- (67) 癸酉 乾隆十八年（一七五三）。

- (68) 推求 この下に「之」字を落すと後記あり。

- (69) 蕉園 「蕉林」の誤と後記あり。

- (70) 呻其佔畢 經書の義を曉らず、文字面のみを窺い吟誦すること。『禮記』學記に「今之教者、呻其佔畢、多其訊、言及于數」とあり、注に「佔、視也、簡謂之畢」という。

- (71) 嘉慶壬申 嘉慶十七年（一八一二）。

- (72) 謝寶樹 ? 一七八八〜一八一二?。傳記未詳。

著に『歲寒小草』がある。

- (73) 翁斌孫 一八六〇〜一九二二。字は弢甫・韜甫、號

は笏齋・廉訪・冰楞など。無錫（江蘇省）の人。翁同書の孫。官は直隸提法使。藏書家として知られる。

### 備考

遞傳を辿ると、北宋・徽宗朝の『宣和畫譜』に題名の記載が見え、南宋・高宗のものとされる御題・御璽がある。

明中期では黃琳・李廷相の收藏印が認められ、『天水冰山錄』所録が本卷に當るとすれば嚴崇の藏を経て、鼎革前後に項聖謨・張孝思に歸した。清朝に入り孫承澤・梁清標から宋犖・宋至父子と渡り、この間に朱彝尊が兩跋を識す。乾嘉中には劉墉・謝寶樹の題詩・題識を得て、清末に翁斌孫・陳介祺後人・完顏景賢の所藏となった。そして民國（大正）

期に日本の阿部房次郎が購入したのである。

## 著録

- 『宣和畫譜』卷一〇、『宋中興館閣儲藏圖畫記』、都穆『鐵網珊瑚』卷四、闕名『天水冰山錄』、張丑『清河書畫舫』卷七、汪砢珠『汪氏珊瑚網』卷二三、孫承澤『庚子銷夏記』卷一、朱彝尊『曝書亭集』卷五四、宋犖『西陂類稿』卷二八、劉墉『劉文清公遺集』卷五、完顏景賢『三虞堂書畫目』卷下、『大阪市立美術館藏 中國繪畫』（朝日新聞社、一九七五年）

## 参考文献

- 伊勢專一郎 圖版解説『爽籟館欣賞』（博文堂、一九三〇年）  
瀧拙庵「伏生授經圖に就て」（『國華』五八八、一九三九年）  
「伏生授經圖」解説（『美術研究』一〇〇、一九四〇年）  
小林太市郎『中國繪畫史論攷』（大八洲出版、一九四七年）  
中川憲一 圖版解説『大阪市立美術館・上海博物館藏中國書畫名品圖録』（二玄社、一九九四年）

〔弓野隆之〕

## 六 寒林重汀圖 傳董源筆

重要文化財 黒川古文化研究所

原本五代

絹本墨畫淡彩

一八〇・〇×一一五・六

### 内箱蓋表

董北苑<sup>(1)</sup>寒林重汀圖

内藤虎署檢

「内藤虎印」（朱文長方印）、「湖南」（朱文長方印）

### 内箱蓋裏

明治庚戌<sup>(2)</sup>秋、觀此畫於端忠敏公<sup>(3)</sup>坐上、竊歎觀止、後十餘年、竹添君<sup>(4)</sup>以兼金購之於忠敏後人、既改裝、索余署檢、回思廿年間、忠敏收儲、散落殆盡、此等尤物、流入我邦、爲此慨然有滄桑之感、余檢宣和畫譜<sup>(5)</sup>、有寒林重汀圖、殆乃此畫、北苑畫長于重汀絕岸、此幅水煙濃淡、樹色遠近、恍然置身三柳七澤間、忠敏謂、其品在江山行旅圖上、未爲阿所好也<sup>(6)</sup>、昭和戊辰三月、内藤虎書<sup>(7)</sup>  
「臣虎」（朱文・白文方印）、「寶左龔主」（朱文方印）

## 題記

〔上部詩塘〕

魏府收藏董元畫天下第一<sup>(8)</sup>

董其昌鑑定

「董氏玄宰」(白文重廓方印)

## 跋<sup>(9)</sup>

〔添卷〕

「續學堂」(朱文長方印)

圖畫見聞志云、董源、字叔達、事南唐爲後苑副使、畫史會要云、字北苑、蓋以其官稱之歟、源生於五代、所作畫開有

宋諸大家之先、歷代寶藏珍弁、何啻秦球漢璧、今觀此軸平

巒疊嶂、近水遙村、意淡神閒、筆雄墨厚、乃知沈存中夢溪

筆談所稱、源工秋嵐遠景、多寫江南眞山、不爲奇峭之筆、

米南宮所云、不裝巧趣皆得天眞者、於茲益信、平淡天眞、

所以爲不可及、見聞志稱、其善畫山水、水墨類王維、猶舉

一隅言之耳、董香光標題云、魏府收藏董元畫天下第一、殊

非溢美、按宣和書畫譜、源作元、香光題識本此、此畫向在

江南、流傳有緒、壬午歲獲歸予家、爰跋數語以志翰墨緣、

用告後來、俾知古人眞蹟日希、宜慎加寶重云爾

道光乙酉重九日、洪瑩識<sup>(19)</sup>

「臣瑩私印」(白文方印)

此本歸福山王文敏、後留余家三年、日夕瞻玩、戊戌奉陳臬

秦中之命、始歸之中、更庚子之變、不識此本存亡、去年樸

孫都護來白下、出此見示、乃知歸樸孫、殊爲北苑慶所遭、

益歎文敏物得所託矣、文敏嘗言此本神詣在江南半幅上、盛

伯義祭酒以爲知言、今重觀此本而益信

光緒丁未重九日、溧陽端方題<sup>(29)</sup>

「端方之印」(白文方印)

## 鑑藏印

〔本紙右上〕

「印影不明」(大型の朱文方印)

「宣文閣寶」(朱文方印)

〔本紙右下〕

「右半缺」鑑定眞蹟」(朱文方印)

「右半缺」萬鍾」(朱文方印) (米萬鍾)

「右半缺」祕玩」(白文重廓方印) (米萬鍾)

〔本紙左下〕

〔緝熙殿寶〕<sup>(34)</sup> (朱文方印)

〔廉生得來〕 (白文方印) (王懿榮)

注

- (1) 董北苑 五代(九〇七〜九六〇)・南唐(九三七〜九七五)の畫家・董源(董元)のこと。字は叔達。鍾陵(江蘇省南京、或は江西省進賢)の人。南唐中主・李璟(在位九四三〜九六一)に仕え、北苑使(あるいは後苑副使)を務めたため董北苑とも呼ばれる。山水、牛、虎、龍、道釋人物などを善くし、山水畫は江南の身近な水郷風景を題材として、水墨と着色の雙方があったとされる。一世紀ほど後の北宋(九六〇〜一一二七)後期になって米芾(一〇五一〜一一〇七)、沈括(一〇三一〜九五)らにより再評價され、江南山水畫の祖として、後の文人畫、南宗畫に大きな影響を及ぼした。『圖畫見聞誌』卷三、『宣和畫譜』卷二一、米芾『畫史』、沈括『夢溪筆談』卷一七。
- (2) 明治庚戌 明治四十三年、宣統二年(一九一〇)。  
(3) 端忠敏公 端方(一八六一〜一九一一)の諡。滿州
- (4) 正白旗人。字は午樵、午橋、號は陶齋。清末の政治家、學者、收藏家。『陶齋吉金錄』などがある。
- (5) 宣和畫譜、有寒林重汀圖 『宣和畫譜』卷一一、董元。
- (6) 江山行旅圖 「江山行旅圖」は、明時代より著名であった董源「溪山行旅圖」のことを指す。本來の畫面の半分にあたりと考えられることから「江南半幅」と通稱された。沈周、董其昌の舊藏で、近代には小川簡齋の所藏となった。
- (7) 昭和戊辰 昭和三年、民國十七年(一九二八)。  
(8) 魏府 明建國の功臣で魏國公に封じられた徐達(一

三三二〜八五）を祖とする徐家を指し、當時は十世の徐弘基の代に當たる。

(9) 添卷 もともとは、本紙下部の詩塘に表装されていたが、日本で改装された際、卷子となった。

(10) 圖畫見聞志云 『圖畫見聞志』卷三、董源。

(11) 畫史會要云 『畫史會要』卷二。

(12) 沈存中夢溪筆談所稱 沈括『夢溪筆談』卷一七、書畫。

(13) 米南宮所云 米芾『畫史』。

(14) 見聞志稱 『圖畫見聞志』卷三、董源。

(15) 董香光 董其昌（一五五〜一六三六）のこと。

香光は號。

(16) 按宣和書畫譜 『宣和畫譜』卷一一、董元。

(17) 壬午歲 道光二年（一八二二）。

(18) 道光乙酉 道光五年（一八二五）。

(19) 洪瑩 字は賓華、號は鈴菴。歙縣（安徽省）の人。

嘉慶十四年（一八〇九）の科擧で第一人となり、修撰を授けられた。

(20) 福山王文敏 王懿榮（一八四五〜一九〇〇）のこと。

字は正儒、廉生、蓮生、濂生とも。號は古現村人、養

潛居士。文敏は諡。福山（山東省）の人。甲骨文字の發見者として著名。

(21) 戊戌 光緒二十四年（一八九八）。

(22) 奉陳臬秦中之命 陳臬は、刑法を公布する（『尙書』康誥）、或は司法關係の官職に任命すること。光緒二十四年に端方が陝西按察使に任命されて西安に赴いたことを指す。

(23) 庚子之變 光緒二十六年に起きた義和團事件のこと。

(24) 樸孫都護 完顏景賢。「四五星二十八宿神形圖」注

(23) 参照。

(25) 白下 白下は、南京（江蘇省）の古名。

(26) 江南半幅 注（6）を参照。

(27) 盛伯羲 盛昱（一八五〇〜一八九九）、字は伯羲、伯希、伯熙、號は韻時。滿州鑲黃旗の人。收藏家として知られる。光緒二年の進士。

(28) 光緒丁未 光緒三十三年（一九〇七）。

(29) 端方 注（3）を参照。

(30) 「宣文閣寶」 元後期の殿閣印。

(31) 「右半缺」鑑定眞蹟」 燕文貴「江山樓觀圖」（大阪市立美術館、本書八参照）に押される「郭衛民鑑定

真蹟」と同印の可能性が高いが、郭衛民については未詳である。

(32) 「右半欽」萬鍾 米萬鍾(一五七〇～一六二八)。

上海博物館編『中國書畫家印鑑款識』上(文物出版社、一九八七年)の米萬鍾の項(三二〇頁)にもこの印が収録されており、それによって「米萬鍾印」と分かる。

(33) 「右半欽」祕玩 米萬鍾。前注の『中國書畫家印鑑款識』によって「米氏祕玩」と分かる。

(34) 「緝熙殿寶」 南宋・理宗朝(一二二四～六四)の殿閣印。

#### 備考

「寒林重汀圖」の名は、北宋末の徽宗内府の藏畫目錄である『宣和畫譜』卷一一、董元條にまず現れる。ただし、本圖(以下、黒川本と呼ぶ)には徽宗朝の收藏を示す印章等は無く、描寫内容以外には關連性は知られない。

鑑藏印は、南宋・理宗朝(一二二四～六四)の殿閣印「緝熙殿寶」、元後期の殿閣印「宣文閣寶」の他、明末期の米萬鍾、清末期の王懿榮の印が押されている。また、畫面右端に大型の朱文方印が押されており、いずれかの王朝の殿閣

印の類と思われるが、印影が不鮮明で判讀できない。「鑑定真蹟」は燕文貴「江山樓觀圖」の「郭衛民鑑定真蹟」と同印の可能性がある。表装上部の詩塘には明末の董其昌の「魏府收藏董元畫天下第一、董其昌鑑定」の題記があり、明建國の功臣で魏國公に封ぜられた徐達を祖とする南京の徐家に收藏されたことが分かる。また、もとは圖の下部に表装され現在は別巻となっている清時代の洪瑩と端方の題識が付屬している。端方の後、完顏景賢の收藏を経た。内藤湖南は、明治四十三年(一九一〇)、小川琢治、狩野直喜、富岡謙藏、濱田耕作とともに北京に派遣され、敦煌文書や清内閣舊藏書などの調査を行った。この折に、端方のもとで本圖を目にしている。

日本へは大正の末年に、大阪の美術商・博文堂を通じてもたらされた。歌人・畫家の竹添履信の所藏となり、「寒林重汀圖」の題名もこの時期に與えられている。現在の表装はこの竹添氏所有時に改裝されたもので、内箱には内藤湖南の箱書が記される。その後、昭和十年(一九三五)に、二代・黒川幸七(一八七一～一九三八)の手に渡った。購入時の領收書が残っており、昭和十年四月十六日に八千圓、同年六月六日に一萬圓が博文堂に支拂われている。昭和二

十五年（一九五〇）の黒川古文化研究所設立とともに同所の所蔵となった。昭和四十五年（一九七〇）五月二十五日、重要文化財指定。

※本圖の傳來についての詳細は、参考文献に挙げた拙稿を参照されたい。

## 著録

『宣和畫譜』卷一一、董元、董其昌『畫禪室隨筆』卷二、畫源、張丑『清河書畫舫』巳集、補董源、李佐賢『書畫鑑影』卷一九、李葆恂『海王村所見書畫錄』、同『無益有益齋論畫詩』卷上、端方『壬寅消夏錄』、完顏景賢『三虞堂書畫目』卷下

## 参考文献

大村西崖編『文人畫選』第二輯第二冊（丹青社、一九二二年）

志賀直哉編『座右寶』（座右寶刊行會、一九二六年）

『南宗衣鉢』第五集（博文堂、一九二七年）

『南畫淵源』（博文堂、一九二八年）

米澤嘉圃「寒林重汀圖」解説（『明清繪畫圖録』黒川古文化

研究所、一九五四年。同氏『中國繪畫史研究・山水畫論』

東京大學東洋文化研究所、一九六一年に一部改稿し再録）

竹浪遠「〔館藏品研究〕（傳）董源「寒林重汀圖」の觀察と基礎的考察（上）（下）」（『古文化研究』三・四號、二〇〇四、二〇〇五年）

竹浪遠「傳董源 寒林重汀圖」（『國華』一三二九號、二〇〇六年）

竹浪遠「收藏來歴からみた（傳）董源「寒林重汀圖」の史的意義」（『關西中國書畫コレクションの過去と未來』關西中國書畫コレクション研究會、二〇一二年）

〔竹浪遠〕

七 喬松平遠圖 傳李成筆

澄懷堂美術館

原本北宋

絹本墨畫

二〇五・六×一二六・一

題簽

宋李營邱喬松平遠圖<sup>(1)</sup>

怡邸明善堂藏真本<sup>(2)</sup>

西泉庚辰得于京師海王村<sup>(3)</sup><sup>(4)</sup><sup>(5)</sup>

簠齋審定竝題<sup>(6)</sup>

「簠齋」(朱文長方印)

落款

「畫面左下の樹根内部」

李成<sup>(7)</sup>

鑑藏印

〔本紙右上〕

「怡親王寶」(朱文方印)

(怡親王家)

〔本紙右中〕

「小山心賞」(朱文方印) (用印者未詳)

「淮陰鮑氏收藏」<sup>(8)</sup>(朱文長方印) (用印者未詳)

〔本紙右下〕

「墨林生」<sup>(9)</sup>(白・朱文方印) (項元汴)

「子京父印」(朱文方印) (項元汴)

〔本紙左中〕

「退密」(朱文瓢印) (項元汴)

〔本紙左下〕

「墨林」(朱文連印) (項元汴)

「明善堂覽書畫印記」(白文長方印) (怡親王家)

「項墨林父祕笈之印」(朱文長印) (項元汴)

〔本紙左下邊〕

印の殘痕<sup>(10)</sup>

注

(1) 李營邱 本圖の傳稱筆者の李成(九一九〜九六七)

のこと。字は咸熙。後世には諱をさけ、出身地の青州(山東省)の汎稱の營丘(邱)をもって呼ばれることが多い。唐宗室の末裔とされ、代々儒者の家系であつ



たが、彼自身は亂世の爲仕官の望みは果たせず、山水畫に憂いを紛らわせた。郷里の黃土平原を精緻な水墨技法で描き出し、北宋後期の大家の郭熙が彼を學んだことから、李郭と併稱され後世にも大きな影響を與えた。『聖朝名畫評』卷二、『圖畫見聞誌』卷三、『宣和畫譜』卷一、『澠水燕談錄』卷七、『揮麈前錄』卷三。

- (2) 怡邸明善堂 清・康熙帝の第十三子胤祥(一六六六〜一七三〇)を初代とし、書畫の收藏で知られた怡親王家の書室。怡親王家については、『清史稿』卷一六四、皇子世表、聖祖系、卷二二〇、怡賢親王允祥傳に記述がある。

- (3) 西泉 王石經(一八三三〜一九一八)の字。濰縣(山東省)の人。隸書と篆刻を善くし、同郷の陳介祺(後述)とは師弟的な關係にあった。陳介祺『秦前文字之語』卷一の潘祖蔭に宛てた同治十三年甲戌二月十三日、光緒元年乙亥十一月十五日の書に、王石經の篆刻への言及がある(此の資料については、曾布川寛氏に教示をいただいた)。

- (4) 庚辰 光緒六年(一八八〇)。  
(5) 海王村 北京の骨董・書籍街の琉璃廠のこと。

- (6) 簠齋 清末の考證學者・陳介祺(一八一三〜八四)のこと。字は壽卿、號は簠齋。濰縣(山東省)の人。道光二十五年の進士。古銅器の蒐集家として著名。
- (7) 「李成」落款 墨色が畫に比べて極端に新しく、傳稱を強調するための後世の付加と分かる。

- (8) 「淮陰鮑氏收藏」(朱文長方印) 未詳。「小山心賞」とともに朱肉の鮮やかさから清後期以後とみられる。
- (9) 「墨林生」(白・朱文方印) 明後期の收藏家・項元汴(一五二五〜九〇、字は子京、號は墨林山人)。本圖には項元汴の印が、計五顆押される。これらの印は、上海博物館編『中國書畫家印鑑款識』(文物出版社、一九八七年)などと比較すると、印影が微妙に異なり疑問がもたれる。

- (10) 印の殘痕 改裝により切り詰められた幅約三センチメートルの殘痕がある。

#### 備考

本圖は、項元汴および怡親王家の鑑藏印以外、古い來歴を示す情報は付屬せず、著録類にも該當する記述は知られていない。近代に入ってから、光緒六年(一八八〇)に王石經

が北京の海王村（琉璃廠）で手に入れ（陳介祺題簽）、清末民國初の混亂により日本にもたらされて、澄懷堂・山本悌二郎（一八七〇～一九三七）の所有となった。昭和三年（一九二八）開催の中國繪畫展圖録である『唐宋元明名畫大觀』（大塚巧藝社、一九二九年）に、同氏の所藏として掲載されている。また、山本氏自身、『澄懷堂書畫目錄』卷一（文求堂書店、一九三二年）において、「山水の畫、余二十年來、觸目する所、古今東西、數千の多きを數ふれども、心悸神往し、畫に對して恍然として畫を忘るゝが如きは、惟此の軸あるのみ」と評している。さらに「此の喬松平遠圖、陳氏を出でて吾齋に歸するや、支那畫苑の諸公惋惜已まず、題跋を以て之を送れるもの十數に上れり、今悉く之を録せず、纔に葉氏瀚の一跋を記して評隲に代ふ」として、葉瀚（北京大學・美術學校の教授を務めた）の次の跋を引用している。

右李營邱喬松平遠圖、清怡親王舊藏、後歸濰縣陳篋齋、余竊維、襄陽畫史云、東坡謂世間已無營邱畫、蓋營邱遺蹟、宋代多收入祕府、宣和御府收藏目、記營邱畫、都百五十九、可謂夥頤、故民間不多觀也、然有平遠之題目者、有曉嵐平遠圖二、晴嵐平遠圖三、長山平遠圖二、平遠圖一、平遠窠石圖一、此畫山勢平遠、僅加鈎勒、無多皴擦、

而筆意清潤、煙雲萬態、格法尤蒼勁絕倫、意殆即平遠圖、果得則亦宣和故藏、而爲清親貴所寶視宜也、余又有清廷藏燕文貴秋山蕭寺卷攝影、畫法亦絕類是圖、文貴師營邱、故相似也

杭縣葉瀚謹識

その後、本圖は他の多くの書畫とともに猪熊信行氏（一九〇六～一九一）に引き繼がれた。大戦により一時は研究者の間でも所在が不明となっていたが、戦後十數年を経て、米澤嘉圃氏によつて見出され、以後、李成の作風を伝える最優の一作として評價されている。

#### 参考文献

- 原田謹次郎編『大東美術』第一輯第六冊（大東美術振興會、一九二六年）
- 『唐宋元明名畫大觀』（大塚巧藝社、一九二九年）
- 山本悌二郎『澄懷堂書畫目錄』卷一（文求堂書店、一九三二年）
- 原田謹次郎編『支那名畫寶鑑』（大塚巧藝社、一九三六年）
- 原田謹次郎『日本現在支那名畫目錄』（文求堂書店、一九三八）、一二頁

米澤嘉圃、本圖解説（同氏等編『東洋美術 一 繪畫』）

朝日新聞社、一九六七年）

曾布川寛、本圖解説（『中國の美術 三 繪畫』淡交社、一

九八二年）

小川裕充「六 傳李成 喬松平遠圖」（『臥遊 中國山水畫

その世界』中央公論美術出版、二〇〇八年）

塚本麿充、本圖解説（『崇高なる山水 中國・朝鮮、李郭系

山水畫の系譜』大和文華館、二〇〇八年）

竹浪遠（傳）李成「喬松平遠圖」（澄懷堂美術館）につい

て 唐代樹石畫との關係を中心に 『國華』一三六九號、

二〇〇九年）

竹浪遠「北宋における李成の評価とその文人畫家像形成に

ついて 子孫・鑑賞者・李郭系畫家との關わりから」『古

文化研究』九號、二〇一〇年）

〔竹浪遠〕

## 八 江山樓觀圖 燕文貴筆

大阪市立美術館

北宋

紙本墨畫淡彩

三二・〇×六一・〇

### 内箱蓋表

宋燕文貴山水神品

長尾甲署檢

「雨山」（朱文方印）

### 内箱蓋裏

燕文貴、字叔高<sup>(3)</sup>、吳興人、山水細緻深潤、舟如葉、人如麥、

帆檣枯槁、曲盡情狀、世稱燕家景致、米南宮云、叔高之畫

不減於晉唐、恨其遺墨絕少耳、南宮時且然、況於後八百歲

乎、此卷著錄董思翁容臺集、舊有董跋、惜已佚去、其流傳

轉委詳見傅青主楊且亭以下諸跋、引首風雨玄縱四大篆、亦

青主所書首尾完好、尤可寶貴、黃山谷云、風雨圖本出於李

成、超軼不可及也、近世郭熙時得一筆、亦自難得、山谷非

輕評人者、且與叔高相去不遠、其語必有本、幾似爲此卷而

言、名畫評謂、不師古人、恐不足信也  
大正丙寅三月觀于爽籟館因識、長尾甲  
「甲印」(白文方印)、「雨山」(朱文方印)

### 題簽

燕待詔山水無上神品、人竟廬寶藏<sup>(19)</sup><sup>(20)</sup>

### 題記

風雨玄縱  
湍題丹厓下<sup>(21)</sup>

### 鑑藏印

〔題記右下〕  
「三虞堂鑑藏印」(白文方印) (完顏景賢)<sup>(22)</sup>  
〔題記左下〕  
「芝陔審定」(朱文方印) (李在銑)<sup>(23)</sup>

### 前隔水題

燕文貴江山樓觀圖  
笙洲藏、雨山署

「長尾甲印」(白文方印)

### 鑑藏印

〔前隔水左下〕  
「完顏景賢字享父號樸孫一字任齋別號小如龔印」(白文方印) (完顏景賢)  
「人境廬」(白文長方印) (李在銑)

### 款記

待詔筠州筠□縣主簿燕文貴□<sup>(24)</sup>

### 鑑藏印

〔本紙首部〕  
「(印影不明)」(方印カ)  
「景長樂印」(白文方印) (完顏景賢)  
「芝陔審定真蹟」(朱文長方印) (李在銑)  
「任齋銘心之品」(朱文方印) (完顏景賢)  
「郭氏衛民家藏書畫印」(朱文長方印) (用印者未詳)  
「博平侯章」(朱文方印) (用印者未詳)<sup>(25)</sup>  
〔本紙紙繼部〕

「(印影不明)」「(長方印)」

〔本紙尾部〕

「崇蘭館」(朱文長方印) (趙子畫)

「□州關觀察使印」(朱文方印) (趙子畫)

「景賢審定」(朱文方印) (完顏景賢)

「郭衛民鑑定真迹」(朱文方印) (用印者未詳)

### 傅山跋

此偏關萬金吾家藏、而轉之太原潘氏、董太史曾向潘借致京

邸、臨七八日、今董太史容臺雜著、載之甚詳、所云燕文貴

畫、借自潘氏、云云、即此卷也、舊有董太史親題一段于後、

先帝癸未、絳孝廉韓雨公來太原潘氏見之、韓既精鑑賞、而

一生書畫之契、又莫逆於董、見而愛之、遂重構于潘氏、收

之行笥中、以爲寶笥寄之省城、遭亂散失、誰何俗人、見有

董字、遂割去、獨遺前畫、紙按搓、無人顧、道士王清虛者

過市、認得是雨公笥中物、易而度之東甕城靖以待價、祁戴

仲過靖見之、訝其筆奇古、清虛告其來歷、戴中徵諸貧道、

貧道曰、然、戴仲遂以雨公之愛、愛之重裝、寓目此卷、既

不得于韓、而終能遇戴、可謂良會、戴仲好古畫法書器皿、

見之若渴、不惜割劃田舍而有之、今之奇人也、余曾見雨公

一舊紫端研贈、用之有年矣、亂後亦歸于王清虛、堅潤無比、

戴仲即用白鏹百十錢、易歸文房、可謂慶好、如此高韻、豈

復一世

僑黃山

「傅山之印」(白文方印)

### 鑑藏印

〔傅山跋前脚部〕

「小如庵祕笈」(朱文方印) (完顏景賢)

「芝陔審定」(朱文方印) (李在銑)

### 楊思聖跋

元燕文貴畫一卷、晉孝廉韓雨公藏物、其始末傳青主記之詳

矣、戴楓仲構而遺余、余時以請告臥病清化、相從者、爲吾

友殷伯巖、每一披閱、如置身千岩萬壑中、風雨瀟瀟、木葉

盡流、兩人欣然意得也、伯巖高情遠韻、睥睨一世、顧獨暱

予、而親就之、千里追隨、晨夕燈火、因歎自通籍以來、宦

跡幾半天下、憂患迫心、沉疴在體、未得一日安閒、今喜歸

計可期、太行廣羊之閒、有別業在焉、倘邀造物之幸、未疾

獲瘳、便當攜手入山、讀書彈琴、侶煙霞而友麋鹿、誓不復

出貽斯圖他年之誚也、白石清泉、實聞此語

且亭主人楊思聖題

「且亭主人」(三白一朱方印)、「雪樵書畫」(白文方印)

### 鑑藏印

〔楊思聖跋中〕

「子晉」(白文方印) (李在銑)

「景行維賢」(白文方印) (完顏景賢)

### 殷岳跋

甲申寇訐、余與猶龍<sup>(41)</sup>晁盟<sup>(42)</sup>、暨家弟仲泓<sup>(43)</sup>、避亂廣羊山巔、俯煙四望、相對歔吁、無毳羽可拯時、水火窮谷、苟生以觀世變、吾三四人相好、各自重矜留此身、將以有爲也、尋改玉步、分飛燕羽、或出處異致、或生死殊塗、然而蓑笠之盟、風雨不磨、歷今廿餘載、壬寅秋杪<sup>(44)</sup>、猶龍以蜀籜畢觀、叱馭西發、顧我巢林、晁盟亦來相別、謂余曰、猶龍容色清癯、單車遠征、得無可憂、吾甫襄大事、草土之餘、勢不能出、追隨左右、非子而誰、予策蹇屬車後、遠遊之興正復不淺、及丹水<sup>(45)</sup>、而猶龍感疴、請告驛舍中、斟酌藥餌、荏冉逼歲、頗忘逆旅、但行筇無書畫可觀、每言其家藏、津津不倦、戴

楓仲忽以此卷遠寄、展視之、古人筆墨之妙、決皆烟嵐、若

滅若沒、恍置身深谷幽澗中、風雨滿樓、寂莫自喜、燕公去

今三百餘年、生氣可挹、技也進乎道矣、不可以蹟求矣、傳

青主跋其離合聚散之故、兵燹後、玉石炎熇、是卷之全、以

人乎天也、猶龍歸與之志既決、得是卷、若爲之勸駕深山大

澤、置諸座右、玄賞古人、竝堪盟誓、楓仲一時逸士、青主

曠世奇偉人、予與晁盟、亦伏處蕭艾閒、猶龍身在軒冕中、

所與遊者、皆閑曠輩、所安在是、信乎、猶龍其山之人矣、

子弟仲泓、早殉國難、傳云、天下無道、聖人生焉、功名不

顯於天下後世、丈夫之恥、吾儕香山白社之約<sup>(46)</sup>、仰溯前賢、

可謂不孤、仲泓獨不得把是卷、與於斯盟、爲可惜矣

癸卯二月九日、鷄澤殷岳書<sup>(47)</sup>

「殷岡之印」(朱文方印)

### 鑑藏印

〔殷岳跋後〕

「欽齋」(朱文方印) (用印者未詳)

「猗園珍藏」(朱文方印) (用印者未詳)

「金章世系景行維賢」(白文長方印) (完顏景賢)

「涿鹿李氏珍藏」(朱文方印) (李在銑)

## 李在銑跋

宋燕文貴山水、紙本橫卷、蒼渾古秀、全圖寫風雨勢、聽之有聲、屋宇極工而不俗、人物絕小而有神、昔人題所繪船舶渡海圖云、舟如葉人如麥、而帆檣樺櫓、指呼奮勇、盡得態度、<sup>(48)</sup>以視此畫、境雖不同、筆意則宛然如一、款署待詔下一字不可辨、州筠下一字不可辨、縣主簿燕文貴下一字不可辨、攷諸家著錄、但稱其隸軍中入圖畫院、而不言有他職、得此署款、可補著錄所未備、更可定為真跡無疑、是卷論畫論墨論紙、確係北宋物、非南宋以後所可比倫、前有傅僑黃題風雨玄縱四篆字、後跋記其始末甚詳、惟萬金吾是何人、俟攷、曾見王煙客自題畫內、亦敘有其人、而究不知何名、楊且亭方伯、殷伯岩逸士兩跋均佳、楊誤宋為元、殷謂三百年前物、乃沿楊而誤、均偶失檢、不足為累、惟董跋失去、是乃憾事、卷藏一富家、欲售之以易馬、余一見嘆為奇絕、急為購得、燕畫真蹟極少、世所傳、船舶渡海外、有七夕夜市、秋山蕭寺、溪山行旅、秋江泛望諸圖、<sup>(49)</sup>皆不獲見、存否已不可知、得此卷、置之人境廬中、可為所藏宋畫第一、既以自快、并為此卷快也

前有郭氏衛民暨<sup>(50)</sup>平侯印、不知其人、左上角有崇蘭館印又

大方印、字不可辨、又接縫處微有印痕、<sup>(51)</sup>均不能辨矣、方印

內第二字似州字、末行似觀察使印四字

光緒癸巳冬至前十日、七十六老人李在銑識、以手病、倩陳

麟炳寅<sup>(53)</sup>生代書

「李在銑印」(白文方印)、「芝陔」(朱文方印)、「芝陔審定」

(朱文方印)

當時以手病、倩陳君代書、邇來手覺微愈、暇日仍擬自書以

傳信

辛丑初伏日、芝陔再識<sup>(54)</sup>

「子晉」(白文方印)

## 鑑藏印

「李在銑跋前」

「樸孫庚子以後所得」<sup>(55)</sup> (朱文長方印) (完顏景賢)

## 翁同龢跋

燕文貴畫、世鈔真者、此卷為吾友芝陔李君所藏、芝陔歸隱十年、其蕭散與卷中題字之楊猶龍相近、宜其獲此名蹟於長安塵中也、曩嘗見董思翁畫冊中一幅、仿李營邱、題曰、假得偏頭關萬金吾邦孚家藏李成平遠小絹幅、臨之云云、<sup>(56)</sup>然則

青主跋中所謂萬金吾者、即其人矣、因芝陔下詢、偶及之、至此畫精勁飛動、爲海內第一無疑也  
光緒癸巳小除夕、常熟翁同龢<sup>(57)</sup>獲觀、因記<sup>(59)</sup>

「翁同龢印」(白文方印)

### 孫毓汶跋

「御賜岳峙淵淳」(朱文長方印)

一絲一髮、妙筆豪芒、而廣川喬岳、驚風驟雨、自然奔赴腕下、運思極細、布景極雄、傳神極靜、此畫禪中、一爲無量、無量爲一之絕詣、彼前後案圖、索驥遺兒、取神兩家、對此皆廢然矣、船舶圖爲待詔劇迹、不可見、然如畫史所紀、彼圖之景象神采、直不啻全爲此圖作贊、信知燕家景致、固有不二法門、而此卷爲待詔真迹、更無疑矣、芝陔三兄、妙揀宋元名跡、祕藏中定以此爲稱首、特附記數語、以志眼福  
光緒丁酉六月上澣、濟寧孫毓汶<sup>(61)</sup>題記<sup>(62)</sup>

「遲盦眼福」(白文方印)

### 完顏景賢跋

燕家景致尙傳流、風雨溪山滿幅秋、董氏容臺別集收、借臨<sup>(63)</sup>曾有親題不、韓霖精鑑太原遊、潘遂見之重值留、散失惟因

省內郵、清虛識物待沽求、田園割劃古爲酬、奇土國初已罕傳、戴得斯圖誰與謀、傳青主特跋來由、隱歸勸駕贈楊侯、人竟廬中愛李叟、著錄書當補未周、結銜主簿記筠州、叔高遺蹟少、米論悠悠、元陳植<sup>(64)</sup>云、燕文貴、字叔高、米南宮嘗謂、叔高畫不減晉唐、恨其遺世者絕少耳<sup>(65)</sup>  
庚戌初冬、米論四希書畫集主人賦<sup>(66)</sup><sup>(67)</sup>

「完顏景賢精鑑」(朱文方印)、「米論四希書畫集」(朱文長方印)

考、卷尾大方官印、是秀州管觀察使印、當係崇蘭館主人趙子畫<sup>(68)</sup>在紹興初出知時所加、益以見此蹟之精當、子畫、號叔問、江貫<sup>(69)</sup>道曾爲其作崇蘭館圖者、亦宋時賞鑑家也<sup>(70)</sup>  
辛亥暮春之初、景賢快記

「景」「賢」(朱文連印)

### 注

(1) 燕文貴 北宋の畫家。吳興(浙江省湖州市)の人。

郭若虛『圖畫見聞誌』卷四等では燕貴と言う。「燕貴、本隸尺籍、工畫山水、不專師法、自立一家規範、大中祥符初、建玉清昭應宮、貴預役焉、偶暇日畫山水一幅、人有告董役劉都知者、因奏補圖畫院祇候、實精品也、



呂文靖宅廳後屏風、乃貴所畫、亦有圖軸傳於世」(『畫史叢書』所收本)。

(2) 長尾甲 「四五星二十八宿神形圖」注(2) 参照。

(3) 叔高 燕文貴の字。吳升『大觀錄』卷一三に「燕文貴青溪釣翁圖卷」の跋として「右燕叔高畫青溪釣翁圖眞蹟、叔高、諱文貴、吳興人、善畫山水、師顧陸輩、清潤高古、其人物師郝河東、尤善畫舟船盤車、大得晉唐標格、宋仁宗深愛之、畫史所不能及也、米南宮嘗謂、叔高之畫、不減於晉唐、恨其遺世者絕少耳、宜其方駕顧陸也、吳郡陳植」(『續修四庫全書』所收民國九年武進李氏聖譯慶鉛印本影印本)とある。

(4) 山水細緻深潤、曲盡情狀 劉道醇『聖朝名畫評』卷一・人物門・能品下に、「富商高氏家、有文貴畫船舶渡海像一本、大不盈尺、舟如葉、人如麥、而檣帆棹櫓、指呼奮踴、盡得情狀、至于風波浩蕩、島嶼相望、蛟蜃雜出、咫尺千里、何其妙」(『畫品叢書』所收本)とある。

(5) 世稱燕家景致 劉道醇『聖朝名畫評』卷二・山水林木門・妙品に「燕文貴、尤精山水、凡所命意、不師古人、自成一派、而景物萬變、如眞臨焉、畫流至今稱曰、

燕家景致、無能及之者」とある。

(6) 米南宮 米芾(一〇五一〜一一〇七)、字元章、號鹿門居士・襄陽漫士、また官によつて南宮と呼ぶ。襄陽(湖北省)の人。

(7) 米南宮云「恨其遺墨絕少耳」注(3) 参照。

(8) 董思翁 董其昌(一五五五〜一六三六)、字玄宰、號思白・香光、華亭(上海市)の人。

(9) 容臺集 董其昌『容臺別集』卷六・題跋・畫旨「宋元名畫、余所藏各家甚備、惟燕文貴小景、未見耳、昨年於潘侍御翔公邸舍、見溪山風雨圖、行筆閎秀在惠崇巨然之間、借觀旬日寫此圖以擬之」(『明代藝術家集彙』所收明末葉有聲閩南刊本景印本)。同文が、青浮山人(許山)編『董華亭書畫錄』に載る、「倣十六家巨冊」(一六二五年)にあることから、董が燕文貴畫を見たのは、天啓四年(一六二四)頃と推測できる。董は天啓四年四月に禮部右侍郎、秋に協理詹事府事となり、左侍郎に轉じた。同五年(一六二五)には南京禮部尙書となるが、翌年告歸する。

(10) 傅青主 傅山(一六〇五〜九〇)、字青竹・青主・僑山・僑黃・丹崖翁など。太原(山西省)の人。

(11) 楊且亭 楊思聖(一六二一〜六三二)、字猶龍、號雪樵・

且亭、鉅鹿(河北省)の人。官は四川左布政使に至る。

明清交替期、北京近郊の西山(太行山脈の内)に亂を

避け、同山廣羊山頂に草庵を營んだ申涵光や殷岳・殷

淵兄弟と患難の交を結んだ。

(12) 黃山谷 黃庭堅(一〇四五〜一一〇五)。字魯直、號

山谷道人など。分寧(江西省)の人。

(13) 李成 「七 喬松平遠圖」注(1) 参照。

(14) 郭熙 北宋の畫家。熙寧(一〇六八〜一〇七七)・元

豐(一〇七八〜一〇八五)頃活躍。溫縣(河南省)の  
人。

(15) 風雨圖本出於李成も亦自難得 黃庭堅『山谷集』卷

二七「題燕文貴山水」全文の引用。

(16) 名畫評曰、不師古人 注(5) 参照。

(17) 大正丙寅 大正十五年(一九二六)。

(18) 爽籟館 「四 五星二十八宿神形圖」注(18)(19)

参照。

(19) 燕待詔 燕文貴。前掲注(1)の『圖畫見聞誌』に

よれば、燕文貴は圖畫院祇候であるが、本圖の款記に  
は「待詔」とある。正史編纂の意識が強い『圖畫見聞

志』では燕文貴の出自の低さから、その位階が下級に

止められた可能性が指摘されている。曾布川寛「五代

北宋初期山水畫の一考察」(『東方學報』四九、一九七

七年) 参照。

(20) 人竟廬 李在銑(一八一八〜?)、字芝陔・子晉、

室名人竟廬。涿鹿(河北省)の人。崇彝『道咸以來朝

野雜記』(北京古籍出版社、一九八二年)に、李恩慶・

李佐賢・李東と共に、同治年間(一八六二〜七四)の

北京の著名な收藏家「四李」の一人として紹介される。

李在銑が本卷を收藏していたことは、後出の翁同龢『翁  
文恭公日記』の記述(注(59) 参照)と李葆恂『無益

有益齋論畫詩』卷上に確認できる。「曾看紙本燕文貴、

水墨樓臺錦不如、怪底眞山加歎異、銘心尤在結銜書、

燕文貴山水長卷、紙本純用水墨、而樓臺船艦、界畫分

明、山川樹石、氣勢雄奇、自非宋人不辨、畫尾楷書某

官某畫、古拙如北魏人書、尤可愛玩、後有傅他山徵君

爲楊猶龍作跋、書法亦奇、光緒甲午(一八九四)見於

廠肆、通州李芝陔丈以百金購之、丈歿後所藏盡散、不

知歸誰氏矣」(『懷幽雜俎』所收宣統元年南陵徐氏刊本)。

(21) 湍題丹厓下 湍丹厓下題。丹厓は傅山の號。注(10)

参照。

(22) 完顔景賢 「四 五星二十八宿神形圖」注(23) 参照。

(23) 李在銑 注(20) 参照

(24) 筠州筠 縣 筠州は現在の四川省筠連縣。その治下には、筠山縣があるが、「縣」字の上は不明。注(19)

曾布川寛「五代北宋初期山水畫の一考察」参照。

(25) 「博平侯章」 後の李在銑跋では「章」を「印」と読む。

(26) 「崇蘭館」 後の完顔景賢跋で、宋の趙子畫(一〇八九〜一一四二)の印と言う。趙子畫は字叔問、紹興五年(一一三五)から十二年(一一四二)まで衢州(浙江省)の崇蘭館に寓居した。夏文彦『圖繪寶鑑』卷四に江參筆「崇蘭館圖」が載る。「江參、字貫道、江南人、(略)趙叔問、居三衢、治園築館、取楚詞之言、名之曰崇蘭、嘗與陳簡齋(陳與義)、程致道(程俱)從容其中、命貫道爲之圖、及令畫史各繪像其上、乃賦詩焉」(『畫史叢書』所收本)。

(27) 「□州關觀察使印」 後の完顔景賢跋では、「秀州管觀察使印」と読み、「崇蘭館印」とともに、趙子畫が紹

興四年(一一三四)秀州知州となったときの印とする。

曾布川寛氏は、秀州觀察使は衢州寓居後の閑職ではないかと推測する。注(19) 曾布川寛「五代北宋初期山水畫の一考察」。

(28) 「郭衛民鑑定眞迹」 「六 寒林重汀圖」注(31) 参照。「郭氏衛民家藏書畫印」と同一の用印者。

(29) 偏關 山西省偏關縣。

(30) 萬金吾 萬邦孚。字汝永、號瑞巖。鄞縣(浙江省)の人。世職を嗣いで指揮となり、左軍都督府僉事に至る。天啓年間(一六二一〜二七)没。The Century of Tung Chi-chang, 1555-1939 (Kansas City, Mo.:

Nelson-Atkins Museum of Art, 1962) 参照。

(31) 太原潘氏 潘雲翼(一六一三年進士)太原(山西省)の人。注(9)および注(30) The Century of Tung Chi-chang, 1555-1939 参照。

(32) 董太史 董其昌。注(8) 参照。

(33) 燕文貴畫云云 注(9) 参照。

(34) 癸未 崇禎十五年(一六四三)。

(35) 絳孝廉韓雨公 韓霖(一六〇二〜四四)、字雨公、號

寓菴、絳州（山西省）の人。

(36) 王清虛 不詳。

(37) 祁戴仲 戴廷拭（一六一八〜九一）、字楓仲、號符公・

維吉、祁縣（山西省）の人。

(38) 中 「仲」の誤記か。

(39) 殷伯巖 殷岳（一六〇三〜七〇）、字宗山・伯巖、鷄

澤縣（河北省）の人。『清史稿』卷四八四に傳あり。注

(11) 參照。

(40) 太行廣羊 太行山脈の支山の一。注(11) 參照。

(41) 甲申 崇禎十七年（一六四四）。

(42) 覺盟 申涵光（一六一九〜七七）、字孚孟・和孟、號

覺盟、永年縣（河北省）の人。『清史稿』卷四八四に傳

あり。注(11) 參照。

(43) 仲泓 殷淵、字仲弘、殷岳弟。抗清運動に身を投じ

る中で横死する。『明史』卷二九五に傳あり。注(11)

參照。

(44) 壬寅 康熙元年（一六六二）。

(45) 丹水 河南省西南境を流れる河。

(46) 香山白社之約 香山は河南省洛陽縣にある山、白居易

易（七七二〜八四六）の隱居地。白居易の雅會として

は「洛陽九老會」が著名。

(47) 癸卯 康熙二年（一六六三）。

(48) 舟如葉人如麥、盡得態度 注(4) 參照。

(49) 有七夕夜市、秋江泛望諸圖 「七夕夜市圖」は劉道

醇『聖朝名畫評』卷一に、「秋山蕭寺圖」は張丑『清河

書畫舫』卷七に、「溪山行旅圖」は高士奇『江村銷夏錄』

卷二に、「秋江泛望圖」は陶樑『紅豆樹館書畫記』卷八

に著録される。

(50) 「暨」と「平」の間は一字空き。

(51) 接縫處微有印痕 本紙首部「景長樂印」の上と紙繼

部にそれぞれ印影不明の鑑藏印があるが、そのいずれ

かを指すか。

(52) 光緒癸巳 光緒十九年（一八九三）。

(53) 陳麟炳寅生 不詳。

(54) 辛丑 光緒二十七年（一九〇一）。

(55) 「樸孫庚子以後所得」「庚子」は光緒二十六年（一

九〇〇）。

(56) 偏頭關、臨之云云 董其昌『容臺別集』卷六・題跋・

畫旨に「李成畫、偏頭關在萬金吾邦孚家、余在長安借

臨、今倣其意爲此」とある。また、董其昌筆「嚴居高

士圖」(「倣古山水圖冊」内、一六二四年、ネルソン・アトキンス美術館藏)は、自跋によれば、「偏頭關萬金吾邦孚家藏李營丘平遠小絹幅」を模倣したものである。

(57) 光緒癸巳 光緒十九年(一八九三)。

(58) 翁同龢 一八三〇〜一九〇四、字叔平・聲甫(一作笙甫)、號笮齋・韻齋、自署松禪、晚號瓶生、又署瓶廬・瓶齋居士。常熟(江蘇省蘇州市)の人。咸豐六年(一八六五)の狀元。官は協辦大學士、戸部尙書、參機務に至る。著『瓶庵詩稿』『翁文恭公日記』など。『清史稿』卷四三六に傳がある。

(59) この跋に關しては、翁同龢『翁文恭公日記』癸巳十二月廿九日に「午後、題楊忠烈公書札卷、燕文貴畫卷、皆同年李芝陔(在銑)所藏也」(『續修四庫全書』所收涵芬樓用草稿本影印本)とある。

(60) 舶船圖 劉道醇『聖朝名畫評』卷一所載。注(4)参照。

(61) 光緒丁酉 光緒二十三年(一八九七)。

(62) 孫毓汶 一八三三〜九九。字萊山、號遲齋、濟寧(山東省)の人。咸豐六年(一八五六)の傍眼。官は軍機大臣兵部尙書に至る。『清史稿』卷四三六に傳がある。

(63) 董氏容臺別集 注(9)参照。

(64) 陳植 一二九三〜一三六二。字叔方、號慎獨癡叟、吳郡(江蘇省蘇州市)の人。

(65) 燕文貴(恨其遺世者絕少耳) 注(3)参照。

(66) 庚戌 宣統二年(一九一〇)。

(67) 米論四希書畫巢主人 完顏景賢。「四五星二十八宿神形圖」注(23)参照。

(68) 趙子畫 「畫」の上の「畫」字に傍點を附して訂正してある。注(26)参照。

(69) 江貫道 江參。北宋末・南宋初期の畫家。字貫道、衢州(浙江省)の人。注(26)参照。

(70) 辛亥 宣統三年(一九一一)。

#### 備考

本圖の傳來を示す資料の中で最も古いものは、宋の趙子畫(一〇八九〜一一四二)のものとしてされる鑑藏印である。以降、南宋から明までの所有者は不明だが、傅山(一六〇五〜九〇)の跋中で、明末に萬金吾から潘雲卿の手に渡った本圖を、崇禎十五年(一六四三)、韓霖(一六〇二〜四四)が譲り受けたことが述べられる。明清鼎革の混亂の中で行方がわからなく

なっていたが、その後、王清虚なる道士が見出し、戴廷拭（一六一八〜九一）の藏に歸した。傅山が見たのもこの時である。さらに、潘雲卿所藏時の天啓四年（一六二四）頃に、董其昌（一五五五〜一六三六）が借り受けて臨模し、跋を書いてしたが、王清虚が入手した時には董跋は失われていたと言う。董其昌が潘雲卿所藏の燕文貴畫を臨模したことは『容臺別集』にも載っている。

また、楊思聖（一六二一〜六三）と殷岳（一六〇三〜七〇）跋によれば、康熙二年（一六六三）二月、戴廷拭が旅先で病に臥した楊思聖に本圖を贈り、同行していた殷岳もこの時に共に跋を書いたと言う。

楊思聖以後の所有者は不明だが、清末に李在銑（一八一八〜？）が北京で手に入れた時には、「郭衛民」および「博平侯」なる人物の鑑藏印が捺されていたと言う。李在銑は光緒十九年（一八九三）と二十七年（一九〇一）の二度にわたって跋を記し、その間に翁同龢（一八三〇〜一九〇四、一八九三年）、李葆恂（一八九四年）、孫毓汶（一八三三〜九九、一八九七年）が本圖を見て文章を残している。

宣統二年（一九一〇）年以前には完顏景賢（一八七五〜一九三一）のコレクションに入り、同氏所藏品として民國六年

（一九一七）の京師書畫展覽會に出品されたが、後に阿部房次郎（一八六八〜一九三七）の手に渡った。大正十五年（一九二六）三月、長尾甲（一八六四〜一九四二）が箱書等を書いてる。

本圖は、阿部氏收藏後に「江山樓觀圖」と呼稱されるようになって（『爽籟館欣賞』、長尾甲題）、現在に至る。畫卷に題が記されていないため、それ以前は、單に山水畫卷、あるいは董其昌所縁の燕文貴畫の名前から「溪山風雨圖」とされた（『京師書畫展覽會出品總目錄』）。

## 著錄

李葆恂『無益有益齋論畫詩』卷上  
佚名編『京師書畫展覽會出品總目錄』  
大阪市立美術館編『大阪市立美術館藏中國繪畫』（朝日新聞社、一九七五年）

## 参考文献

伊勢專一郎 圖版解説（『爽籟館欣賞』博文堂、一九三〇年）  
嶋田英誠「燕文貴の傳稱作品と、その北宋山水畫史上に占める位置についての一試論」（『美術史』二六、一九七六年）

曾布川寬「五代北宋初期山水畫の一考察 荆浩・關仝・郭

忠恕・燕文貴」(『東方學報』四九、一九七七年)

鈴木敬『中國絵畫史 上』(吉川弘文館、一九八一年)

〔西尾歩・植松瑞希〕

### 九 秋山蕭寺圖 傳許道寧筆

重要文化財 藤井齊成會有鄰館

北宋

絹本墨畫

三八・二×一四八・二

#### 箱蓋表

許道寧<sup>(1)</sup>林野遠水卷

#### 箱蓋裏

許道寧畫、學李成山水林木、初尙矜重、晚以筆墨簡快爲長、

峭拔硬勁、別成一家體、聖朝名畫評云、道寧所長者三、一<sup>(2)</sup>

林木、二平遠、三野水、皆造其妙、此卷備有所長、卽無款

識、斷非它人所能、定爲道寧真蹟、無復可疑

癸亥春仲<sup>(3)</sup>、長尾甲識

「長尾甲印」(白文方印)

#### 題簽

〔外題〕

宋許道寧秋山蕭寺圖

〔前綾貼付〕

許道寧秋山蕭寺

康熙甲寅秋日棠村重裝<sup>(4)</sup>

## 跋

「隨園」(白文長方印)

北宋許道寧秋山蕭寺真跡、真定梁相國所藏、吾友沈凡民獲<sup>(5)</sup>

自嘉禾曹氏、蓋又秋岳先生家物也、按圖畫見聞志稱道寧畫<sup>(6)</sup>

法、峰巒峭拔、林木勁硬、別成一體、故張文懿相國贈詩、<sup>(7)</sup>

有李成謝世范寬死、唯有長安許道寧之句、此卷筆意簡遠、<sup>(8)</sup>

有荒寒歷落之趣、信足繼美營丘、肇開馬夏、一時矜重、百<sup>(9)</sup>

世颺流、爲足尙也、余見道寧畫最少、往於葉杜若處見一卷、<sup>(10)</sup>

及此凡兩見而已、然已足爲道寧雙璧、可謂至幸

琅邪王澍書後<sup>(11)</sup>

「澍」(白文方印)、「天官大夫」(白文方印)

此許道寧卷、余藏之二十餘年、每風雨晦明、出此展玩、以

破岑寂、淮陰程君荔江、有嗜古之癖、余割愛贈之、唐文皇<sup>(12)</sup>

論右軍書云、烟霏霧結、勢欲斷而還連、此卷足以當之、非<sup>(13)</sup>

馬夏輩剩水殘山所能彷彿也<sup>(14)</sup>

辛亥重九後六日、補蘿散人沈謙書<sup>(15)</sup>

「沈郎」(朱文方印)、「沈鳳」(白文重廓方印)

劉道醇評許道寧畫、命意狂逸、頗有氣燄、得李成之氣、郭<sup>(16)</sup>

若虛云、老年以筆墨簡快爲己任、故峰巒峭拔、林木勁硬、<sup>(17)</sup>

別成一家體、余所見道寧畫二本、其一江山積雪圖軸、出宣<sup>(18)</sup>

和畫譜、有政和甲午御題、今歸小川氏尙簡齋、脫化楊昇、<sup>(19)</sup>

去肉存骨、勁氣獨橫、其一則此卷、梁蕉林題曰、秋山蕭寺、<sup>(20)</sup>

豈卽宣和譜所錄山觀蕭寺圖歟、布景曠遠、林木荒寒、善寫<sup>(21)</sup>

河朔氣象、宜其光丞中立以後著名一時矣、今歸藤井氏靄靄<sup>(22)</sup>

莊、夫北宋名畫於今獲之、珍比球璧、矧此劇迹世所罕觀、<sup>(23)</sup>

可不寶重諸

癸亥六月廿七日、內藤虎、<sup>(24)</sup>

「藤虎長壽」(白文方印)、「寶馬齋」(白文方印)

此卷有黔寧王子孫永保之印、按明功臣沐英、追封黔寧王、<sup>(25)</sup>

子孫世襲公侯、此卷蓋其家故物、清初以來復經梁蕉林、方<sup>(26)</sup>

恪敏諸公藏弄、皆有印記、其爲歷世所矜重可知也、虎又書<sup>(27)</sup>

「虎」(朱文圓印)、「湖南」(白文方印)



此卷是日本國滋賀縣（近江之國）生的人藤井家第四代之藤井善助收藏品

「有鄰館」（朱文長方印）

有鄰館所藏

「有鄰館珍藏印」（朱文方印）

藤井善三郎

「藤井善三郎」（白文方印）

藤井善嗣

「藤井善嗣」（朱文長方印）

二〇〇四年十一月二十一日於

「有鄰館」（朱文長方印）

### 鑑藏印

〔前綾〕

「蒼巖」（朱文方印）（梁清標）

「蕉林鑑定」（白文重廓方印）（梁清標）

「宜田」（朱文瓢印）（用印者未詳）

「桐城方氏家藏」（朱文長方印）（方觀承）

〔前綾貼付題簽〕

「方氏世寶」（朱文長方印）（方觀承）

〔前綾本紙騎縫〕

「蕉林書屋」（朱文長方印）（梁清標）

〔本紙首部〕

「□□□記」<sup>(30)</sup>（朱文方印）

「蕉林祕玩」（朱文方印）（梁清標）

〔本紙尾部〕

「黔寧王子子孫孫永保之」<sup>(31)</sup>（白文方印）

「大明安楚昭勇將軍李氏珍玩」<sup>(32)</sup>（朱文方印）

「蕉林梁氏書畫之印」（朱文方印）（梁清標）

〔後綾跋首騎縫〕

「蕉林書屋」（朱文長方印）（梁清標）

「有鄰館印」（朱文方印）

〔跋首部〕

「觀承」（白文方印）（方觀承）

「心癸書屋」（朱文方印）（用印者未詳）

「蒼巖子」（朱文圓印）（梁清標）

「蕉林」（朱文方印）（梁清標）

「觀其大略」（白文方印）（梁清標）

「有鄰館珍藏印」(朱文方印)

「藤井善三郎」(白文方印)

「藤井善嗣」(朱文長方印)

〔跋紙騎縫〕

「有鄰館印」(朱文方印)

## 注

- (1) 許道寧 九七〇頃～一〇五二頃。河間(河北省)の人とも、長安(陝西省西安)の人とも伝えられるが、主に長安で活躍した。李成の畫風を學び、特に林木、平遠、野水に優れ、李成の「氣」を得たと評された。生涯、在野の畫家であったが、仁宗朝の宰相・張士遜(後述)をはじめ、多くの士大夫たちの愛顧を受けたことが知られている。『聖朝名畫評』卷二、『圖畫見聞誌』卷四、『宣和畫譜』卷一。
- (2) 聖朝名畫評云 以下、「皆造其妙」までは、『聖朝名畫評』卷二、許道寧條にもとづく。
- (3) 癸亥 大正十二年(一九二三)年。
- (4) 康熙甲寅秋日棠村重裝 康熙十三年(一六七四)。棠村は收藏家の梁清標(一六二〇～九一)のこと。字は玉立、又の字は棠村、號は蕉林、蒼巖など。眞定(河北省正定)の人。官は保和殿大學士。なお、本圖は昭和四十七年(一九七二)から四十九年にかけて岡岩太郎氏により修理された。
- (5) 眞定梁相國 前注の梁清標のこと。
- (6) 沈凡民 沈鳳(一六八五～一七五五)、字凡民、號補蘿、飄溟、樊溟、凡翁、謙齋など。江陰(江蘇省)の人。官は南河同知。書は王澍に習い、篆刻、書畫に優れた。
- (7) 秋岳先生 收藏家の曹溶(一六一三～八五)のこと。字は秋岳、一字は潔躬、號は倦圃。秀水(浙江省嘉興)の人。明の進士で、清では廣東布政使などを務めた。
- (8) 按圖畫見聞志 以下、「唯有長安許道寧」までは、『圖畫見聞誌』卷四、許道寧條にもとづく。
- (9) 張文懿相國 北宋の宰相・張士遜(九六四～一〇四九)、字は順之、諡は文懿。陽城(湖北省老河口)の人。『宋史』卷三一。
- (10) 營丘 北宋山水畫家の李成(九一九～六七)を、出身地の青州(山東省)の汎稱で呼んだもの。
- (11) 葉杜若 未詳。

(12) 王澐 一六六八〜一七三九、または一七四三。字は

若林、翦林、號は虛舟、竹雲など。金壇（江蘇省）の人。康熙五十一年（一七一二）の進士で、吏部員外郎などを務めた。帖學派の名家であるが碑にも學び、楷行草のほか篆書にもすぐれた。

(13) 程荔江 未詳。

(14) 唐文皇論右軍書云、烟霏霧結、勢欲斷而還連 『珊瑚網』卷二四上、『式古堂書畫彙考』卷一に錄される「唐

文皇書右軍書後」に見える語にもとづく。なお、王澐『竹雲題跋』卷一、二、三にも引用がある。

(15) 馬夏輩剩水殘山 『珊瑚網』卷二九、「馬待詔鶴荒山水圖」に「評畫者謂、遠畫多剩水殘山、不過南渡偏安

風景耳」とある。また、卷三〇、「夏珪長江萬里圖」にも「意遠、筆精工莫比、只許馬遠齋稱雄、中原殷富百不寫、良工豈是無心者、恐將比物觸君壞、恰宜剩水殘山也」とある。

(16) 辛亥 雍正九年（一七三二）。

(17) 補蘿散人沈謙 注（6）参照。

(18) 劉道醇評 「命意狂逸」から「得李成之氣」までは

注（2）前掲書にもとづく。

(19) 郭若虛云 以下、「別成一家體」までは『圖畫見聞誌』

卷四、許道寧條にもとづく。

(20) 江山積雪圖軸 未詳。

(21) 出宣和畫譜 『宣和畫譜』卷一、許道寧條。

(22) 甲午 政和四年（一一一四）。

(23) 小川尙簡齋 小川爲次郎（一八五二〜一九二六）號

は簡齋、日本信託銀行、阪神電鐵等の取締役を歴任。

關西における中國書畫收集家の一人。

(24) 楊昇 唐代の人物畫家。『歷代名畫記』卷九、『宣和

畫譜』卷五。擬古的な傳稱作品が複数知られる。『南宗衣鉢』第一集（博文堂、一九一六年）には、「雪山朝霽圖」が掲載されている。内藤湖南は『支那繪畫史』の唐朝（上）で王維と張璪を新派、李思訓を舊派とし「この新舊の中間を行つたものと思はるゝものに楊昇の繪がある。それは着色であつて、筆力をよく現はした方から言えば新派、金碧といふ方から見ると舊派である」と述べている。

(25) 宣和譜所錄山觀蕭寺圖 注（21）前掲書。

(26) 光丞中立 光丞は李成に没後に贈られた光祿寺丞の

略稱、中立は范寬の字。

(27) 癸亥 大正十二年(一九二三)。なお、本跋文は『湖

南全集』卷一四の「湖南文存」卷八に収録されるが、月日は略されている。

(28) 黔寧王子孫永保之印 明初の功臣で、洪武二十五年(一三九二)に黔寧王に封ぜられた沐英を祖とする沐家の收藏印(後出)が押される。『明史』卷一二六、沐英傳。

(29) 方恪敏 方觀承(一六九八〜一七六八)の諡。字は遐穀、號は問亭、一號は宜田。桐城(安徽省)の人。官は直隸總督に至った。鑑藏印(後出)が押される。

(30) 「□□□記」 元以前に遡ると思われる古印だが、末尾の「記」以外は未讀である。

(31) 「黔寧王子孫永保之」 注(28)参照。

(32) 「大明安楚昭勇將軍李氏珍玩」 李氏については未詳であるが、同文異體の印が、傳祚序「長堤歸牧圖」(臺北・故宮博物院)に押されている(参考文献に挙げた曾布川氏の論考による)。『故宮書畫錄』一、一七七〜一七八頁。

## 備考

畫の冒頭に押された古印が判讀不能のため、元以前の傳來については分かっていない。明代の鑑藏印として黔寧王に封ぜられた沐家の印および李氏の印があり、清に入ってから、梁清標が入手した(題簽、鑑藏印)。その後、曹溶を経て、沈鳳の所藏となった(王澐跋)。沈鳳から程荔江に贈られ(沈鳳跋)、方觀承に渡った(鑑藏印)。現在の題名は、梁清標の題簽に基づいている。湖南は跋中で、『宣和畫譜』の「山觀蕭寺圖」を想起しており、高く評價して自らの『支那繪畫史』にも掲載した。昭和二十七年(一九五二)、重要文化財に指定。

## 著錄

コロタイプ複製：大正十五年(一九二六)九月廿八日印刷、大正十五年十月一日發行、非賣品。原卷收藏者 藤井善助、著作兼發行者 園田耕作、印刷者 小林忠治郎。

『唐宋元明名畫大觀』(大塚巧藝社、一九二九年) 三一頁

原田謹次郎『日本現在支那名畫目錄』(文求堂書店、一九三八) 二一頁

『有鄰大觀』字號(有鄰館、一九四二年)

## 参考文献

曾布川寛「許道寧の傳記と山水様式に關する一考察」(『東方學報 京都』五二冊、一九八〇年。同氏『中國美術の圖像と様式』中央公論美術出版、二〇〇六年所收)

塚本麿充「秋山蕭寺圖」解説(『崇高なる山水 中國・朝鮮・

李郭系山水畫の系譜』大和文華館、二〇〇八年)

〔竹浪遠〕

## 十 秋塘圖 傳趙令穰筆

重要文化財 大和文華館

北宋

絹本墨畫淡彩

二二・二×二四・三

### 舊内箱蓋表

山水 趙大年筆<sup>(1)(2)</sup>

### 傳來書

〔封紙〕

傳來書

〔本紙〕

記

一、趙大年山水幅、箱書常信筆<sup>(3)</sup>

右山水小幀ハ、元仙臺伊達公珍藏中ノ一ナリシガ、公常信<sup>(4)</sup>

ノ畫技ヲ嘉ミシ、屢々延見シ給フ時、常信此畫ヲ展閱シテ

賞鑑スルヲ以テ、公遂ニ愛ヲ割テ常信ニ惠ミ給フ、因テ門

外不出ノ至寶トシテ、代々我家ニ傳來候處、今般貴殿ノ御

懇望ニ因リテ此幅ヲ御讓リ申上候間、永ク貴家ニ於テ寶愛

珍重セラルレハ、誠ニ慶幸ノ至リニ候也

明治廿四年<sup>(5)</sup>十一月一日、常信九世孫狩野謙柄<sup>(6)</sup>

「狩野」(白文方印)

原富太郎殿<sup>(7)</sup>

## 注

- (1) 趙大年 趙令穰(??一〇六一〜一一〇〇?)、字大年。北宋・太祖五世の子孫。「小景畫」を得意としたという。

(2) 狩野謙柄の傳來書によれば、狩野常信筆(後述)。

- (3) 常信 狩野常信(一六三六〜一七一三)、通稱右近、號養樸、古河叟など。慶安三年(一六五〇)、父狩野尙信(一六〇七〜一七一九)の跡(木挽町狩野家)を繼ぐ。

(4) 仙臺伊達公 仙臺藩第四代藩主伊達綱村(一六五九〜一七一九)、あるいは常信を畫の師としたという五代藩主伊達吉村(一六八〇〜一七五一、一七〇三年家督相續)。

(5) 明治廿四年 一九〇一年。

- (6) 狩野謙柄 未詳。木挽町狩野家十代目當主狩野雅信(一八二三〜八〇)の子か。

(7) 原富太郎 一八六八〜一九三九。號三溪。横濱で生

糸貿易商を營む傍ら、東洋の古美術品を蒐集した。大和文華館初代館長矢代幸雄(一八九〇〜一九七五)は若い頃に三溪の薰陶を受け、東洋美術への關心を深めたという。戦後矢代が蒐集した大和文華館のコレクションには、傳毛益筆「萱草遊狗圖」・「蜀葵遊猫圖」など三溪舊藏の名品が多く含まれる。

## 備考

狩野謙柄の傳來書によれば、本圖は仙臺の伊達綱村あるいは吉村から狩野常信に下賜されたもので、その後は木挽町狩野家に代々受け繼がれた。舊箱には常信の箱書がある。明治三十四年、常信の九世孫謙柄から原富太郎に譲渡され、戦後、矢代幸雄の購入によって大和文華館の所藏となった。

本圖は江戸時代には單に「山水」と呼ばれていたが(常信箱書)、描寫されたモチーフや季節・時間への考察が踏まえられて、「秋汀殘照」(「三溪先生の古美術手記」)、「江汀群鳧圖」(『國華』四一)、「秋汀圖」(『眞美大觀』一九)、「暮林群鴉圖」(『東洋美術大觀』八、『宋元名畫集』續)、「River Landscape in Mist with Geese and Flocking Crows」(Oswald Siren,

*Chinese Painting*, 3) などの題が付けられ、現在は「秋塘圖」の名が定着している。

塚本麿充『大和文華館の宋代繪畫』(大和文華館、二〇一〇年)四、五七―六六頁

〔植松瑞希〕

### 参考文献

- 「趙大年」(『國華』四一、一八九三年)
- 田島志一編『眞美大觀』一九(日本眞美協會、一九〇八年)
- 田島志一編『東洋美術大觀』八(審美書院、一九一〇年)
- 『宋元名畫集』續(聚樂社、一九三八年)
- Osvald Siren, *Chinese Painting*, 3, New York: Hacker Art Books, 1959
- 鈴木敬「新重要文化財 傳趙大年山水圖」(『MUSEUM』一〇〇、一九五九年)
- 米澤嘉圃「傳趙令穰秋塘圖について」(『大和文華』三一、一九五九年)
- 矢代幸雄「三溪先生の古美術手記」(『忘れ得ぬ人々』岩波書店、一九八四年)
- 板倉聖哲「傳趙令穰「秋塘圖」(大和文華館藏)の史的位罫」(『MUSEUM』五四二、一九九六年)
- 小川裕充「一六 傳趙令穰 秋塘圖」(『臥遊 中國山水畫その世界』中央公論美術出版、二〇〇八年)

擔當者一覽

執筆

西上 實（京都國立博物館名譽館員）

弓野隆之（大阪府立美術館學藝員）

竹浪 遠（黑川古文化研究所研究員）

西尾 步（立命館大學非常勤講師）

植松瑞希（大和文華館學藝員）

編集

瀨川敬也（觀峰館學藝員）

寺前公基（觀峰館學藝員）

關西九館所藏 中國書畫錄

二〇一三年三月三十一日發行

編集・發行 關西中國書畫コレクション研究會

事務局所在地 公益財團法人 黑川古文化研究所

〒六六二 〇〇八一

兵庫縣西宮市苦樂園三番町一四 五〇

助成 公益財團法人 ポーラ美術振興財團

公益財團法人 三菱財團

關西中國書畫コレクション研究會HP公開

(<http://www.kansai-chinese-art.net>) PDF版